国東半島「田染」名勝調査報告書

豊後高田市教育委員会

国東半島「田染」名勝調査報告書

（田染耶馬名勝調査事業）

2019 年（平成 31）3 月

豊後高田市教育委員会

鍋　山

喜久山

田染小崎の岩峰（夕日岩屋など）

夕日岩屋からの眺望

ゼゼノサマ及びウトノアナ

穴井戸観音

鍋山（『大分縣写真帖』（明治４０年発行））

鍋山（『田染村志』（昭和７年発行））

例　　言

1　本書は豊後高田市教育委員会が、文化庁の補助事業を受けて実施した「田染耶馬名勝調査事業」の報告書である。

2　豊後高田市田染地区（田染蕗・田染横嶺・田染池部・田染真中・田染小崎・田染真木・田染相原・田染上野・田染平野）における名勝地について悉皆調査を行い、そのうち鍋山（田染上野）・喜久山（田染真中）・朝日岩屋及び夕日岩屋（田染真中及び田染小崎）・穴井戸観音（田染真中）・ウトノアナ及びゼゼノサマ（田染平野）・西叡山（小田原・田染小崎・田染横嶺）の６ヶ所について特定調査を実施した。

3　地図等は豊後高田市耕地林業課が所有する 1/5,000 森林基本図及び国土地理院発行の 1/25,000 地形図を使用し、３Ｄ表示をするための GIS データは Google earth に対応できるようにした。

4　本書の座標は世界測地系を用いた。

5　調査対象の悉皆調査及び調査の一部を別府大学文化財研究所に委託した（平成 29 年度受託研究）。

6　本調査研究については、文化庁文化財第二課平澤毅 主任文化財調査官、大分県教育庁文化課山路康弘氏に指導･助言をいただいた。また、江戸時代に田染地域を描いた書画の調査については、杵築市教育委員会の阿南雅希氏の協力を得た。

7　本書の執筆は第１章・第２章・第３章の第１～４節及び６節、第５章は豊後高田市教育委員会文化財室（以下、事務局）が担当した。第３章の第５節は、別府大学・飯沼賢司氏が作成したものに、事務局が加筆を行った。第４章は田染耶馬名勝調査委員会委員や周辺分野の専門家の寄稿をまとめて作成した。

巻末資料（調査カード）は、別府大学文化財研究所が受託研究で作成したものの一部を掲載した。地理情報のデータシステムは別府大学文化財研究所が作成したものをＣＤに焼き付けて添付した。

本書全体の編集は事務局が担当した。

目　　次

第１章　事業概要 …… 5
第２章　田染地区の名勝地の周辺環境 …… 7
　第１節　地理的環境 …… 7
　第２節　歴史的環境 …… 9
第３章　田染地区の名勝地に関する調査 …… 10
　第１節　調査の概要 …… 10
　第２節　田染地区の概要 …… 11
　第３節　悉皆調査の成果 …… 13
　　①　村絵図の調査 …… 13
　　②　現地踏査 …… 13
　　③　文献調査 …… 13
　　④　小結 …… 14
　第４節　特定調査の対象 …… 15
　第５節　田染地区の名勝地の概要 …… 17
　　①　田染地区の名勝地としての評価 …… 17
　　②　村絵図における岩峰の表現 …… 19
　第６節　特定調査地のまとめ …… 22
　（１）鍋山 …… 22
　（２）喜久山 …… 26
　（３）朝日岩屋及び夕日岩屋 …… 28
　（４）穴井戸観音 …… 30
　（５）ウトノアナ及びゼゼノサマ …… 31
　（６）西叡山 …… 32
第４章　田染地区の名勝地における周辺分野の価値 …… 35
　第１節　文化的景観としての田染、名勝としての田染（飯沼賢司） …… 35
　第２節　地質からみた田染耶馬周辺の名勝としての価値（竹村恵二）…… 40
　第３節　景観の価値（黒田乃生）…… 44
　第４節　「名勝」でどうする？　～名勝の活用を考える～（吉永浩二） …… 48
　第５節　百八十三ヶ所霊場と景観（岡部　功）…… 54
　第６節　田染地域の地形（千田　昇）…… 57
　第７節　井上円了の名勝観と田染・鍋山（三浦節夫）…… 59
　第８節　地域の文化財としての田染荘（豊後高田市教育委員会）…… 61
第５章　総括 …… 63

巻末資料

第１章　事業概要

平成 26 ～ 27 年度に実施された「大分県の名勝に関する特定の調査研究事業」の個別調査の対象とならなかった田染地区における保護すべき名勝地を特定するべく、平成 29 ～ 30 年度の 2 ヶ年で、文化庁の国宝重要文化財等保存整備費補助金を受けて、名勝調査を実施した。

当初、調査の主題を「田染耶馬」としていたが、岩峰に限らず幅広い名勝地を対象とし、耶馬溪を標榜せずに地域の名勝地の価値を見定める必要があるとして、「名勝としての田染」の調査検討を実施することにした。

田染地区には、江戸時代前期の村落を描いたとされる村絵図が残っており、それを基礎資料として、ランドマークとなる岩峰・山・川・道・寺院などを、現状の景観と比較しながら、村絵図に描かれた対象物の地理情報の特定を実施した。その後、田染地区に特有の景観を持つ 6 ヶ所の名勝地（鍋山、喜久山、朝日岩屋及び夕日岩屋、穴井戸観音、ウトノアナ及びゼゼノサマ、西叡山）の抽出を行い、それぞれにどのような価値があるか、現地踏査及び周辺分野の専門家の寄稿によって、構成要素の確認等を実施した。

なお、調査研究を円滑に推進するため、田染耶馬名勝調査委員会を組織し、本事業についての指導・助言を仰いだ。また、悉皆調査及び詳細調査の一部を別府大学文化財研究所へ委託して、事業を実施した。

調査体制は下記の通りである。

○田染耶馬名勝調査委員会

委　員　長　　飯沼　賢司（別府大学教授　日本中世史）
副 委 員 長　　吉永　浩二（大分大学非常勤講師　文化財活用）
委　　員　　段上　達雄（別府大学教授　民俗学）
委　　員　　竹村　恵二（京都大学　名誉教授　地質学）
委　　員　　黒田　乃生（筑波大学教授　造園学）
委　　員　　岡部　功　（豊後高田市文化財保護審議会委員　地域有識者）

○調査指導

指　　導　　平澤　毅　（文化庁文化財第二課　文化財主任調査官）
指　　導　　山路　康弘（大分県教育庁文化課）

○その他の原稿執筆依頼者

千田　昇　（大分大学名誉教授　地形学）
三浦　節夫（東洋大学教授　井上円了学術センター）

○事務局　豊後高田市教育委員会文化財室（大分県豊後高田市中真玉２１４４－１２）

教　育　長　　河野　潔
室　　長　　板井　浩
専　門　員　　岩男　真吾
主　　任　　大山　琢央
主　　任　　松本　卓也（事業担当）

○調査委託　別府大学文化財研究所（大分県別府市北石垣８２）

【調査経過】

平成２９年度

６月　９日	田染耶馬名勝調査委員会　委員委嘱（任命）
〃	第１回　田染耶馬名勝調査委員会
委員会後	岩峰・文化財分布図作成、共有
６月２９日	別府大学文化財研究所と受託研究「田染地域における名勝調査」締結
７月　１日	高解像度カメラによる村絵図の撮影
８～９月	別府大学文化財研究所　現地踏査
２月１６日	田染耶馬名勝調査委員会　現地視察
〃	田染組村絵図が「島原藩領田染組村絵図」として、県指定有形文化財（歴史資料）に指定
３月１３日	第２回　田染耶馬名勝調査委員会
３月28～29日	平澤毅文化財主任調査官　現地視察
３月３０日	受託研究「田染地域における名勝調査」のとりまとめ

平成３０年度

６月２５日	杵築市教育委員会・阿南雅希氏より十市石谷「鍋岩図」について報告
７月３０日	第３回　田染耶馬名勝調査委員会
７月３１日	平澤毅文化財主任調査官　現地視察
１０月１１日	三浦節夫氏（東洋大学教授）視察
１１月１７日	千田　昇氏（大分大学名誉教授）視察
～１１月末	調査報告書の個別調査部分原稿作成
～１月上旬	周辺分野の専門家の寄稿原稿収集
２月　４日	第４回　田染耶馬名勝調査委員会
３月２５日	国東半島「田染」名勝調査報告書刊行
３月２９日	田染耶馬名勝調査研究事業の完了

第２章　田染地区の名勝地の周辺環境

第１節　地理的環境

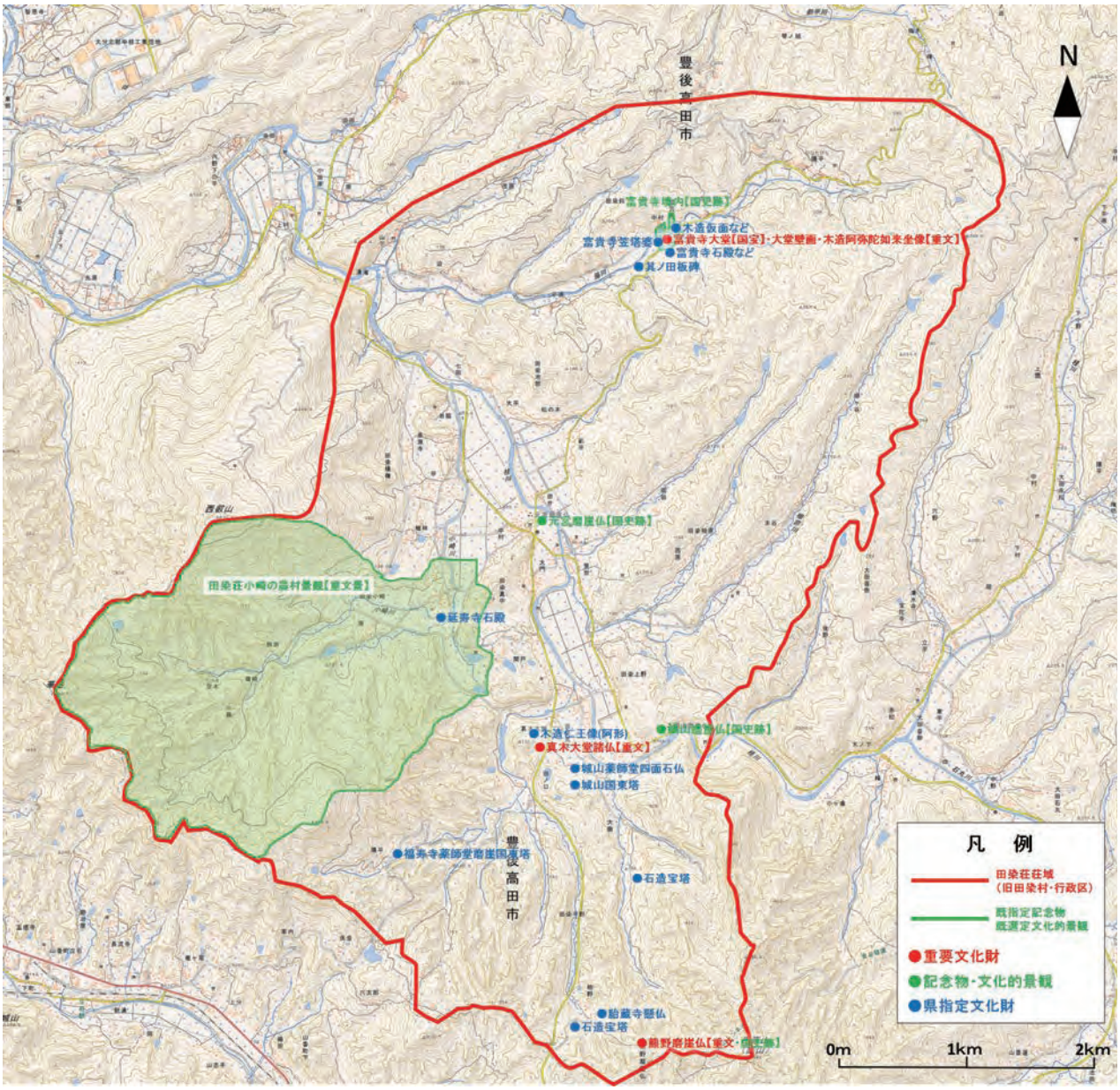
大分県の北東部に位置する国東半島は、中央の両子山の火山活動によって形成された円形の半島である。大分県北・西・中部の大部分を占める領家帯と呼ばれる構造体域に半島全体が位置しており、花崗岩類と変成岩類で特徴付けられている。この古い時代の地質を基盤として、国東半島には円形に両子火山群が形成されており（新生代第四紀）、半島全域に広く安山岩・凝灰岩の混在する地質が見られる。一方で半島の付け根にあたる田染地区・山香地区などにおいては、大分県北部を覆う凝灰角礫岩質の火砕流堆積物（新生代新第三紀・古期宇佐火山岩類の火山砕屑岩）における地形との境界になっており、田染盆地や桂川流域を挟んで２つの地質が拝みあうような地質となっている。

地図：田染地区位置図

（注）地理院地図(電子国土Web)より作成 平成31年3月12日閲覧

田染地区においては、熊野磨崖仏【重要文化財･史跡】をはじめとして、鍋山磨崖仏【史跡】、元宮磨崖仏【史跡】、大門坊磨崖仏【市指定史跡】など、大型の磨崖仏が見られることが特徴であるが、すべて古期宇佐火山岩類の火山砕屑岩の地質の範囲に作られている。また、国東半島では放射状に山地と谷地が広がっている地形が多くあり、山地における凝灰角礫岩層が侵食作用によって岩峰が屹立する耶馬渓式景観を呈している。半島内では、既に文化庁による調査によって名勝的価値付けがなされ、天念寺耶馬及び無動寺耶馬、中山仙境（夷谷）、文殊耶馬の３点については既に名勝に指定されている所である。田染地区においても同様に屹立する岩峰を見ることができるが、田染地区においては磨崖仏と同様に古期宇佐火山岩類の火山砕屑岩の地質側に見られる特徴である。

田染地区を流れる桂川は、杵築市大田村にある源流を辿れば両子山付近を水源とし、豊後高田市と杵築市山香町との境に聳える田原山（鋸山）を水源とする支流などと合流しながら田染上野地区に至る。その後、田染平野から流れる熊野川、田染小崎から流れる小崎川、田染蕗から流れる蕗川、都甲谷から流れる都甲川と合流しながら豊後高田市街へと流れ、周防灘に注いでいる。桂川における沖積地は国東半島でも最大のものであり、上野条里・川原条里といった古代・国東半島の開拓とも関連が深く、特に盆地状に広がる田染地区には宇佐宮の荘園・田染荘が開かれることとなった。緩やかな傾斜を持つ沖積地に形成された水田は､荘園村落遺跡として平成初頭より保存の取組が進められており、田染小崎の水田・村落景観については田染荘小崎の農村景観として国の重要文化的景観にも選定されている。



地図：田染地区　文化財分布図

(注)地理院地図(電子国土Web)より作成 平成31年3月12日閲覧

第２節　歴史的環境

田染地区における各時代の歴史的概要を述べる。

古代の田染地区には、比較的早い時期から開発の手が及んでいたようである。８～９世紀には田染盆地の中心で桂川流域である田染上野地区には、鍋山にあったイゼから水を引いて条里制の水田が拓かれたことが分かっている。残念ながら条里田遺構自体は昭和末から実施された圃場整備によって大部分を失ってしまっているが、当該地区の景観としては水田として現状も維持されている。

11 世紀には現・田染地区のほぼ全域を荘域として、宇佐宮の荘園・田染荘が成立した。荘官屋敷は田染小崎地区の延寿寺（尾崎屋敷跡）が比定地とされており、鎌倉時代後期における神領興行法に関する裁判の古文書と現地の小地名を突き合せることで、メートル単位での中世村落の復元が可能となっている。

古代～近世にかけて水資源の確保と緩やかな開拓によって、徐々に水田と集落が広がってきたと推定されている。田染荘は、元々は本郷・吉成名・糸永名といった少数の名で構成されていたが、鎌倉時代には既に多くの名が入り組んだ散在名の形態となっており、室町時代頃からは小規模な谷間の丘陵地にも棚田や小規模な水田が拓かれて集落名を形成していった。

一方、平安時代後期頃から田染地区には六郷山寺院の影響がより強くなったと考えられる。六郷山草創期に高山が西叡山に開かれると、六郷山でも初期に興隆した本山寺院が桂川沿いに開かれていくようになる。田染地区にも蕗浦阿弥陀寺（富貴寺、高山末寺）、喜久山（伝乗寺･本寺）、今熊野寺（胎蔵寺・喜久山末寺）が本山寺院に数えられ、富貴寺には現存する九州最古の木造建築物である富貴寺大堂（国宝）、喜久山の中心的な伽藍があったとされる真木大堂に平安時代の丈六仏（脇侍を含め９躯が全て重要文化財）、今熊野寺には熊野磨崖仏（重要文化財・国史跡）が残されており、往時の寺勢の華やかなりし頃の様子を知ることができる。高山自体は江戸時代にはすでに退転しており、現状ではその伽藍跡の所在すら不明なままである（本市小田原の内野地区の木造聖観音立像や、戦後に出土した経筒や僅かな土器片のみが高山の存在を今に伝えている）。

一般に六郷山寺院は、鎌倉時代から御家人をはじめとする武士からの押領を受けたとされ、南北朝時代の資料「六郷山本中末寺次第幷末寺四至等注文案」（『永弘文書』・以降「建武の注文」）には、そのことが寺院毎に詳細に記されるが、かえって武士による庇護を受けたであろう場合もある。中でも室町時代に武蔵郷から都甲谷に本拠を移し、田染地区を含め国東半島に広く領土を持っていた吉弘氏は、六郷山を積極的に保護したことで知られている。田染地区には大友被官の田原氏･古庄氏等が土着しており、その城郭も至る場所に残されている（烏帽子岳城・牧城・蕗政所など）。荘官田染氏（後期田染氏）においても、荘園屋敷を城郭化し、大友宗麟から一字を拝領し、耳川の合戦に従軍するなど、大友被官としての活動も見えるようになる。

宇佐宮の荘園としての田染荘は近世には消滅し、近世初期は小倉藩領（細川氏）の飛び地、高田藩を経て、17 世紀の中頃には、田染地区の大部分は島原藩の豊州御領に編入されることになる（当初、菊山村は天領分で、後に延岡藩の飛び地となる）。島原藩は元禄２年に、田染地区の状況を把握するために村絵図を作成しており、天保期の見直しの際に制作された写しが、田染支所・熊野村庄屋末裔の後藤氏などに伝来していた。現在は豊後高田市の所有となっており、「島原藩領田染組村絵図」として県指定有形文化財となっている（絵図の詳細については、第３章第５節及び巻末資料で分析したので参照）。

明治 22 年には、田染組に属した村が町村制の施行により田染村となった。陸上交通が発達していく中で、国東半島の地形自体が鉄道敷設等に不向きなものとみなされ、田染村においても諸開発があまり及ばない地域となった。

昭和 29 年には豊後高田市と合併し、平成 17 年に豊後高田市は真玉町・香々地町と合併し、現在に至っている。

第３章　田染地区の名勝地に関する調査

第１節　調査の概要

・調査主題：田染地域の荘園・信仰に関する岩峰の名勝地

国東半島・田染地区には、中世の景観を色濃く残す荘園村落遺跡として注目されるだけでなく、六郷山と呼ばれる仏教文化の初期的・大規模な遺産が今に息づく土地である。これらの要素が生まれ、引き継がれてきた背景には、大分県北部･国東半島に特徴づけられる耶馬と呼ばれる岩峰や霊峰など、自然とその中で営まれた人々の生活に関連する要因が考えられる。本調査では、地質・景観・歴史・民俗の各分野から、田染地区に形成された風致景観の名勝的価値を明らかにすることを目的とする。

調査のコンセプトは以下の３点を解明することを目的とした。

1　田染地区の地勢的な特徴である岩峰の評価

2　田染地区における特徴的な文化財である荘園・六郷山寺院と関連した景観としての評価

3　芸術等における多様な表現から見える今後の保存活用を見据えた地域の文化財としての意義

調査は、平成 29 年度に事業対象の抽出を行い、田染地区の名勝地の実態を把握するため、①村絵図と現在地で対照して現存・確認できる地点のデータベースを作成（Google earth 上で立体的に確認可能)、②耶馬・岩峰等の現地調査、③各種史資料・伝承などに見える田染地区の名勝地としての評価の調査、を実施した。その結果、田染地区最大の特徴である中近世から継承される風致（農村景観や岩峰景観など）の状態を岩峰部分も含めて確認しつつ、文人・画家らが見出した調査主題「田染地区における名勝」の特徴を見出すことができると考えた。

そこで、平成 29 年度の成果を元に、平成 30 年度には典型的又は独特の景観を示すと考えられる名勝地５箇所「鍋山（南屏峡)」「夕日岩屋・朝日岩屋」「ウトノアナ及びゼゼノサマ (熊野)」「喜久山（菊山)」「高山（西叡山)」を抽出し、絵図上における表現の確認と、歴史・伝承等についての特定調査を行った。また、田染地区全域における名勝地を取り上げた「田染八景」について、踏査及び文献調査を行い、各時代における景観・評価の変遷を追った。その成果として、田染地区の全域について、村絵図の時代から景観がほぼ継承されている場所は多く残っており、田染八景のすべての場所を特定することができた。また、貝原益軒・井上円了・十市石谷らにおける田染地区の名勝地に関する評価について、文献・絵画上から追跡できる部分があることを突き止め、その評価に連続性があることが把握できた。

【調査概要のフローチャート】

平成２９年度

１、対象の抽出
①文献調査
・史料、地誌、絵画など
②村絵図を使用した現地調査
・村絵図の分析（高解像度カメラ撮影等）
・現地踏査と地理情報取得
・３Ｄの地図へプロット

２、名勝調査委員会の開催
・現地確認等による調査内容共有

平成３０年度

１、特定調査
①周辺分野の専門的見地の寄稿
・日本史、民俗、地質、景観、
文化財活用、地域、地形、井上円了
②名勝的価値の抽出

２、名勝調査委員会の開催
①報告書内容
②今後の展望

報告書の作成

第２節　田染地区・田染耶馬の概要

田染地区は、豊後高田市の南端、国東半島では西の付け根の部分に位置し、かつては中世宇佐宮の根本荘園である田染荘が開かれた領域とほぼ符合する。中世に登場した名田の内、まとまって存在した集落名などが村へと進展し、江戸時代には 16 ヶ村に再編された（蕗村・池部村・横嶺村・小崎村・相原村・真木村・中村・間戸村・菊山村・上野村・観音堂村・陽平村・熊野村・大曲村・田野口村・薗木村）。このエリアの内、14 ヶ村における村絵図が残されており、近世における田染地区の景観を復元する最重要な史料の１つとして位置付けられている。近代に入り、田染地区が西国東郡田染村となると、大字として幾つかの村をまとめ、その頭文字などを取って、横嶺村と小崎村は嶺崎地区、真木村・中村・間戸村・菊山村は真中地区、上野村と観音堂村が上野地区、陽平村・熊野村・大曲村・田野口村･薗木村が平野地区と再編された。そして、平成 17 年（2005）に、豊後高田市･真玉町･香々地町の 3 市町が合併した際に、市街地部分の旧町名復活運動に合わせて、田染地区の一部の地区名が再編された（嶺崎地区が田染横嶺・田染小崎、真中地区から旧真木村範囲が田染真木として独立。全ての地区名の頭に田染が付くようになった）。

全体として近代化に伴う開発を受けなかった地域であり、現状としても農村景観や寺院景観が良好な形で残されていると評価を受ける地域である。中でも田染小崎地区については、水田の形状を維持しながらの圃場整備が実施され、中世～近世における荘園の景観を良く伝えている（現在は国の重要文化的景観に選定されている）。条理制の水田区画が確かめられた上野地区や真木地区では、古くから位置が変わらない堰（イゼ）の存在が古文書や発掘調査の検討からわかっており、こちらも中世からの風景を現在に伝えている重要な要素となっている。

他田染地区には、六郷山寺院の本山寺院が多く分布しており、富貴寺大堂・真木大堂・熊野磨崖仏といった仏教遺跡も多く分布している。いわゆる「耶馬」と呼ばれる険しい岩峰も多く、その中には岩屋と呼ばれる小寺院が分布し、六郷山の峯入りの舞台となっていた。「六郷山諸勤行幷諸堂役祭等目録写（安貞の目録）」や「六郷山本中末寺次第幷四至等注文案（建武の注文）」に見える中世の六郷山寺院は「〇〇岩屋」と「〇〇山」という名称でみられる場合がほとんどだが、「〇〇山」と呼ばれる場合は大規模で、隆盛を誇った寺院である場合が多い。田染地区は宇佐地域に近く、六郷山寺院初期に隆盛した寺院が多い。具体的には「高山（現在の西叡山にあった古代寺院）」「喜久山（真木大堂周辺に中心があったとされる古代寺院）」はそれに当てはまる。

険峻な谷が多い国東半島において、田染地区は珍しい盆地状の地形をしている。その為、他の谷と比べると視界が広くひろがっており、遠くの山まで見えることもある。南側には田原山（鋸山）、西側には華ヶ岳・西叡山・烏帽子岳など 500 ～ 700 メートル級に山に囲まれており、それらの山から伸びる小さな尾根が長く続いて村々を隔てている場所も多い。田染盆地の中央を流れ、その広くに水を届ける河川は桂川（支流に蕗川・小崎川・熊野川がある）であり、西叡山とあわせて京都の地名を移してきたものだと伝わっている。両者ともに『豊後国志』（享和 3 年（1803 年）に完成）に記載があり、江戸時代以降には人々に親しまれていた事が分かる。

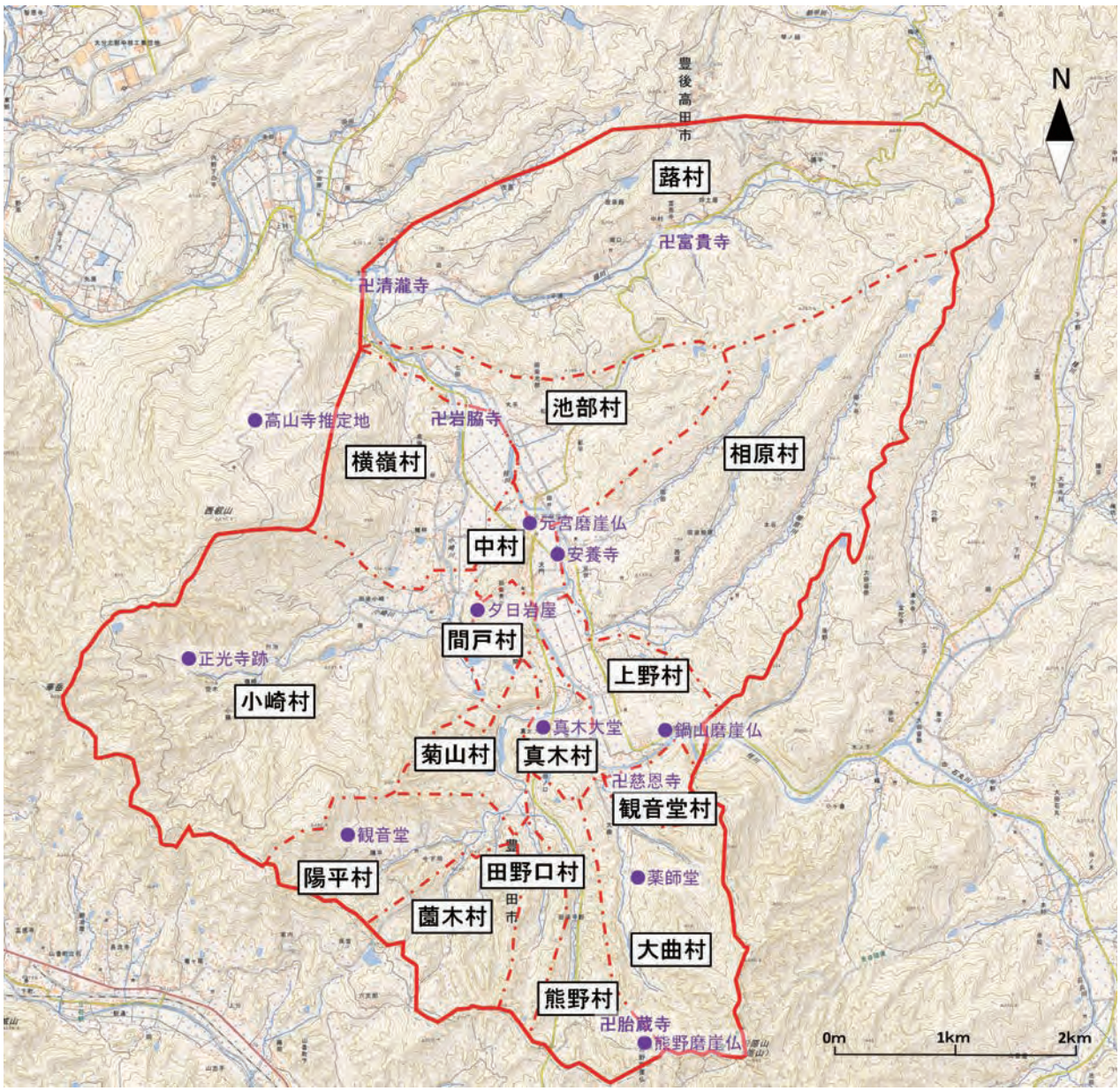
さて、本事業の名称にも使われた「田染耶馬」の語であるが、時期によって使用される範囲がまちまちである。耶馬というのは、文政元年（1818）に頼山陽が、豊前山国谷の山（やま）の音を、漢語風にあらわし、「耶馬溪山天下無」と漢詩に詠み込んだことが始まりである。その後は各地の奇岩からなる景勝地を、耶馬溪に準えて「〇〇の耶馬」「〇〇耶馬」と呼ぶことが多くなり、北は北海道から南は台湾にまで耶馬は存在する。

さて、田染地区においては、鍋山と呼ばれる奇岩の景勝地が明治時代末においては、すでに地域の人々によって「小耶馬溪」と呼ばれていたことが、明治 40 年の『大分県写真帖』や、井上円了『南

船北馬集』の同年の記事にも見える。大正 12 年発刊の地誌『西国東郡誌』では、「鍋山」をはじめ多くの奇岩連なる景勝地について言及はあるものの「〇〇耶馬」という名勝は見られず、大正時代に選定された大分県の景勝地においても、「田染鍋山」という表記になっている。

一方で、昭和 7 年の『田染村志』においては、田染地区に優れた岩山の景勝地「田染耶馬」があり、それは「熊野耶馬」「鍋山耶馬」「間戸耶馬」の 3 つに分けられると記してある。そこから更に時代が下ると、熊野耶馬は熊野磨崖仏・鋸山として、間戸耶馬は朝日岩屋・夕日岩屋としてが強く認識され、鍋山の部分が「田染耶馬」として定着していくことになるようである。現在で地域の人に田染耶馬の話を聞けば、鍋山のことを指すことになるだろう。

更には、昭和末～平成初頭に行われた、県の親水型の河川整備「ふれあいの河川整備事業」によって、公園の名称が定められていったようであり、鍋山周辺に関しては「三の宮の景」という名称が付けられた。現在では鍋山周辺を指して「三の宮の景（田染耶馬）」という名称が最も使われているというのが現状である。



地図：田染地区　旧村名範囲図

（注）地理院地図(電子国土Web)より作成 平成31年3月12日閲覧

第３節　悉皆調査の成果

平成 26 ～ 27 年度に実施された文化庁による「大分県名勝に関する特定の調査研究事業（国東半島六郷山寺院の名勝調査」)」においては、宗派を分かたず寺院景観を広く収集し、詳細調査では寺院後背などに聳える「耶馬」に注目し、特に六郷山寺院の寺院８ヶ所（天念寺・無動寺・応暦寺・夷石屋・千燈寺・岩戸寺・文殊仙寺・両子寺）を対象に名勝地の特定を実施した。その際、田染地区においては、寺院遺構等が現在に目に見える形で残っていないものが多いこと、六郷山寺院との直接的な関係性が分かる耶馬景観が分布しているものの少ない、または小規模であることから詳細調査の対象からは外れてしまった経緯がある。

確かに田染地区の耶馬景観を見てみると、六郷山寺院に関連する名勝地として考えた場合、歴史的なバックグラウンドなどについて、他に比して弱い部分がある。しかし、16 ヶ村中 14 ヶ村の村絵図を残す当地区については、近世前期における集落の様子がよく分かるという特徴があり、村絵図を活用した悉皆調査を実施する必要であると判断した。

今回は基礎調査として、ベースマップ上に村絵図に描かれた要素を位置情報として落としていく調査を実施した。また、村絵図に描かれる自然景観については、一枚の村絵図に幾つか視点を定めて描かれていることが指摘されていたため、３D 表示が可能で多くの人が参照できる Google earth を使ってベースマップを作成した（添付 CD 参照)。

関連文献調査については、時代を問わず、田染地区を訪れた人物の評価を集めた。文化庁の調査で使用した『大分縣社寺名勝圖録』における社寺は、西国東郡においては、現大田村や本市都甲地区のものがほとんどで、田染地区のものは掲載されていなかった。また、『田染村志』編纂のために昭和初期頃に撮影された写真が豊富に残っているので、その分析も行った。

①村絵図の調査

豊後高田市所有の村絵図について、高い解像度での分析を実施するために、史料寄託先の大分県立歴史博物館において改めて写真撮影を実施した。

今回の撮影により、描きぶり・記載・色などについて、より詳細な分析が可能になった。特に細い線で描かれる「地目の境界」「道」についても、新たに確認できた部分があった。

②現地踏査

撮影した村絵図及び森林基本図をベースマップにしながら、GPS のデータを取得していく作業を行った。今回は細かいものを含めて、全部で 139 ヶ所の位置情報を取得できた。

ただし、岩山の頂上など現状で確認ができない場所も多々存在したため、GIS ソフトによる位置情報による補完を行っている。その際には、ドローン映像を使用して、目標としている岩と航空写真にズレが起こらないような検討を実施している。

また、聞き取りによって現地の小地名・岩や露頭の名称の調査を実施している。

③文献調査

田染地区における景勝地・周辺景観の評価を詳らかにするための文献調査を実施した。

重要と思われる田染八景は杵築藩の絵師･十市石谷が設定した画題であったことが判明したたため、杵築市教育委員会の阿南雅希氏に協力をいただき、杵築藩系の絵師が同様の絵画を残していないかを確認した。その結果、現状では『十市石谷画冊』という資料に「鍋岩」と題された絵画を発見した。

文化庁調査における資料集を確認した上では、貝原益軒の『豊国紀行』における「なべ山」の記載を発見した他、昭和初頭に編纂された地誌『田染村誌』の記載から井上円了関係資料に辿り着いた。

④小結

今回の悉皆調査では、田染地区において、以前の荘園調査でも行われていない切り口として、田染地区全域の風致景観について詳細に検討する為の基礎的な資料が収集できた。現地と村絵図との比較検討を、地理情報ベースで詳細に実施でき、それらを公開・閲覧しやすいデータとして編集できた。また、村絵図を作成する際の視点場についても深い検討が加えられ、当時の人々の景観認知等についても一歩進んだ検討ができた。

文献調査においては、貝原益軒『豊国紀行』や、井上円了『南船北馬集』といった史料に、景勝地としての記載が見つかり、近世後期に画題として設定された田染八景についても、そのすべてを特定することができ、近世以降に田染地区にどのような名勝的評価が形成されていったかが追跡できた。

【村絵図の構成要素における位置情報取得地点のまとめ】

第４節　特定調査の対象

悉皆調査の成果から、岩峰や山などの自然景観が江戸時代の村絵図にもしっかりと表現され、その他の文献などから見ても、江戸時代には人々の間で、ランドマークや信仰の対象、名勝地として認識されていることが分かった。

ランドマークとしての検討については、各岩に詳細に名称が付けられていることを再度確認することができた。ウトノアナ・ゼゼノサマ（熊野）、子持ち岩（間戸）、釣鐘岩・線香岩・屏風岩・徳利岩・夫婦岩・障子岩、リョウさんが岩、戸無し戸の口（小崎）、大乗楽・小乗楽（菊山）、麦の畝（陽平村）を確認できた。

信仰の対象としての検討としては、岩峰上の祠・石造物などを中心に検討を加えた。現在では近づくことが難しい熊野村のウトノアナについてもドローンによる調査を実施し、石祠・石仏を確認することができた。

名勝地としての検討としては、文献上での評価の捜索と、田染八景に関するものを中心に調査した。田染八景（大堂梵鐘、熊岳山桜、桑川流蛍、池部群鷺、間戸涼蟾、本宮晴嵐、鍋崖叫猿・叡峰雪暁）は全ての場所が特定できた。

特定調査の対象としては、昭和初期には田染耶馬として挙げられた「熊野耶馬」「鍋山耶馬」「間戸耶馬」を中心的に取り上げ、独特な名称を持つなど、景勝地としての別個の価値を持つものは切り分けて記載をすることにした。そして、田染小崎地区と小田原地区の境に位置する西叡山については、田染地区だけでなく桂川流域における広い範囲におけるシンボリックな山であり、田染地区の風致・風景観に大きな影響を及ぼしているだろうことが分かったので、追加で調査を実施することにした。

（１）鍋山（豊後高田市田染上野）、（２）喜久山（豊後高田市田染真中）、（３）朝日岩屋及び夕日岩屋（豊後高田市田染真中及び田染小崎）、（４）穴井戸観音（豊後高田市田染真中）、（５）ウトノアナ及びゼゼノサマ（豊後高田市田染平野）、（６）西叡山（豊後高田市小田原・田染小崎・田染横嶺）の６箇所とした。

（１）鍋山

（２）喜久山

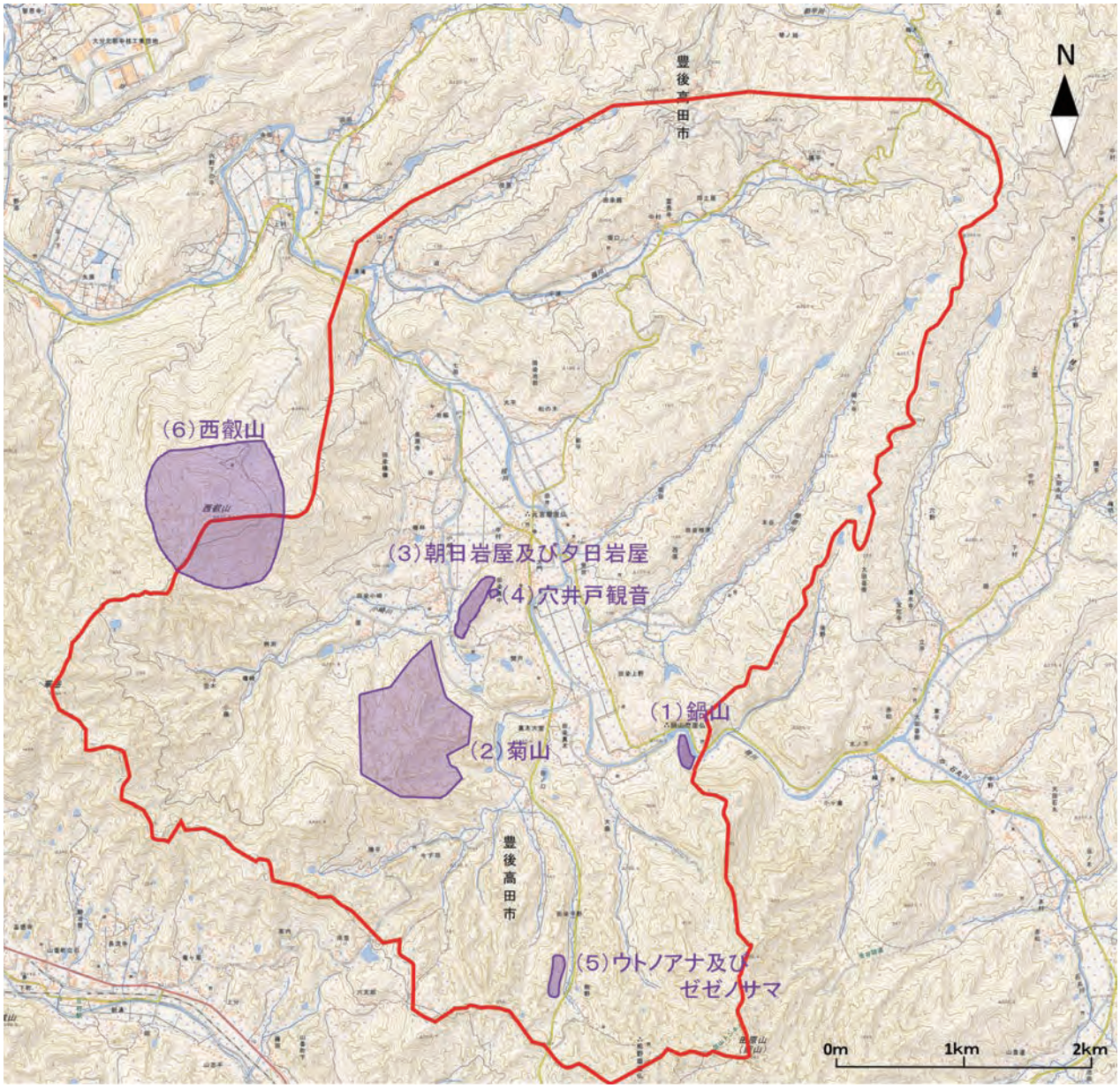
（３）朝日岩屋及び夕日岩屋

（４）穴井戸観音

（5）ウトノアナ及びゼゼノサマ

（6）西叡山

【特定調査対象箇所範囲図】



（注）地理院地図(電子国土Web)より作成 平成31年3月12日閲覧

第５節　田染地区の名勝地の概要

田染における名勝的価値付け

田染八景の登場　江戸時代の後半から､｢―景｣｢―境｣という言葉で景勝地を呼ぶことが盛んとなる。浮世絵や歌や俳句などの世界に美しい景色が描かれ､歌われる中で､景勝地に｢八景｣｢四景｣｢十二景｣などのすぐれた景観地を選定して、世にアピールするようになった。｢八景｣は、中国宋代 11 世紀の瀟湘（しょうしょう）八景（中国湖南省「山市晴嵐・漁村夕照・遠浦帰帆・瀟湘夜雨・煙寺晩鐘・洞庭秋月・平沙落雁・江天暮雪｣）が始まりだとされる。

日本最初の八景は「近江八景」で、これについて本居宣長も「もともろこしの国、なにがしの八景といふをならひてさだめたる」と『玉勝間』の中で述べている。近江八景は、明応９（1500）に関白近衛政家が近江に乱を避けて滞在していたとき、中国の瀟湘（しようしよう）八景になぞらえて詠んだのに始まるという。それは、堅田落雁、矢橋帰帆、勢田夕照、石山秋月、粟津晴嵐、唐崎夜雨、比良暮雪、三井晩鐘の八景である。絵画（浮世絵版画）作品としては江戸時代に狩野探幽，鳥居澄久，葛飾北斎、安藤広重などが描いているが，とくに安藤広重の名所絵図「近江八景」は有名である。また、葛飾北斎は「富嶽三十六景」も八景の変形である。以後、さらに「金沢八景」など全国で八景が選定されていった。

一方、風景を愛でることは、歌、俳句、漢詩文にも古くから見られるが、江戸時代、庶民の間で盛んになった俳句は、景勝地を人々に認識させるのに、浮世絵版画とともに大きな影響力を発揮した。中でも、松尾芭蕉（1664 年～ 1694 年）は、日本各地を旅し、その景勝を歌っている。国東半島でも、三浦梅園が天明５年（1785）に文殊仙寺境内において辺境の地、国東の景勝のすばらしさを世に伝えたいと考え「峨眉山十四境」を定めているが、その経緯を次のように書き記している。

> されど處の鄙なれば騒人韻士の賞咏も傳らざるを、先人虎角居士（梅園父）いまそがりし日本意なればとて、豊筑に事はじめしらぬひ火のあとさき崑山の片玉・桂林の一枝ひろひて一集となし、櫻板にことぶき文殊谷とぞ名づけき續きて、一集の志有けれども西に傾く日かげ招くべき才なく紅葉ちりゆき花飛さり、いつしか三十年ちかく經ぬ、さるをことし天明乙巳五月雨の小止ける隙、中田なる一笑子の予をさそひ出し山めぐりし、見處多かる中に十四の境をさしさだめ、精舎の東のかたに契ありてしめや置けんとおもふばかりの巌のあるに、處から名にしおへばとて芭蕉翁の枯枝の發句石にきざみ、古したふ跡ととどめんと結構し、又四方の風雅の士に句をもとめ先人の志をつがん事をはかる。

梅園の父虎角居士（三浦義一）は、芭蕉門下の十哲のひとり志太野坡に師事したといわれ、この地の風景を愛でた『文殊水』という句集を作成した。この父の志を継ぎたいと思った梅園は、十四の境を定め、参道の横にあった自然石に芭蕉の「枯れ枝」の発句を刻んで、四方の風雅の士に俳句を募集した。今もこの発句を刻んだ岩は参道横に佇んでいる。

また、豊後高田市域でも、江戸時代中後期に高田八景、夷谷八景、田染八景などが定められた。梅園にやや遅れて天明８年（1788）大神惟次が渡邊重名を介して日野亜相に依頼し「高田八景（若宮櫻花、御玉早苗、桂川秋月、鳥居原雪、小野瀬夕、応利山里、芝﨑客船、高田塩竈)」を定めている。さらに、

地元の板井某という者が文政２年（1819）に国学者高井八穂に依頼し、「夷谷八景」を定めた。この前年は、頼山陽が「耶馬渓山天下無」と耶馬渓を再評価した年であった。

実は、それに刺激されたのかもしれないが、幕末から明治期には、田染地区でも「田染八景」が定められたようである。『西国東郡誌』（大正 12 年）によれば、杵築の絵師「十市石谷（賀来飛霞の師匠）」が田染に遊び、八景を選んで、書画を作ったとされる。『田染村誌』（昭和７年）によれば、杵築の画伯「十市王洋（石谷の子）、或いは石谷」が田染に遊び、近江八景に倣い、田染八景を選んで、その図を描いたことに始まるといい、杵築の儒員・島徳世亦が八景の詩を作ったと記載される。

また、明治 40 年に田染を訪れた仏教哲学者井上円了（東洋大学創立者）が「田染八景」を次のように書き残している。

大堂梵鐘、熊岳山桜、桑川流蛍、池部群鷺
間戸涼蟾、本宮晴嵐、鍋崕叫猿、叡峰雪暁

しかし、『西国東郡誌』『田染村誌』の八景の記述とは若干異なっている。以下に挙げたように、郡誌、村誌では、「熊岳」が「熊野」、間戸の「涼蟾」が「山月」、「鍋崕」が「鍋山」、叡峰の「雪暁」が「曙雪」などと表現に異同があるが、場所が変更されているわけではない。

西国東郡誌：　大堂晩鐘　熊野櫻花　桑川蛍火　池部群鷺
　　間戸山月　本宮晴嵐　鍋山啼猿　叡峯曙雪
田染村誌：　大堂晩鐘　熊岳櫻花　桑川蛍火　池部群鷺
　　間戸山月　本宮晴嵐　鍋山啼猿　叡峰曙雪

田染八景は、近江八景を強く意識し、幕末・明治期には、地方の名勝としての位置を確立していたと考えられる。「大堂晩鐘」は真木の大堂の晩鐘の光景、「熊野櫻花」は熊野の山に咲き誇る山桜の花の光景、「桑川蛍火」は、桑川は、田染の中心部を貫流する桂川のことで、その川に乱舞する蛍の光景、「池部群鷺」は田染北部の池部集落の水田に降りた群鷺の光景、「間戸山月」は小崎と間戸の集落の間にある間戸岩の上に出た月の風景、「本宮晴嵐」は田染中村の元宮の山にかかる晴れた日の霞の光景、三宮の鍋山の屹立した岩峰に啼く猿の聲、田染の北に聳える西叡山の曙の雪の風景を賞でている。

鍋山の景へのはじめての評価

福岡藩の儒学者貝原益軒は、元禄７（1694）福岡を出発し、飯塚、直方、香春、豊津、城井、椎田、中津の高瀬、大貞、宇佐を経て、国東高田を経て田染方面に至る。その様子を『豊国紀行』に次のように記す。

「田染より東に半里許行て、道の西の傍に河の畔に高く峙（そびえた）ちて大岩十五六許つらなれり。其高さ十間餘り、奇観なり。羅漢寺の前なる大岩に似たり。其外かようの珍しき岩まれなり。その所をなべ山といふ。」

貝原益軒は田染の「鍋山」の景勝のすばらしさを羅漢寺の景色と比較して述べている。これは、国東における文人のはじめての名勝への評価といえる。

鍋山の岩峰と三宮

井上円了の田染の景勝評価　明治 40 年６月、井上円了は豊後高田の街から田染を目指した。そのときの紀行文を『南船北馬集　第２編』に収録している。

十六日　晴れ。午後、高田を発し、山行数里にして田染村に着す。途上所見。左のごとし。
十七日　雨。当村には八景あり。その中には奇なるは鍋山の勝なり。

中略

人これを小耶馬とも呼ぶも、決して耶馬渓の付庸にあらず。あるいは紀南の瀞八丁に似、あるいは小豆島の寒霞渓に似たるところありて、全然独立せる一奇勝なり。これを鍋山というは雅称にあらず。よって、余は南屏峡と名付く。西叡山と好一対となる。田染八景とは、…（中略）

余、一詩に八勝に入るる。

田染由来風月幽、国東此景最為優、雪明西叡峰頭暁、

猿叫南屏峡畔秋、間戸桑川宣夏望、本宮熊岳適春遊、

鷺飛鐘吼朝兼夕、八勝四時好散憂、

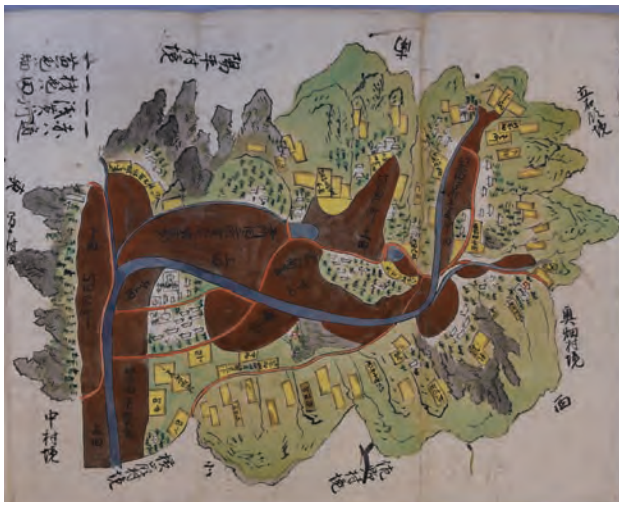
鍋山の空撮

詩文の訳（田染の地はもとより風月もおくゆかしく、国東地方におけるこの風景はもっともすぐれたものである。雪をいただく西叡山峰の暁のさま、猿の叫ぶ声がひびく南屏峡の秋、間戸の桑川は夏のおもむきをみるによく、本宮の熊岳山は春の行楽によし、鷺がとび梵鐘は朝夕ともにひびきわたる。田染の八景勝は四季を通じて人の世の憂いを消すによい。）

井上円了は、田染村に入り、「田染八景」という名勝があることを知る。貝原益軒と同様に、「鍋山」を訪れ、ここは耶馬渓の付随ではなく、日本有数の独立した景勝地であるという評価をしている。さらに、自ら、「鍋山」に「南屏峡」という命名を行うとともに、上記に掲げたように「田染八景」を盛り込んだ漢詩文を創作している。この漢詩文の中で「田染由来風月幽、国東此景最為優」と田染の地はもとより風月おくゆかしく、国東の景色の中でも最も優れたものであるという評価を与えている。最近は、この鍋山の景は、「三の宮の景」と呼ばれ、人々に親しまれている。

島原藩領田染組村絵図に描かれる江戸時代のムラ

小崎村絵図がよく知られている田染組の村絵図は、平成30年に大分県指定有形文化財[歴史資料]に指定された。本村絵図は、元禄2年(1689)に、新たに豊州御領を編入した島原藩が田染組の様子を知るために作らせた地図を原本とし、天保7年(1836)に再度村内の様子で変化し箇所を照会するために絵図を送付したものを、各村庄屋らが写し取ったものである。奥書部分によれば、すべての村絵図について、横嶺村の道路以外は様子が変わっていないという記載があり、本図は元禄2年段階の田染組各村の様子を描いたものと評価されている。蕗村・横嶺村・菊山村を除く13ヶ村のものが、田染支所や旧庄屋に残存していたものであり、当時の景観（土地利用や植生・地形）も描いてあることから、景観資料として注目されるものである。



小崎村絵図

間戸村絵図

真木村絵図

陽平村絵図

相原村絵図

熊野村絵図

田野口村絵図

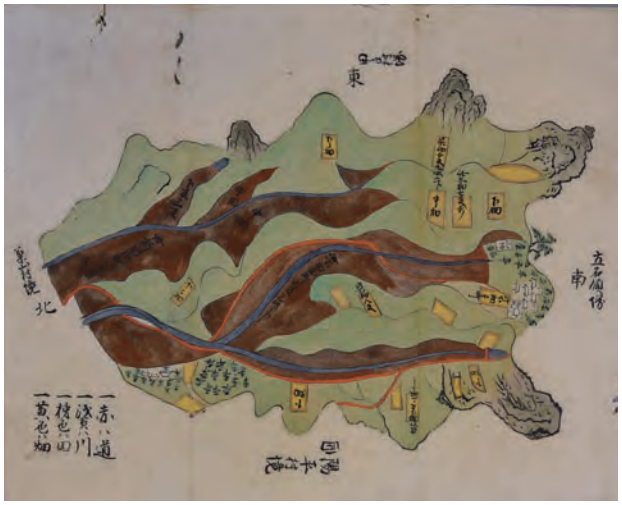
大曲村絵図

観音堂村絵図

上野村絵図

中村絵図

池部村絵図



薗木村絵図

第６節　特定調査地のまとめ

（１）鍋山（豊後高田市田染上野）

①歴史と文化財　鍋山は、田染村社・三宮八幡社から鳥居を挟んだ位置に聳える岩峰のことである。この地は現在も豊後高田市と杵築市の境目に存在し、古くは田染荘の荘域の果てであった。そのため、鍋山の前を流れる桂川は上野地区・真木地区・中村地区などを広く灌漑し、その後には河内・高田地区を潤わせていく。鍋山のすぐ下手に築かれた鍋山井堰は、上野条里を灌漑する歴史上極めて重要な井堰であると評価されている。鍋山の対岸の山手には鍋山磨崖仏【国指定史跡】があり、平安末～鎌倉時代の造営とされている。国東半島において、磨崖仏は水源のほとりに造顕される事が多く、鍋山井堰との関連性が指摘されている。田染地区の豊穣を祈る村社・三宮八幡社とあわせて、鍋山周辺は田染地区の祈りの中心の１つとなっている。

中世古文書において、鍋山磨崖仏は「稲積岩屋」と呼ばれ、三宮八幡社は「稲積大明神」と呼ばれている。現在、この呼称は観音堂村の由来にもなった中世･伝乗寺末寺の１つ慈恩寺の山号「稲積山」にしか残されていない。この稲積というのは、大分県においては「登尺（としゃく）」と呼ばれている所謂「藁積み」であり、鍋山自体のことを指しているとも推測できる。

その後、南北朝時代に元宮八幡社を宇佐宮の別宮として勧進したと当神社の縁起にあるが、これは元宮磨崖仏の造顕の時期と重なり信憑性が高いと言われている。その後、元宮八幡社から、二宮八幡社（田染真中）と三宮八幡社へと更に分祀が進み、現在の配置になったといわれている。現在の三宮八幡社の社殿自体は、明治時代のものと考えられる。

鍋山遠景

三宮八幡社

観音堂村の絵図

上野村の絵図

鍋山磨崖仏

②名勝的評価　鍋山自体に対する評価としての初見は貝原益軒の『豊国紀行』である。

高田より木付の間には馬驛なし、山中を通るに其ノ間田染と云村あり。高田より三里あり。此所にて暫く休む。田染より木付へ四里半あり。田染より東に半里許行て、道の西の傍に河の畔に高く峙ちて大岩十五六許つらなれり。其高さ十間餘り、或いは八九間あり。奇観なり。羅漢寺の前なる大岩に似たり。其外かやうの珍らしき岩まれなり。其所をなべ山といふ。夫より南方に山を越ゆくに、此間道さがしく坂長し、東南の方に山を登る事半里許にして嶺より木付の方へ下る事一里半あり。此坂をはたかた峠といふ。坂より田染のかたにははたかたといふ里あり。

益軒は、高田方面から杵築城下へと抜けるために、田染地区を通るルートを選択している。恐らく現在の県道34号線とほぼ同じルートを通って、波多方峠・波多方を抜けて、杵築に入る道筋であると考えられる。

益軒の見た岩峰の景観は「大岩が十五、六立つ」「高さは十間（約18.2 m）、又は八、九間（約14.5 ～ 16.3 m）」という表現であり、数については現状と変化していないと仮定するとやや誇張であると言える。

また評価としては、「奇観である」「羅漢寺の前の大岩に似ている」「このような珍しい岩はまれである」といったものであり、益軒はわざわざ鍋山のことを書き留めているのだから、まれなる奇観として評価していることが分かる。

また、「なべ山（鍋山）」という呼称もはじめて見られるが、鍋山の見た目から鍋を想像することは難しい。益軒がひらがなで表記していたこともヒントとなり、「並（な）べ山」が転じたものではないかと推定した。益軒が鍋山を訪れた元禄7年（1694年）の段階で、この岩山を「なべ山」と呼んでいたことも確かめられた。ちなみに村絵図の原本が成立したのも元禄2年（1689）であるので、ほぼ同時期に鍋山がはじめて描かれたということにもなる。

その後、鍋山の風景は、江戸後期に「田染八景」に「鍋崕叫猿」もしくは「鍋山啼猿」として登場する。田染八景は元々、杵築藩の絵師・十市石谷によって定められた画題であるが、残念ならが当時の絵画は今回の調査では発見されなかった。ただし、鍋山については『十市石谷山水画冊』中に収録された「鍋岩」がそれにあたると思われる。

近代に入ると、大分県では名勝地に関する理解を深める活動が盛んになってくる。明治37年(1904)には上田延成によって銅板画集『大日本帝国大分縣社寺名勝圖録』が編纂され、明治40年（1907）には大分県が主導で『大分縣写真帖』を作成し、名所旧跡や当時の大分県の近代化の様子が写真に写されている。その流れの中で現・豊後高田市の範囲でこの写真帖に掲載されたのは「高田町全景」「富貴寺」「鍋山」の3点のみで、鍋山の掛け紙に書かれた説明を見ると以下のようにある。

明治40年の鍋山

昭和初期の鍋山

鍋山　西国東郡の南部、田染村にあり。奇巌突兀（とつごつ）として、天に聳え、渓流潺湲（せんえん）影を蘸（ひた）して流る、風景頗る雅致、土人呼んで、小耶馬渓といふ。

明治40年（1907）には、哲学者・井上円了が鍋山を訪れ、その風景を高く評価している。円了が記した紀行文『南船北馬集　第2編』に収められたものであり、田染八景・鍋山などに言及し、紀州熊野の瀞八丁と対比している。円了の田染の風景に関する記載は、他と比して分量でみてもかなり多く、また絶賛している。そして、円了は鍋山の呼称を、雅称ではないとして「南屏峡」と定めている。以下に該当部分を掲載する（東洋大学創立100周年記念論文集編纂委員会編『井上円了12』「南船北馬集　第2集」より）。

十六日　*晴れ。午前、高田を発し、山行数里にして田染村に着す。途上所見、左のごとし。*
武陵渓上路横斜、欲賞夏光時駐車、万緑叢中紅点々、杜鵑無語只看花、
（武陵桃源郷のごとき谷のほとり、道は斜めによこぎり、夏の光にきらめく風景をめでようと、ときどきは車をとどめたのだった。すべてが緑におおわれ、くさむらにあかい花が点々と色を添えているが、ほととぎすの声もなく、ただ花をみるのみであった。）
所々、刈麦すでに終わりて挿秧を始む。農家の繁忙知るべし。田染村に入るや、生徒路傍へ整列して歓迎す。会場は小学校なり。

十七日　*雨。当村には八景あり。その中にて奇なるは鍋山の勝なり。晨起してここに吟節をひく。昨日以来の経過を詩中に入るる。端午時過梅漸黄、渓辺已見挿新秧、薫風西叡山南路、一夜来投田染郷、*
（端午の時節もとうにすぎて梅はようやく黄ばみ、谷川のあたりではすでに新しい苗が植えられているのを見た。初夏の青葉をふく風のなか、西叡山の南の道をたどり、一夜を田染村にすごしたのであった。）
樹色入窓灯影青、水声懸処認飛蛍、淡雲繊月多幽趣、繞屋翠巒為枕屏、
（濃い樹木の色が窓辺より入って、ともしびも青みをおびるかと思われ、渓水の流れる音のするあたりに蛍のとびかうのが見える。淡い雲やかぼそい月など、ここには奥深いおもむきがあり、家をめぐるみどりの山々はまるで枕屏風のように思われたのであった。）
晨起行過古社西、危岩兀立似雲梯、天工奇絶比無物、俚俗呼成小馬渓、
（朝早くに古い社〔やしろ〕の西を散策すれば、めずらしい形をした岩が高く立ちあがって、まるで雲にとどくはしごのようである。自然のたくみの絶妙であることは比べるものとてなく、この地の人々は小耶馬渓と呼んでいる。）
人これを小馬渓と呼ぶも、決して耶馬渓の付庸にあらず。あるいは紀南の瀞八丁に似、あるいは小豆島の寒霞渓に似たるところありて、全然独立せる一奇勝なり。これを鍋谷というは雅称にあらず。よって余は南屏峡と名付く。西叡山と好一対となる。田染八勝とは大堂梵鐘、熊岳山桜、桑川流蛍、池部群鷺、間戸涼蟾、本宮晴嵐、鍋崕叫猿、叡峰雪暁をいう。余、一詩に八勝を入るる。
田染由来風月幽、国東此景最為優、雪明西叡峯頭暁、猿叫南屏峡畔秋、間戸桑川宜夏望、本宮熊岳適春遊、鷺飛鐘吼朝兼夕、八勝四時好散憂、
（田染の地はもとより風月もおくゆかしく、国東地方におけるこの風景はもっともすぐれたものである。雪をいただく西叡山峰のあかつきのさま、猿の叫ぶ声がひびく南屏峡の秋、間戸や桑川は夏のおもむきをみるによく、本宮や熊岳は春の行楽によし。鷺がとび梵鐘は朝夕ともにひびきわたる。田染の八景勝は四季を通じて人の世の憂いを消すによい。）
聞く、臼野にも八勝ありという。余、これを一見せざりしは遺憾なり。午後、大雨をおかして出演

す。後に茶話会ありて、修身教会設置を決議す。発起者中に特に尽力ありしは豊田玄智氏、吉田秀導氏、桑尾重代氏等なり。桑尾氏は校長なり。

十八日　*曇り。鍋谷を経て田原村に入る。生徒の歓迎、田染に異ならず。この辺り山容雲態おのずから仙郷の趣あり。「南屏峡外一郷開、雨過挿秧処々催、雲容山態非人境、民情風俗亦蓬莱」*（南屏峡のはずれに一村がひらけ、雨あがりのなかところどころで田植えがおこなわれている。雲のすがた山のようすは人の住むところとも思われぬ。この地の人の心も風俗もまた神仙が住むという蓬莱のおもむきがあるのである。）*を吟詠しつつ宝陀寺に着す。寺は大同年間の創立にして、有名の古刹なり。山門は丘上にあり、緑陰庭に満つる所、燕子花を見る。夏光の間、雅なるは愛すべし。*
（後半略）

その後、国東半島を後にした円了は、宮崎・大分への遊説旅行での総括の部分にも、大分県が山水の景に富んでいると評価した上で、「紀州熊野地と相対して日本の絶勝地と定むべし。」と絶賛している。

田染小崎に残る井上円了揮毫の石碑

二十二日　*（前半略）*
日向地方平地多くして山水の景に乏しきは、予想外に感ぜしと同時に、豊後地の平地に乏しくして山水の景に富めるは、また想像の外に出でたり。紀州熊野地と相対して日本の絶勝地と定むべし。人情も淳朴にして、よく賓客を厚遇歓待する風あり。また、風流を愛し雅致を喜ぶ風あり。ただ、公道および公共物に楽書を見ること、他府県より多きように感じたり。また、迷信も比較的多きがごとく認めり。また、宗教は一般に普及するも、旧式を固守するにとどまり、活動の風をあるを見ず。学校教育も一段の発展を要するがごとし。これ、余が今より修身教会を開設して公徳を養成し、風俗を矯正し迷信を一掃し、人をして進取活動せしむるの必要を感じたるゆえんなり。

その後、市報などを追跡すると、豊後高田市の景勝地として天念寺耶馬・鬼城と並べて表記をされていくようになるが、鬼城の国立公園編入以降、徐々に取り上げられる回数が減っていったように思われる。

現在では、国東半島県立自然公園の園地の１つとして、「三の宮の景」という名称で河川公園化がなされている。三の宮の景の呼称は、それ以前の記録類等にも登場しないため、公園化の際に付けられた新しいものであると思われる。

十市石谷山水画冊「鍋岩」

③絵図、絵画等の表現

村絵図における鍋山の表現について見てみると、５本ほど細長い岩が聳えている様子を見ることができる。鍋山磨崖仏周辺の岩場に比べるとやや控えめに描かれているようにも見える。

一方で、江戸時代後期に描かれたと思われる十市石谷の山水画を確

認すると、かなり細長く描かれており、誇張表現に近い描き方である。向かって左側にも岩が描かれていることと、旧道がやや上方に走っていたことから推測すれば、やや高い視点から描かれた可能性もある。

（２）喜久山（豊後高田市田染真中）

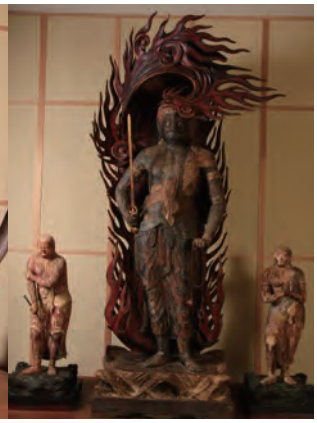
①歴史と文化財　喜久山は、六郷山寺院本山本寺の１ヶ寺で、『安貞の目録』によれば、現在の真木大堂に伝わる阿弥陀如来・不動明王・大威徳明王を収める寺院で、伽藍寺坊は現在の真木地区を越えてかなり広い範囲にわたっていた。喜久山については、現在も菊山という名前で伝わっており、その本体となる岩屋などが存在していると伝わっているが、現在にいたるまで、その中心的な遺構は確かめられていない。

馬城山の頂上には金比羅社の祠があり、背面には七ヶ村（菊山村・観音堂村・大曲村・田之口村・薗木村・陽平村・真木村・上野村）の銘がある。国東半島において金比羅社は風除の神として厚く信仰されており、風の通り道として集落の高い場所に祠を置くことが多かったとされる。田染の場合は独自に金比羅社を持つ村も多かったが、見通しの良い山を持たない村は、この馬城山に集まったのである。

菊山は、江戸時代には村として数えられていたが、江戸時代初期から天領、のちに延岡藩領に設定されており、村絵図をはじめとした史料は全くと言っていいほど残されていない。菊山村だけが延岡藩領であったことにちなんだ笑い話が現地では有名で、「菊山村はあまりにも山間なので、延岡藩主内藤氏が古い城（馬城（牧）城）を改修して城主となったが、耕作は周囲の各村（島原藩領）に委託せねばならぬし、築堤などの管理は遠く真玉（豊後高田市真玉・延岡藩領）の民を呼び寄せなければならない」というものである。

真木大堂・木造阿弥陀如来坐像及び木造四天王立像

木造大威徳明王像



木造不動明王及び二童子立像

馬城山　金比羅社

馬城山からの眺望（田染上野辺り）

②名勝的評価　喜久山周辺を航空写真で見てみると、華ヶ岳―烏帽子岳―喜久山―夕日岩屋・朝日岩屋―元宮磨崖仏と細長く延びる尾根上にあり、その中でも最も岩肌が露出する一帯のことを指している。真木大堂の裏手の馬城山頂には拝み岩と呼ばれる岩があり、かつては修行僧がそこから喜久山を見たとされる。そこから真木大堂の裏手の馬城山頂から喜久山を見るとかなり岩肌が露出しており、ドローンで撮影したものを見ればより険しい岩峰が続いていることが分かる。馬城山山頂だけでなく、真木方面・熊野方面・小崎方面からも岩峰の姿を見ることができる。

現在の平野分校跡の付近や、その付近に入り口があるゴンサコ（権迫）と呼ばれる小谷から見上げると、岩がよく見え、夫婦岩などもよく視認できる。ゴンサコには水田跡の平場がかなり延びており、水路の上流に行けば水垂（水が滝のように滴る断崖）に到れると聞き取ったが、道が荒れており現地には到れなかった。

喜久山には六郷山寺院の修行に関する説話として、大乗楽・小乗楽の話が残されている。喜久山で修行する僧は、密教の行法を極めるの修行を行うか、広く衆生を救うための修行を行うかを選ぶらしく、その際に前者は小乗楽から、後者は大乗楽から行に入ると言う（写真では大乗楽に谷間が見え、小乗楽には杉林が見える）。大乗楽から修行に入った大蛇の神・馬城弥太郎の伝説が残っている。大乗楽・小乗楽の何れから入峯しても、水垂や、観音岩屋（詳細不明）を通り、烏帽子岳観音堂に到るルートとなるようである。

中でも岩峰上に大穴が露出しているものが２つあり、大乗楽・小乗楽と呼ばれている。これは喜久山で修行する僧侶が、密教の行法を極め立派な僧になるために修行をする場を小乗楽、そこから発展して修行で得た力を一般の民衆にまで使い人々を幸せにする修行する場を大乗楽というという伝承が残されている。

一方で、現状では造成林が植えられよく確認できないが、烏帽子岳から見た喜久山の山塊は、幾つもの尾根が並んでいるように見えたといい、「麦の畝」と呼ばれていたとされる。

見上げた遠景

馬城山より

ドローンより遠景

夫婦岩

（３）朝日岩屋及び夕日岩屋（豊後高田市田染真中及び田染小崎）

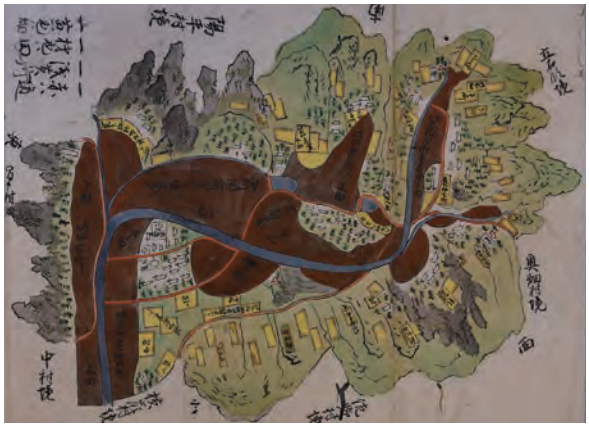
①歴史と文化財　朝日岩屋及び夕日岩屋は、田染真中地区と田染小崎地区の間を分かつように聳える岩峰につくられた岩屋である。朝日岩屋は間戸地区の字旭、岩壁の東側に位置し、一方の夕日岩屋は小崎地区の字竹ノ下、岩壁の西側に位置する。その位置関係から、朝日岩屋では朝日を望め、夕日岩屋では夕日を望むことができ、それが岩屋の名称の由来となっていると思われる。それぞれに観音菩薩と思われる仏像が祀られることから、現在では朝日観音・夕日観音と呼ばれることも多い。当該岩屋の初見は「建武の注文」であり、喜久山の末寺として記載がみられる。

朝日岩屋は石造の覆屋を伴う岩屋で、遺されたホゾ穴などから古くは一回り大きな覆屋が建てられていたことが推定できる。覆屋の中には所謂「焼仏」が３躯収められており、西叡山高山寺に旧在したものという伝承も残されている。一方の夕日岩屋には木片に等しい仏像（原始的な一木造であることが分かり、平安時代のものとされている）や、中世末の首のない石仏１躯、江戸時代作の観音菩薩の石仏２躯が配置されている。夕日岩屋へと向かう峯道上にも観音菩薩・弘法大師がおさめられている小岩屋があり、六郷山寺院の峯入りの道や、田染地区のお遍路の移し霊場の舞台であったことが分かる。

夕日岩屋へ登る中間地点に、西側に突き出た露頭に燈籠や石祠が残されている場所があるが、これは金毘羅社である。かつてはここから水田を見下ろして、豊作に感謝するお祭りが催されていたが、現在では実施されていない。燈籠は遠く田染地区の入り口でまで見通すことができ、桂川や陸路を使った交通に活用されていたという。

この岩峰の辺りは、国の重要文化的景観「田染荘小崎の農村景観」に選定された範囲に入っており、田染荘小崎の信仰に関する山岳景観として評価されている。とりわけ夕日岩屋からの眺望は、田染荘小崎を一望できる視点場として機能しており、田染地区への観光客も多くここを訪れている。

夕日岩屋から見た小崎地区



小崎村の絵図

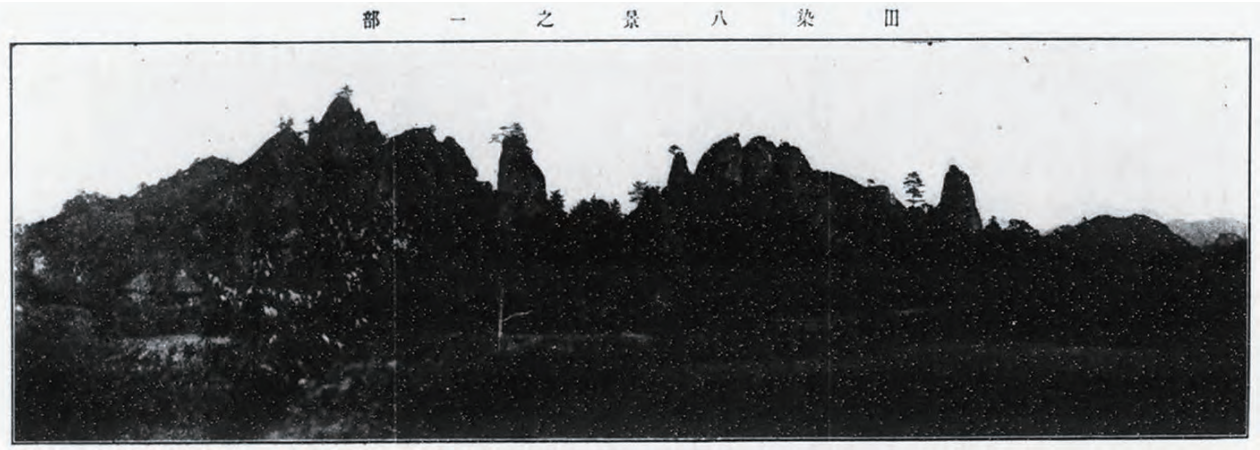
夕日岩屋などがある間戸岩遠景

②名勝的評価　一帯の岩峰のことを、小崎地区の住民は「間戸ン岩（マドンイワ）」と呼ぶ。田染八景の「間戸山月」について考えると、間戸側から見れば深夜にならなければ山に月はかからず、小崎側から岩峰と月を見た風景であると考えられる。小崎側から見た風景は、大正 12 年 (1923 年) に編纂された『西国東郡誌』などにおいても写真で掲載され、古くから美しい景色として認知されていたようである。各岩峰には名称が付けられており、南端から釣鐘岩・線香岩・屏風岩・夫婦岩・障子岩と並んでいる。

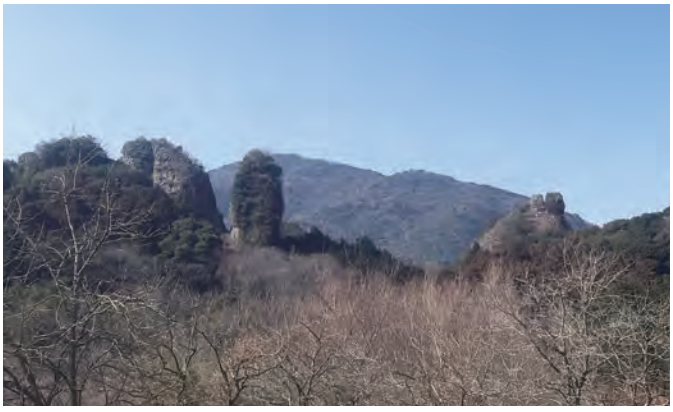
また、当該地区は田染荘の村落遺跡の密集地であり、中でも現延寿寺は荘官･田染氏の屋敷跡であったと特定されている。鎌倉時代の田染氏は、宇佐宮の異国降伏祈祷に際する神領興行で御家人の押領を退ける活躍をした事で有名であるが、一方では耶馬溪の羅漢寺（特に古羅漢）を開いた円龕昭覚も輩出している。円龕昭覚は、逆流建順とともに、中国の天台山をイメージし五百羅漢を造立したが、羅漢寺も間戸ン岩も、地質上近い凝灰角礫岩質の岩峰上にあり、また薄い屏風状の岩峰の両側に伽藍を展開し、岩峰の中ほどから往来ができるようにしているという類似性もある。国東塔や磨崖仏などが造られていることも、円龕禅師が夕日岩屋や田染荘の文化財に倣って寺院造営をした可能性もあると思われる。

屏風岩の中腹に夕日岩屋は位置するが、そこから見下ろす田染小崎地区の水田の曲線美は美しい。遠くに華ヶ岳と西叡山を望め、その間には切り立った岩峰が小さく見える。前述の金毘羅社がある岩峰の張り出した場所を拝み岩と呼び、西叡山に向かって遥拝をしたと伝わっている。

一方で間戸側から見た岩峰の姿にも名前が付けられているものがある。朝日岩屋のある岩峰の北側に、コブができたような形の岩峰がみられるが、これを子持ち岩と呼び、古くからこれに祈ることで子宝に恵まれるという信仰があったらしい。



大正年間の間戸岩（『西国東郡誌』より）



間戸側から見た岩峰と子持ち岩 (右)

間戸村の絵図の一部

（4）穴井戸観音（豊後高田市田染真中）

①歴史と文化財　穴井戸観音は田染真中・間戸地区にある洞窟状に縦に長い岩屋である。洞窟は奥行が30メートルほどあり、幅は広いところで20メートル、高さは高いところで5メートルの場所がある。周辺には位置が確定できていない間戸寺などの寺院があると思われるので、それらの関連寺院である可能性は高い。

年中、岩間から沁み出た水がしたたり落ち、たまっていることから、穴井戸と呼ばれ、濡れ観音と呼ばれる観音菩薩を祀っているが、入り口に建てられた堂宇には、薬師如来と伝わる焼仏が祀られ、堂自体も薬師堂と呼ばれている。

霊場記には三十六番札所の朝日山岩屋として登場し、「岩屋あなふかし、間戸ノ村にてたいまつをもらい入見るべし」との記載がある。

②名勝的評価　穴井戸観音は仁聞菩薩が修行をした場として伝わり、沁み出す水は「仁聞の隠れ水」といって、頭につければ知恵が付き、目につけると目がよくなり、飲むと子宝に恵まれるとされている。

また、深い洞窟状になっているため、その奥に進めば遠い場所に繋がっているという伝承もある。特に地元で有名なものは、子どもに追いかけられた鶏が穴井戸に飛び込み、翌日に権化の鼻（豊後高田市玉津字権毛、桂陽小学校付近の岩）で鳴いたというものである。権化の鼻は江戸時代頃の豊後高田の海の玄関口であり、近世の絵図を見ても多くの船が停泊する場所に「ゴンゲ」と貼り紙がなされている。また、西国東ではよく行われた雨乞い・潮汲神事の潮汲み場として知られ、田染地区でも集落毎の雨乞いに効果がない際に、田染組総出で行われる潮汲神事において、権化の鼻で水を汲んだとされている。穴井戸観音はすでに水で濡れており、どんな日照りの際にも濡れているとされる。こうしたことから、水資源の乏しい田染荘の人々にとって、権化の鼻とリンクして語られるようになったのではないだろうか。

穴井戸観音遠景

洞窟内部

（5）ウトノアナ及びゼゼノサマ（豊後高田市田染平野）

①歴史と文化財　ウトノアナ及びゼゼノサマは、田染平野の熊野の坊集落の対面に聳える岩峰の名称である。ウトノアナ（洞ノ穴）は向かって右側にある大穴の空いた岩峰である。かつてはお祭りのために穴を詣でていたというが、現在では近づいた者はいない。前方から穴へ取り付ける道があるといい、中には仏像･石祠などが祀られている。今回の調査においてドローンでの予備調査を行った結果、中に仏像と石祠が現存することが確かめられた。

一方のゼゼノサマ（善神王ノ様：ゼジンノサマ）は向かって左側にある岩の中腹部分が赤色に変色した岩峰を指している。名前の由来は、ゼゼノサマの麓に善神王様（国見赤根社でもゼゼノサマと呼ぶことがある）の祠が祀られているからという。

②名勝的評価　「建武の注文」では、今熊野寺（現・胎蔵寺や熊野磨崖仏を中心とする中世寺院）の四至を確認すると、西の境は「赤岩」と表記されている。位置関係から見ても、ゼゼノサマを赤岩と見て寺域を説明することも可能であり、南北朝時代には既に重要なランドマークとなっていた可能性がある。

岩峰の高い位置にあいた大穴には伝承も宿りやすい。ウトノアナに残っている伝承には、そこに棲んだ鬼が人を喰らおうとしたところ、熊野権現は一晩で石段を百段築くことを条件に許可したとされるが、予想以上に鬼の石段を積む早さがすさまじいため、熊野権現は慌てて鶏の鳴き声を真似て鬼を勘違いさせて撃退したとされている。同様の鶏鳴伝説は国東半島各地にも存在するが、わかりやすい舞台が最も揃っているのが熊野地区であると言える。

ウトノアナ（右）及びゼゼノサマ（左）

ウトノアナ内部

（6）西叡山（豊後高田市小田原・田染小崎・田染横嶺）

①歴史と文化財　西叡山は古くは六郷山全体を統括したとされる「高山（もしくは高山寺・養老寺）」と呼ばれた寺院があったとされている。昭和46年に西叡山の中腹あたりから、銅製経筒・土器などが発見されたと伝われるが、銅製経筒自体は散逸しており、中に納められた経文（年号の銘のある経首部は散逸）が残されているのみである（現在は大分県立歴史博物館所有）。なお、現在8合目ほどの場所に建てられている西叡山高山寺は、昭和末に建てられた寺院であり、直接的に高山を継承している訳ではない。

高山に関する文化財として、焼仏と呼ばれるものがある。江戸時代前期の火災で焼けた高山の仏像を、そのまま祀り続けているものである。最も著名なものは、小田原内野区にある木造聖観音立像である。小さな観音堂に平安前期～中期にかけての仏像が5躯あるが、そのすべてに痛々しい焼損がある。つくりや衣文などの像容が比較的残っている中央の木造聖観音立像が、国東半島でも最も古い仏像であるとして、県指定有形文化財となっている。この観音堂にある仏像は、江戸時代に高山で発生した火災の際に僧侶が持って逃げたものであると伝承されているが定かではない。同様の焼仏は、河内保育園前の小堂・小田原清瀧寺・田染横嶺岩脇寺・田染真中稲荷神社・同朝日岩屋・同穴井戸観音・田染小崎延寿寺・同茅場堂など多数あり、西叡山の麓に散らばっている。伝承の内容には若干の異同がある（仏像は飛んできた／火災の時期が中世であるなど）。

西叡山遠景（右）

西叡山からみた屋山

②名勝的評価　西叡山という名が資料に登場するのは、田染八景に「叡峰雪暁」とあるので江戸時代には遡るが、年号のある史料では地域のものはなく、享和3年（1803年）に岡藩で編纂された地誌『豊後国志』に見える他には、江戸時代後期のものと思われるが六郷山寺院を列挙した「仁安三年六郷二十八山本寺目録」に西叡山高山寺とあるのみである。

地域においては、この西叡山は桂川と対になるものとして認識されている。桂川に関しても江戸時代に島原藩の調査時に描かれた『豊後国高田芝崎絵図（本光寺蔵）』にも「高田川」と見えるが、『豊後国志』の時代になると桂川として表記されるようになり、近代以降は桂川の方が一般的になっている。江戸時代の後期において、京都の比叡山と桂川を念頭に、西叡山と桂川を名付けた出来事があったと思われるが、現段階では判然としなかった。

西叡山の山麓には岩峰を伴っている場所がある。主に西側（佐野方面）と南側（田染小崎方面）であるが、これらも六郷山寺院の修行場となったものである。

まず、西側の岩峰については、西叡山と直接関係するものとして、西叡山には奥ノ院伝承地「金水銀水岩屋」がある。名前の由来は岩屋の2ヶ所に水が溜まっており、夕日が差し込むと片方が金色に、もう片方が銀色に光るということからであるという。気象条件などによって、そのような現象が発生

する可能性もあると思われるが、現状では実際にその様子を見たという人は見つけ出せなかった。金水銀水岩屋から流れる水が、佐野地区を流れる山田川に入り、桂川に合流する場所を黄金淵と呼び、古くから行者の潔斎を行う場所であったと伝わっている。

また、その傍から見える場所に「戸無し戸の口」という岩峰に穴が貫いて、奥からの光が見える場所が存在する。これも金水銀水岩屋と同じく高山の奥ノ院とも伝わり、大蜘蛛（もしくは土蜘蛛）が湧き水を守護していると伝わる。この大蜘蛛は見るだけで凶事が起こるとされ、高熱でうかされる話や、大嵐が起こるという話が残っているなど、平時において戸無し戸の口に向かう事はタブーとされる。これを利用して雨乞いを行った例があり、昭和４年の川勧請の際には、鎧ヶ淵に田染三社の神輿を筏で浮かべた一方で、戸無し戸の口に参って雨乞いを行ったそうである。

そして、南側の岩峰については、六郷山の峯入りにおいて最も険しい場所の１つであり、峯入りの指南書として整理された『豊州前後六郷山百八十三所霊場記』では、「案内なくてなりがたし」などとされる霊場が連続している（轆轤岩屋・最勝山岩屋・良醫岩屋・払阿弥陀堂）。また、この部分から神宮寺跡へと一度抜けるルートを取るが、神宮寺跡に造られた城郭「（奥畑）鞍懸城」において、田原氏が大友宗麟に対して反乱を起こした際に、田染地区を広く治めていた古庄鎮方に従軍した河野弾正忠が、「山伏ノ尾」から一命を惜しまず忍び入って奇襲を仕掛けたという内容の古文書が、田染横嶺に住む河野家に残されている。

叡峰雪暁

金水銀水岩屋（山本純夫氏写真提供）

戸無し戸の口（山本純夫氏写真提供）

小崎愛宕社付近の岩峰

③地域での捉え方　―校歌をもとに―

文化庁調査においても、地域における名勝地の捉え方について、校歌を使っての調査を実施している。今回は補論ではあるが、校歌における西叡山・桂川に関する歌詞を探した。

田染中学校の校歌には１番に「桂川」・２番に「西叡山」、田染小学校では２番に「西叡山」・３番に「瀬音は清く平安のかがやく文化この郷に」と桂川を暗示する内容があり、流域の学校においても、河内小学校１番に「西叡山」・２番に「桂の岸辺」、河内中学校１番に「西叡の峰」・２番に「桂の水」、桂陽小学校１番「桂川」・２番「西叡の峰」、高田中学校２番「桂川」と「西叡」と、歌詞に桂川と西叡山の両方が入っていた。高田小学校のみ山に「応利山」を取り入れていたが、他の校歌において西叡山と桂川がともに歌われることになっている。ちなみに高田高校校歌は時代を経ても「桂川」のみが登場し、山は「両子山」が見えるようになっているが、旧制高田高等女学校の校歌にも１番に「西叡山」・２番に「桂の川」と両方登場する。

表：桂川流域の学校歌の歌詞における西叡山・桂川の採用状況

	山の風致	川の風致
田染小学校	西叡山	瀬音は清く
田染中学校	西叡山	桂川
河内小学校	西叡山	桂の岸辺
河内中学校	西叡の峰	桂の水
桂陽小学校	西叡の峰	桂川
高田小学校	応利山	桂川
高田中学校	西叡	桂川
高田高校	両子山	桂川
旧制高田高校女学校	西叡山	桂の川

第４章　田染地区の名勝地における周辺分野の価値

第１節　文化的景観としての田染、名勝としての田染

飯沼　賢司

はじめに

2010 年に田染荘小崎地区は、国の重要文化的景観に選定され、さらに 2013 年には、国東半島宇佐地域は、世界農業遺産に認定された。すでに、その景観の評価は日本のみならず世界において行われた。本論では、田染地区の名勝的価値を論ずる一環として田染における文化的景観と名勝の関係を中心に論じてみたい。

1. 文化的景観と名勝

文化的景観の登場と国東の荘園村落遺跡調査　2004 年春、文化財保護法が改定され、2005 年に施行された。その中で新しい文化財概念として「文化的景観」が登場し、前年に整備された景観法と併せて「重要文化的景観」の選定が始まった。「文化的景観」は Cultural Landscape の訳であり、1992 年に世界遺産に新概念として導入されたものである。その最初の世界遺産登録は、1995 年のフィリピンの「コルディリェーラの棚田」である。それ以降、文化的景観は、世界遺産の大きな流れとなり、日本でも、紀伊山地の霊場と参詣道（三重県、奈良県、和歌山県：H16 年）、石見銀山遺跡とその文化的景観（島根県 :H19 年）などが文化的景観として登録された。

田染の春

田染の秋

田染小崎の水田・岩峰景観と田植え

したがって、日本の文化的景観は、世界遺産から導入されたかのようにいわれている。これは、ある意味では真実であるが、一方、文化的景観という言葉は使用していないが、それとまったく同じ考え方をもつ「荘園村落遺跡」すなわち、生きている村落遺跡の概念は、世界遺産の概念と揆を一にして、むしろかなり早くから登場していた。1981 年から始まった田染荘の「荘園村落遺跡」の調査は、実質的に日本初、世界でも最も早い「文化的景観」の調査いうべきものであった。

日本の文化的景観の登場には、日本なりの前提があったのである。これが、国東半島で 1981 年から大分県立宇佐風土記の丘歴民俗史料館（現県立歴史博物館）が日本で最初に開始した「荘園村落遺跡」の調査事業である。荘園村落遺跡調査は 80 年代から 90 年代にかけて、日本の農村景観を大きく変貌させた圃場整備事業に対処する調査として進められた調査で、国東半島のみなならず、広島県、兵庫県、大阪府、和歌山県その他の県などでも調査が行われ、大きな成

果を上げ、荘園村落遺跡は、後に「史跡」として指定された箇所もあったが、水路や池や水源などの一部に留まり、景観全体を保全できることはできなかった。

国東の調査でも、90年代から、何度も史跡による指定をめざす動きがあった。しかし、荘園村落遺跡は、生活、生業を基盤として景観遺跡であり、まさに「生きている景観遺跡」であった。そのため、本来時間の止まった遺跡を保護してきた「史跡」概念では、その領域を指定することが生活・生業を妨げ、かえって景観を失わせる危険があった。今回、文化的景観の選定の地区となった田染小崎地区でも、史跡指定が90年代に目指されたが、地元の十分な理解が得られず、圃場整備が行われる直前まで至った。

そのような中、2000年の春、新たに始まった「田園空間博物館構想事業」（農水省の農村整備の新規事業）を導入し、景観を維持しつつ永業できる道を模索することになった。同時に、棚田オーナー制度を摸して、荘園領主制という水田オーナー制度を創設し、その景観維持と生業の継続を図る努力を行ったのである。これは、当時の文化財保護法では、生活・生業の場となっている、生きている景観を保全することは極めて難しかったためであった。

その後、すでに述べたように2005年には、文化財保護法の改正にともない、文化財概念の中に「文化的景観」が導入された。田染地区も当初から候補に上がっていたが、この時期、新型の圃場整備事業「田園空間博物館構想事業」を導入していたため、田染荘小崎地区における重要文化的景観の選定はやや遅れた。

2007年12月、別府に於いて「アジア太平洋水サミット」が開催され、開会式で歴史学者として知られる皇太子が記念講演をした。この際、この講演で自然と共生した水利用の事例として「田染荘」が取り上げられた。皇太子は翌年、田染小崎地区を訪れた。ここにおいて、日本の伝統的水利用の景観の典型として注目された。これを弾みに、田染荘小崎地区は、2010年8月に「重要文化的景観」に選定された。

一方で、田染には田染八景と呼ばれる名勝がある。田染八景は、近江八景を強く意識し、幕末・明治期には、地方の名勝としての位置を確立していたと考えられる。

田染荘小崎地区では、2000年から景観保全のために荘園領主制という水田オーナー制を創設し、毎年、春と秋には、オーナーを集めイベントとして田植え、稲刈りを行っている。間戸の岩峰を背景に田植え、田植え稲刈りが行われる。田植えの時期には、ここには鷺の群れが舞い降り、蛍が乱舞する。秋の稲刈りの時期には、間戸の岩峰の上には美しい満月が昇る。田染の文化的景観は、現代の田染八景に他ならない。田染の岩峰に囲まれた景観は古来、その生活とともに人々の心を捉えてきたのである。

水田の鷺

田染の月

田染のホタル

２．生活目線からみた田染の岩峰の景観の価値

田染組村絵図　田染を訪れた人々が、田染の岩峰の奇絶・優美さを語るのは勿論であるが、田染に生活してきた人々も自らの空間である岩峰の景色を目出、それに名をつけ、そのくらしの中にこの景色

を組み込んできた。

その集約したものが田染組村絵図である。この絵図は、奥書によると原本は元禄２年（1686）に島原藩に提出されたもので、天保７年（1836）に、この 150 年間における変更箇所の確認のため、いったん田染組に下された際に書写された写本である。田染組に所属した２３ヶ村の内１４ヶ村分の絵図が田染支所に伝来してきた。現存は、小崎・間戸・真木・陽平・薗木・熊野・田野口・大曲・観音堂・上野・相原・中村・池部の各村のものである。横嶺村については原本所在不明、トレース図が存在する。

絵図は、元禄年間の貝原益軒が旅した時代の田染の風景を伝えている。また、生活目線からみた、田染の岩峰の風景が描かれている点注目される。村絵図としては、このように岩峰を描いたものは珍しい。

絵図に描かれた岩峰と呼び名

①鍋山の景勝

元禄２年の絵図には、観音堂村の村境に林立する５つの大岩が描かれている。これが鍋山の岩峰であることは間違いない。すでに述べたように、鍋山は貝原益軒が元禄７年（1694）に訪れて以来、景勝の地と評価され、明治期には、井上円了が国東一の景勝として「南屏峡」と名付けた場所である。現在は、鍋山の景は、「三宮の景」と呼ばれ、この岩の対岸には、田染三宮八幡宮がある。元禄２年の上野村絵図には、三宮は、「大明神」と書かれ、その横な、「不動」（鍋山の磨崖仏）が描かれる。建武４年（1338）の六郷山本中末寺次第幷四至等注文案には、鍋山の磨崖仏は、稲積岩屋と書か、「大明神」（三宮）は、中世の「稲積大明神」に相当する。ここには、田染地区の中心的水田地帯である上野条里水田の水路の取水口の鍋山井堰がある。ここは、近世以来、「鍋山」と呼ばれていたが、中世は、「稲積」という名があった。これは、稲を積み上げた「としゃく」のような形の岩をイメージしたのではなかろか。豊後高田市文化財担当の松本氏は、「鍋山」は「並び山」が訛ったのではないかという説を唱えるが、「稲積」から「並び山」さらに「鍋山」となったということかもしれない。鍋山の地は、磨崖仏の存在からみると、平安時代末には、田染の信仰の１拠点となっていた。この鍋山の奇岩が井上円了によって「名勝」として評価されたのである。

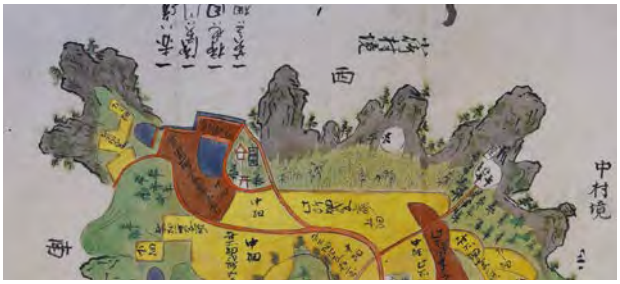
観音堂村の絵図に描かれた鍋山の岩峰

鍋山の岩峰

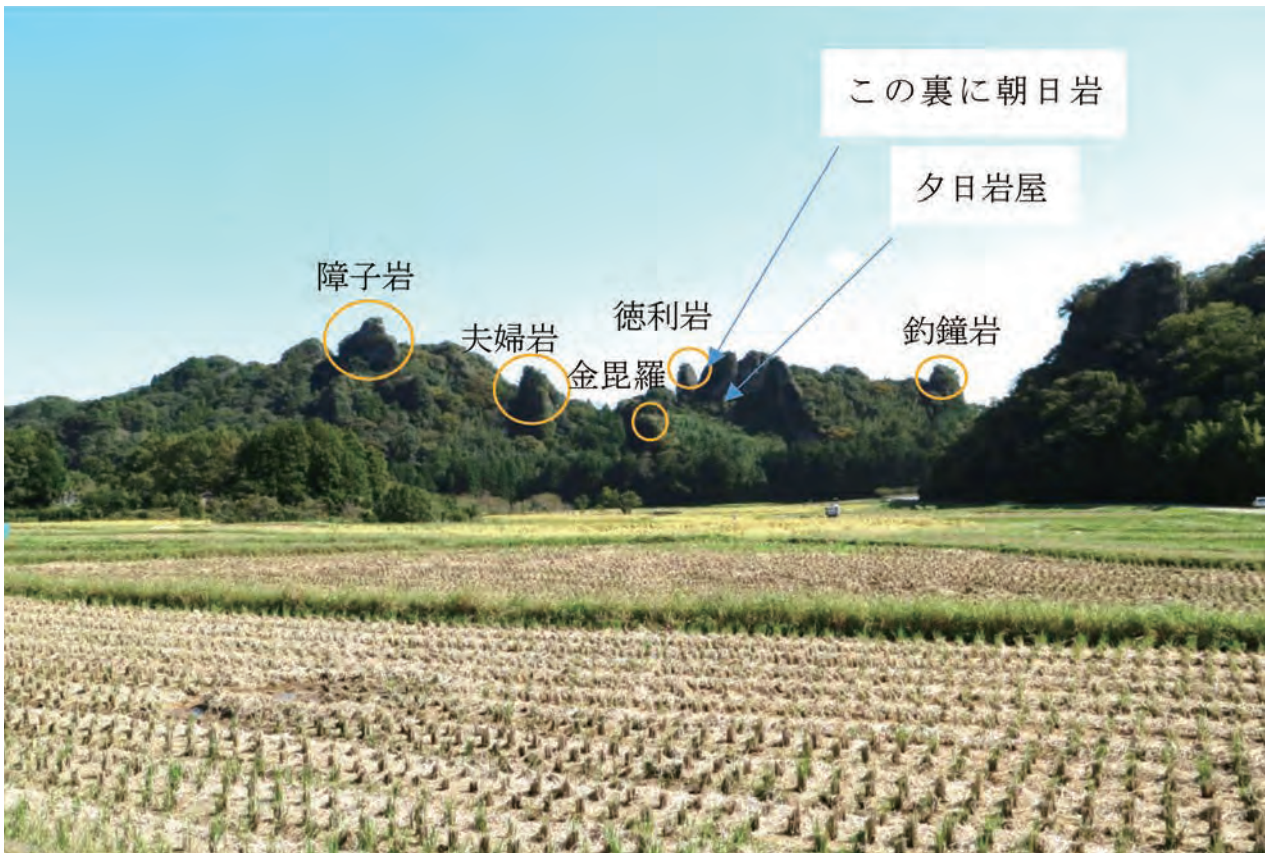
小崎村絵図の間戸岩

②間戸岩の景勝

文化的景観に選定された小崎地区には、間戸岩（まどのいわ）と呼ばれる岩峰がある。この岩峰には、中世まで間戸寺と呼ばれる六郷山の岩屋寺院があった。その岩屋跡が夕日岩屋、朝日岩屋、穴井戸観音である。また、ここに岩峰には、



間戸村絵図の間戸岩



写真のように、障子岩、夫婦岩、金毘羅、徳利岩、釣鐘岩などの岩や場所の呼称が付けられている。

ところで、田染小崎は、田染氏の館跡があるが、鎌倉時代の末、この館に生まれたのが耶馬渓の羅漢寺を開いた円龕昭覚である。円龕禅師は田染小崎や周辺の奇岩を見て育ったと思われる。その後、逆流建順とともに、中国の天台山をイメージし、五百羅漢を造立した。田染の間戸岩の景色は、遠く中国の山水画のイメージと重なりあったのであろう。

③　熊野の名勝

次の熊野地区の事例をみてみよう。熊野地区は、江戸所代は熊野村と呼ばれ、中世には、「今熊野寺」（胎蔵寺）という寺院があり、そこには「不動石屋」「大日石屋」（熊野磨崖仏）があった。熊野の集落の入口には、石の鳥居が建ち、そこは現在も坊集落の面影をとどめている。集落の裏手には、応安８年の銘をもつ国東塔を出発に形成された熊野墓地がある。この集落の鳥居の向かいには、奇岩が連なり、大きな岩穴をもった岩峰がある。ゼゼノサマ（赤岩）、ウトノアナという名が付いている。

熊野村と岩峰

ゼゼノサマ（赤岩）とウトノアナ

ウトノアナ内部

熊野村の絵図にも、この岩峰が描かれ、ウトノアナという洞窟が描かれている。現在も写真のように岩峰と洞窟は熊野の集落の前に美しく異様な姿を見せている。この写真の右手の洞窟の中をドローンで調査すると、中には、石造の祠、石仏が安置されているの確認できた。

なお、熊野磨崖仏の裏は、鋸山へ続く切り立った岩峰が続いているが、今は、下からそれを見る場所へ到達することが困難となっている。しかし、『豊後国田染荘の調査』（1987 年）では、大字平野の字宇須木には「クリイワ」、松本・地獄石・宇須木の境の岩山には、「タカイワボウズ」、字大迫には「シライシ」「ラカンノクボ」「テングイワ」の名が付けられていたことが報告されている。

④馬城山の山塊

建武４年（1338）の六郷山本中末寺次第幷四至等注文案には、馬城山の四至（四方の境界）が「限東赤岩辻　限西ハエボシ嶽　限南六太郎美尾　限北光廣」と書かれている。この範囲は、馬城山伝乗寺（真木大堂）の真木、田野口、薗木、陽平、菊山の地区と推定される。真木大堂の裏に広がる岩峰の山塊は六郷山馬城山の境内地であったと考えられる。

真木側から菊山、陽平方面を見る

元禄２年の田野口村、薗木村、陽平村には、岩峰が描かれている。しかし、菊山村は幕府領であったため、絵図が残っていない。ここの岩峰は、限界集落地域にあるため、山の奥に入れず、下からの確認が難しい場所も多い。しかしながら、ドローン空撮による調査では、大変美しい景観であることが確認できる。陽平には、福寿寺など中世の磨崖仏、磨崖碑が刻まれた岩屋があり、岩峰が信仰の場所であったことがわかる。また、『豊後国田染荘の調査』（1987 年）の段階の調査では、西菊山には「ゴンサコイワ」、早田の奥の岩には「アキヤマイワ」、前田の上の岩には「カイブキイワ」、田ノ口の奥の大岩には「高岩」の名が残ってる。なお、馬城山の中には入らないが、大曲の奥には、「生子岩」「地獄石」の字名がある。

陽平の岩峰

田　染の人々は、日々の生活の中でも、特異なこの岩峰の風景に名称をつけ、信仰や畏敬の気持ちを表してきた。

むすびに

田染は重要文化的景観に選定され、世界農業遺産のジアスサイトの中核ともなっている。これは、自然と人間の営みの調和の中で出来上がった景観への評価である。岩峰に囲まれた田染は、独特な風景をもち、サトの世界の隣に、鬼が出現する険し岩峰が聳え立つ。そこは神宿る地であり、同時におどろおどろしい異界、鬼の世界でもあった。この独特な風景の中に田染の暮らしがあった。これこそが田染の景観的価値であり、そのことはすでに田染八景と呼ばれる名勝的価値づけの中にも、この暮らしの風景が織り込まれているのである。

第２節　地質からみた田染耶馬周辺の名勝としての価値

竹村　恵二

国東半島は、中央に位置する両子山火山を中心に、放射状の谷が分布しており、その谷沿いに多くの神社仏閣が築造され、守られてきた長い歴史を有する。地形的特徴は、同心円状の斜面と中央部から放射状に発達する深い谷地形の組み合わせ（図１）であり、地質の多くは火山性の岩石などの火山活動の地層により構成されている。花崗岩基盤の上に、新生代後期の火山岩類が分布しており、大きく溶岩と火山砕屑岩からなる古期の地層群と、両子山火山活動による溶岩や火山砕屑物からなる。本地域にはこの両者が地質的特徴を有しながら、急峻な崖となだらかな火砕流の地形を形成し、地形・地質的特徴を生かして、長い間、種々の寺院や田染地域の荘園や集落を形成してきた。

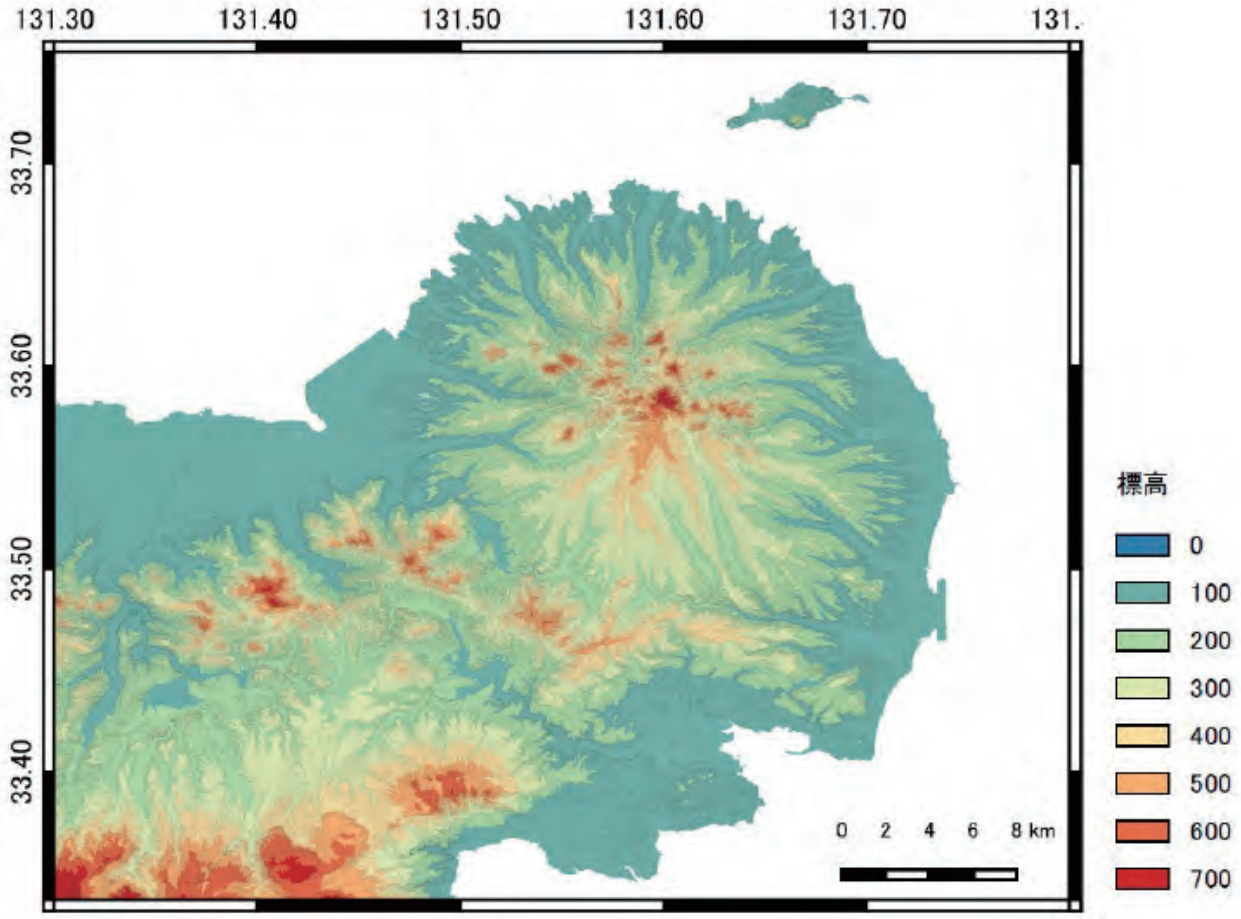


図１　DEM データによる国東半島

１．　田染耶馬周辺の地質　（地質記載の略称文字は産総研「中津図幅」による）

田染耶馬周辺は、先に述べた国東半島の放射状の谷が分布する地形の南西側に位置する。地質は、国道 10 号線沿いの金山あたりから分布する花崗岩類を基盤として、変質した火山岩類も含む宇佐層群、および両子火山の火山岩類の 2 つから大きく構成される。下位の宇佐層群は古期宇佐火山岩類として対象地域の南西側を取り巻くように分布し､西叡山（571m）の溶岩（U1）や火山砕屑岩類（U1v）からなり、この火山砕屑岩類は、安山岩からデイサイト質の凝灰角礫岩、火山礫凝灰岩や凝灰岩で構成され、水平の層理構造も観察される。特に、田染から太田に抜ける桂川の両岸では、これらの地層群が浸食された急崖を形成しており、地層の様子が詳細に観察され、みごとな景観をなし、田染耶馬と呼ばれている（図 2)。また、対象地域の北東側は、170 万年前から 110 万年前頃に活動したとされる両子山火山岩類の火山礫、火山灰、火山岩類や砂・礫から構成される上部火砕堆積物が分布し、両子山からの放射状谷地形を作り出している。特徴的なことは、下位の宇佐層群分布域は、溶岩と凝灰角礫岩を主体として、県北の耶馬渓の地形に似た景観を呈するため、“耶馬渓層”として記載されてきたが、最近の研究では“耶馬渓層”を使用せずに、年代や活動順序や堆積環境にもとづいた層序を基本とすることが進められている。今回の記述は、産業技術研究所の 20 万分の 1 中津図幅（図３）の記載と区分を参考に記述した。

図２　田染耶馬の景観写真　（凝灰角礫岩等からなる、火山灰層などが挟在されることで堆積状況がわかる）

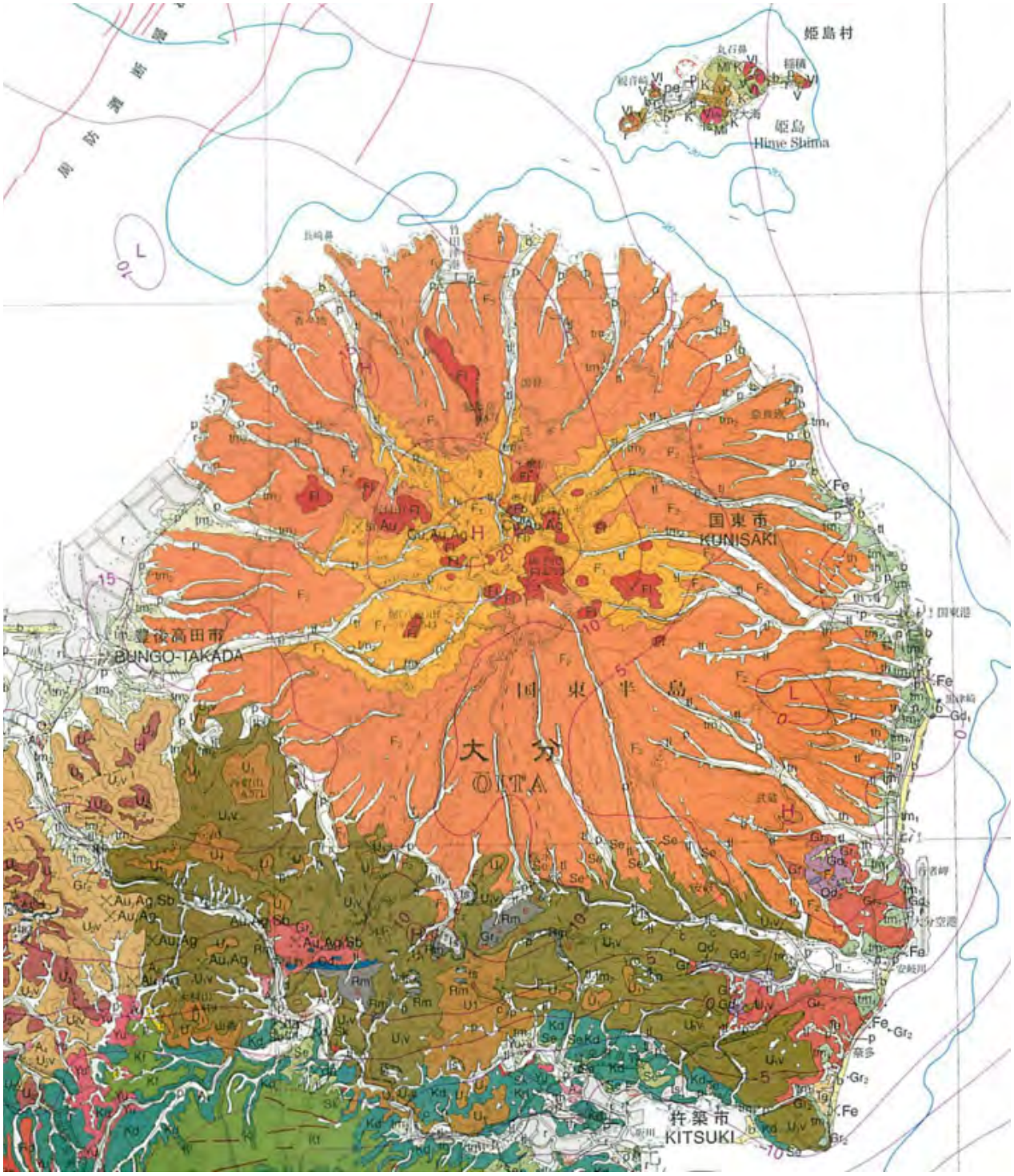


図３　国東半島の地質（産業技術総合研究所 2009 年発行の 20 万分の 1 地質図：中津図幅の一部）

Gr2:　花崗岩類、U1：古期宇佐火山岩類の溶岩、U1v：古期宇佐火山岩類の火山砕屑岩（凝灰角礫岩など）、F1: 両子火山岩類のうち下部火砕堆積物（火山礫、火山灰及び火山岩塊）、F2: 上部火砕堆積物（火山礫、火山灰、火山岩塊、砂及び礫（軽石を伴う）

２．地質からみた価値

前述のように、対象地域は新生代後期の火山活動による地質およびその後の浸食営力の影響をうけて、特徴的な景観を呈している。火山活動時期や火山砕屑物の特徴から、大きく２つの地域に分かれ、田染地区の荘園は放射状地形の南西端のこの境界付近の場所で、内陸のあるていどの広さを持つ盆地状の地に形成されている。この周囲には、耶馬渓式景観とも称されるような、急峻な峰や急崖からなる谷が形成されており、それが国東半島全体の神社仏閣の創建や祭事の継続など住民の信仰等と結びついていく要素として重要であったと考えられる。また、対象地域の熊野磨崖仏周辺は、この特徴的な宇佐層群凝灰角礫岩に刻まれた独特の景観を醸し出している。さらに、本地域に分布する寺院等は長年にわたり、地域の人々との交流を深めてきた。これらの地域における、歴史・文化の醸成と地域での長い営みは、対象地域の２つの時代の火山活動の特徴的な地質と浸食の地形が作り出した景観が大きく関与してきたことがうかがわれ、本地域の名勝としての価値を高めている。

第３節　景観の価値

黒田　乃生

１. 名勝と景観

景観は見る人と見られる物があって成立する現象である。見られるものが時代を経て物理的に変化するだけでなく、見る人の社会背景や生い立ちによって同じものを見ても、違う捉え方をされることもある。たとえば、朝日岩屋を例にとると、現在田染地区に住む人、研究者、観光客あるいは中世や近世の人々が見た場合、それぞれに想起される風景には同異があると考えられる。

「名勝」は文化財保護法で「芸術上又は観賞上価値の高いもの（下線筆者)」と定義され、「学術上」または「歴史上」「生活の理解」を指標とする他の文化財とは異なる特徴がある。つまり､見る人（主体）および見る場所（視点場)、見られるもの（視対象）の空間的な関係と、それが誰によって認識されたのかまたは膾炙したのかという点に着目する文化財である。

２. 田染耶馬の景観の位置づけ

以上の視点から田染耶馬の景観を整理する。縄文時代から人が居住していたが[i)]、視対象としての認識が確認されるのは六郷山に関わる資料である。２章および３章に述べられたとおり、13 世紀から近世にかけて本調査の対象である寺や岩屋の名が文書に記載されている。櫻井が指摘するように、「安貞目録」に記載された朝日岩屋、夕日岩屋をはじめとする寺や岩屋は、視対象として信仰や修行の場であると同時に[ii)]、視点場としてそれぞれの岩山からし周囲を見渡すことができる。これらの要素が一体となって田染耶馬の景観を生み出しているのである。さらに、３章からも明らかなとおり絵図に名前が付された岩屋や寺、山は人々に視対象として認識されていた証左となる。

３. 近世から近代以降のまなざし

①近世から昭和初期まで：諸国行脚の学者による賞賛

では近代以降に「田染耶馬」はどのように認識されていたのだろうか。

田染荘は豊富な資料があり代表的な文化財があることから、研究対象、観光資源として国東半島の中で長年にわたってひとびとのまなざしの対象となってきた。３章に記載された文献に加え主に近代以降の田染耶馬に関する記載の一部を整理したものが次頁の表である。

まず、３章で記されたように貝原益軒（1630-1714）による「なべ山」の記述がある。当時貝原益軒ほど諸国を旅して歩いた学者はいなかったのではないかと言われている[iii)]。また幼い頃から自然美を愛し､旅行中に美しい風景を見ると同行者があっても立ち去り難かったという。自然美について｢貧賤にして時にあわざる人が得やすい」とも言ったとされ、風景は全ての人に平等であるという気持ちがあった。さらに考古学的な遺跡にも多くの関心を示し、石窟や古墳などを時間があれば調査し紀行文に取り上げている。豊國紀行は 1694（元禄７）年に史蹟調査を行った見聞録である[iv)]。「なべ山」の記述は驚きを表しつつも、位置、周辺の環境、大きさを客観的に示しており、学者としての分析的な印象と風景を愛でる気持ちが混在していることがわかる。

1905（明治 38）年の『豊後史蹟考』には田染郷として烏帽子嶽塞、小崎の堡、伝乗寺が記されているが具体的な景観の記載はない。田染耶馬という言葉を用いているものに 1921（大正 10）年の『大分県百景案内』があげられる。田染耶馬の説明として西叡山一帯に奇岩怪石が屹立し、絵にならないところはない、と記されている。また３章で示されたように井上円了は鍋山の景観について詳述し田染八景を紹介した。井上円了は「田学」の祖であり、肩書きが重要視された明治時代に無官のまま哲学館大学（現在の東洋大学）を設立した[v)]。すべての人に等しく勉学の機会を与えるために引退後は

表　田染耶馬に関する記載

書名	著者等	発行年	頁	記載等
豊國紀行	貝原益軒	1694　元禄7	–	（略）奇観なり。羅漢寺の前なる大岩に似たり。其外かやうの珍らしき岩まれなり。其所をなべ山といふ。
豊後史蹟考	佐藤蔵太郎	1905　明治38	41	田染郷の項目に「本郷にば烏帽子嶽寨、小崎堡、傳乗寺等あり」
大分縣写真帖	–	1907　明治40	–	「鍋山 西国東郡の南部、田染村にあり。奇巌突兀として、天に聳え、渓流潺湲影を蔗して流る、風景頗る雅致、土人呼んで、小耶馬渓といふ。」（第３章）
南船北馬集　第二編	井上円了	1909　明治42	356–357	鍋山に関する記述（第３章）（東洋大学学術情報リポジトリ）
大分県百景案内	大分県史蹟研究会	1921　大正10	2–3	・田染耶馬 西国東郡田染村西叡山一帯の勝景をいふ奇巌怪石の峙立せる間に老松點綴として繁茂し山容水色畫ならさるはなし
西國東郡誌	西国東郡編	1923　大正12	193 197	・田染八景 「北方河内村界より東田原村界に至るの間、泉石絶佳」ほか八景の句などの記載 ・鍋山 「仰ぎ見る空も危し疾く過きよ、崩残りたる岩の下道」の和歌
田染村志	大分県西国東郡田染村 編	1932　昭和7	187–189 189–190 190–191 巻末	・田染盆地の大観 （略）池部大平の丘上に達、南面眸を放て看看せよ、脈の奇峰宛然連砦の如く、左鋸山より起りて熊野に及び従えて烏帽子嶽、華岳山、西叡山となる。（後略） ・田染耶馬 ・田染八景 ・「田染村圖」 奇岩をあらわす描写が「菊山連峰」、「間戸ノ奇岩」、熊野社北の「五ツ岩」、鍋山耶馬のところ
観光国東半島	酒井冨蔵、国東半島文化研究所	1964　昭和39	34 37	豊後高田市の史蹟名勝観光地 ・鍋山耶馬、門（ママ）戸耶馬の記載あり 国東半島の史蹟名勝観光地 ・田染耶馬（直（ママ）木大堂の西の位置）、鍋山耶馬の記載あり
国東半島の旅	原田種夫編、西日本観光出版社	1966　昭和41	40 57	・40p の地図に「田染耶馬」の表記あり。（本文の説明なし。位置は山香町との境。） ・この巨像のところの後を上るとすぐ五つ岩、鋸山になって眺望がよく、鋭く鋸の形をした岩峰の重曹は絶好のハイキングコースだ。
国東半島	戸井田道三「国東半島紀行」、毎日新聞社	1971　昭和46	173	（熊野磨崖仏の帰り）「やっと石段をおりて、前景を見わたして、はっと目を洗われた。上る時には背にしていたから気がつかなかったが、谷をへだてて向うに峨峨とした奇岩の景勝があった。田染耶馬とも鋸山系とも呼ばれているそうで、天念寺背後の奇岩の奇岩峭立する山姿とも感じが似ている。」
旅　1974年8月	安田百合子「国東半島･念仏の浄土をゆく」	1974　昭和49	82–83	・「今熊山胎蔵寺。田染耶馬と呼ばれる鋸山系の山塊にある」 ・「石段を下り、山道を下り始めると、前方には田染耶馬の岩峰の連なり、背後には西叡山が望める。」
石仏の里の旅	別冊るるぶ	1981　昭和56	129–140	・写真「田染の里」位置不明 ・「この付近は鍋山耶馬と称される切り立つ岩の美しい所」

全国を講演してまわった。この巡講の様子を記したのが「南船北馬集」である。これは旅行ガイドブックとしても読むことができ、円了はむしろそれを意図したのではないかともされている[vi)vii)]。

田染耶馬の最も具体的な記述は1932（昭和７）年の前田多三郎による「田染村志」に見られる。これによると、田染耶馬は熊野耶馬、鍋山耶馬、間戸耶馬の三箇所からなる。熊野耶馬は鋸山から西に伸びる峰で「筍起群立せる怪奇の峰」を称して「五ノ岩」といい、さらに熊野山まで連なる奇勝となる。鍋山耶馬は「田染川の南岸、數十丈の懸崖壁立して、葛蘿之に纏ひ、崖頭往々老松の舞ふが如きを觀る」。そして、春には鶯、夏には河鹿が鳴き来訪者を立ち去り難くしているという。また、間戸耶馬は「風化水蝕作用最も巧妙に行はれ」、朝日岩屋、夕日岩屋、穴井戸などが含まれる。そして田染には十八間の窓（間戸）があり、田染耶馬は「豊前の本耶馬にも勝る」と書かれている。

田染耶馬の項目のほかに名所旧跡として「田染盆地の大観」には盆地から見る周囲の山々の景観の素晴らしさが描写されている。また、「田染八景」、「西叡山」、「穴井戸の雛」、「朝日夕日の観音」などもそれぞれ項目として紹介されている。巻末の図には奇岩の描写が５箇所あり、「菊山連峰」、「間

戸ノ奇岩」、熊野社北の「五ツ岩」のほか、名前の記載はないが鍋山耶馬とその川向かいにそれぞれ見られる。

②昭和中期以降：観光資源としての田染耶馬

大正時代から日本交通公社等が発行している雑誌『旅』には1932（昭和7）年から国東半島関係の記事が掲載されているが、最も多いのは1960年代後半からの古寺や石仏をテーマにした特集である[viii]。1970年代に観光の大転換が起こったのは旧国鉄による「ディスカバー・ジャパン」キャンペーンと言われている[ix]。国東半島はこうした社会背景の中であらためて「仏の里」として観光目的地になったとも考えられる。1979（昭和54）年の記事には女性の観光客が旅雑誌の『るるぶ』を抱えて大応寺近くの民宿に宿泊した様子が書かれている[xi]。この記事には徐々に観光化する国東半島の様子や地域の人々がそれをゆったりと受け入れるさまが記されている。文化財が多い田染地域はこうした旅の目的地となってきた。

旅行ガイドブックには田染地域の主な文化財が掲載されているが田染耶馬に関連する記載は多くない。1968（昭和43）年発行の「国東半島」には富貴寺と真木大堂が観光目的地として紹介されているが田染に関する記載はない[xi]。1964（昭和39）年の『観光国東半島』や『国東半島の旅』の地図には田染耶馬の表記があるが前者は真木大堂の西、後者は山香町境であり場所は一定していない。1971（昭和46）年の紀行文と1974年の雑誌『旅』の記事には熊野磨崖仏からの帰りに正面に見える鋸山を田染耶馬と呼んでいると記されている。このように、それぞれの岩山の記述はあるものの観光資源としては田染耶馬の位置が明確ではないことがわかる。

③現在：文化遺産としての新しいまなざし

1980年代以降の田染地区の調査研究の成果によって、近年ではさまざまな認定や登録が続いている。地域に住む人々や長年かかわり続ける研究者のとりくみが実を結び田染地区は多くの称号を得た。2000（平成12）年度は農林水産省の田園空間博物館事業『八幡荘園の郷』の取り組みがあり、西叡山や間戸岩屋が主な展示物となった。2010（平成22）年には国の重要文化的景観に選定され（2016（平成28）年追加選定）、2013（平成25）年には「クヌギ林とため池がつなぐ国東半島・宇佐の農林水産循環」が世界農業遺産になり田染荘は認定に重要な役割を果たした[xii]。2018（平成30）年には文化庁の日本遺産に認定され重要文化的景観の要素である夕日岩屋、未指定文化財として西叡山が構成文化財となっている。そのほか、2011（平成23）年には公益社団法人日本ユネスコ協会連盟の「千年の時を刻む荘園村落遺跡『田染荘小崎』」が第三回プロジェクト未来遺産に登録された。

さらに、1961（昭和34）年に復活した峯入り道は[xiii]、現在は国東半島峯道ロングトレイルの一部になり田染荘はT1ルートの通過ポイントとなっている[xvi]。国東半島の峯をまわる「六郷満山峯入行のコースをベースに、（略）楽しく、そして心地よく歩けるトレイルとして再構成したもの」である。真木大堂から穴井戸観音、朝日・夕日観音、田染荘がポイントになり、その後西叡山へと登るルートが設定されている。

4. おわりに

以上のように中世から現在まで、田染地区は時代に応じた人々のまなざしの対象となってきた。田染地区の耶馬は修行と信仰の場であるとともに、そこを訪れる人々の驚きや賞賛の対象であったことがわかる。現代まで継続して評価が繰り返され、結果としてさまざまな称号を与えられた。櫻井が指摘するように国東半島の特色は仏の里だけではなく過去から現在までの多様な営みを身近に感じられるところにある 。「天念寺耶馬及び無動寺耶馬」指定の報告書にも記されている通り[xvi]、真木大堂の諸仏、熊野磨崖仏、富貴寺大堂などの有形文化財指定、重要文化的景観の選定に加え、信仰の上でもそれらと密接な関係がある田染耶馬の広い範囲を名勝に指定することが田染地区全体の風致景観の維

持と向上につながると考えられる。

i　櫻井成昭（2005）『六郷山と田染荘遺跡』, 同成社 , 110
ii　前掲 i（櫻井（2005））, 100
iii　井上忠（1963）『貝原益軒』, 吉川弘文館 , 107
iv　筑紫豊（1972）「豊國紀行　解題」, 日本庶民生活史料集成第二巻 , 三一書房 , 477-478
v　田中菊次郎（1987）「円了と民衆―南船北馬集の世界―」,『井上円了の思想と行動』, 東洋大学 , 327-346
vi　前掲 v（田中（1987））, 338
vii 井上円了（1997）『南船北馬集：第二編』, 井上円了選集 12, 東洋大学創立一〇〇周年記念論文集編纂委員会 , 349-357, http://id.nii.ac.jp/1060/00002946/
viii たとえば「旅」1967 年 2 月特集 / 九州 旅情を満喫する九州コース 国東半島と臼杵の石仏めぐり , 1974 年 8 月「国東半島特集」など
ix　白幡洋三郎（1996）『旅行のススメ』, 中公新書 , 78-83
x　宮丸吉衛（1979）満山これ文化財　国東半島 , 環境文化 , 第 42 号，5-23
xi　日本交通公社（1978）『最新旅行案内 16 九州』, 145-148
xii 国東半島宇佐地域世界農業遺産推進協議会ホームページ http://www.kunisaki-usa-giahs.com/about_giahs/system.html
xiii 文化庁文化財部記念物華（2016）名勝に関する特定の調査研究事業報告書（大分県の名勝に関する特定の調査研究事業）, 10
xiv 国東半島峯道トレイルクラブ http://www.kunisakihantou-trail.com/course/t-01.html
xv　前掲 i（櫻井（2005））, 168
xvi 豊後高田市教育委員会（2016）天念寺耶馬及び無動寺耶馬　名勝調査報告書 , 20

第４節　「名勝」でどうする？　～名勝の活用を考える～

吉永　浩二

文化財としての「名勝」とは、文化財保護法（以下、「法」と記す）第１章第２条４によると「（前略）庭園、橋梁、峡谷、海浜、山岳その他の名勝地で我が国にとって芸術上又は観賞上の価値の高いもの（以下略）」と定義づけられている。そして、同法第１条に、法の目的として「この法律は、文化財を保存し、且つ、その活用を図り、もって国民の文化的向上に資する（以下略）」と明記されている。

つまり、法で指定された「名勝」とは、芸術上及び観賞上価値の高いもので、なおかつ保存されるとともに活用も図られなければならないものと言うことになる。

名勝には、いわゆる自然的なものと人工的なものがあるが、そのいずれであっても「名勝」を「保存」し「活用」するとは、具体的にどういうことなのであろうか。ここでは、その中でも特に名勝の「活用」という点を中心に考えてみたい。

（１）何を観せる？

名勝とは、ある意味観賞されることでその存在感を得ているわけであるから、先ずは人が見て楽しむ、あるいは人を感動させることが第一である。見るのは人間であるから、目の前に広がる景色はもちろんのこと、その時の季節や天候、時間帯、あるいは見る人のその時点での感情など、様々な要素が複雑に絡み合って、見る人の心を動かす。これこそ、法で言う所の「観賞上の価値」であろう。そして、その価値をより高めるためのアクションが、名勝を活用することの一つの意味と言うことになる。

それでは、この「田染」の名勝では、何を観賞してもらおうとするのであろう。名勝を保存し活用するためには、その対象とするモノや場所（観てもらいたい景色）を明確にし、その価値を認識することが先ず求められる。

今回の報告書では、「鍋山」・「喜久山」・「朝日岩屋及び夕日岩屋」・「穴井戸観音」・「ウトノアナ及びゼゼノサマ」・「西叡山」が挙げられている。ここで、国による名勝指定の基準を確認すると、「（以下に掲げるもののうち）わが国のすぐれた国土美として欠くことができないものであって、その自然的なものにおいては、風致景観の優秀なもの、名所的あるいは学術的価値の高いもの、また人文的なものにおいては、芸術的あるいは学術的価値の高いもの」とし、具体的には

1　公園、庭園
2　橋梁、築堤
3　花樹、花草、紅葉、緑樹などの叢生する場所
4　鳥獣、魚虫などの棲息する場所
5　岩石、洞穴
6　峡谷、瀑布、渓流、深淵
7　湖沼、湿原、浮島、湧泉
8　砂丘、砂嘴、海浜、島嶼
9　火山、温泉
10　山岳、丘陵、高原、平原、河川
11　展望地点

が明示されている。国東半島では、平成29年来、３箇所の名勝地が国の指定を受けている。それぞれの指定がどの基準に基づいたものかを見ると、「天念寺耶馬及び無動寺耶馬」（豊後高田市、平成29年10月13日指定）は、基準の「５、11」、「文殊耶馬」（国東市、平成30年10月15日指定）は「５」、「中

山仙境（夷谷）」（豊後高田市、平成 30 年 10 月 15 日指定）は「5、11」となっており、いずれも基準の内「岩石、洞窟」または「展望地点」が評価されたものであることが分かる。

そこで、改めて本調査報告書に挙げられている 6 箇所を見ると、「鍋山」や「ウトノアナ及びゼゼノサマ」などは、やはり連なる岩峰・奇岩がメインと考えられる。ここでは、永年の火山活動や浸食などで形成された奇岩の連なりを観せ、自然が作り上げた「国土美」を観賞してもらうことになるのであろう。「朝日岩屋及び夕日岩屋」は、岩峰の連なりを観せると同時に、重要文化的景観の認定をも受けている「田染荘及び小崎」の景観を展望させる地点としても重要である。展望地点としては、「喜久山」の岩峰を観せる馬城山山頂なども捨てがたい。また、「西叡山」や高山寺の駐車場から観る国東半島や豊後水道は絶景で、展望地点としての価値は高いと思われる。一方、「穴井戸観音」は、岩峰の連なりや展望地点としての価値より、仁聞菩薩の修行場や田染荘における「水」への憧憬などの言い伝えを踏まえた敬虔な雰囲気と神秘的な深い洞窟を観せることになるのであろう。

いずれにしても、広いエリアを名勝として活用する場合、何を観せたいのかを明確にし、そのことは、行政はもちろんのこと、地域に住む人たちも共通の認識を持っておくことが重要である。

特に地域の住民にとって大切なことは、「名勝」の対象となる景観が、日頃から見慣れている「何でも無い景色」であっても、その景色の何がどう素晴らしいのかを十分に認識し、共通理解を持って、ここでは「何を観せるのか」「何を観せたいのか」をはっきりと意識しておくことである。

鍋山

夕日岩屋から田染荘小崎を望む

穴井戸観音への参道

「宇佐・国東ふれあい歴史のさと研究委嘱事業」で作成した案内板

（2）どう観せる？

国東半島は、六郷満山の仏教文化と神仏習合はもちろんのこと、宇佐神宮や弥勒寺の荘園あるいは武士団たちの興亡など、豊かな自然を背景にした歴史と文化、そしてそれらを物語る歴史遺産に恵まれた地域である。有形・無形の文化財が数多く残る国東半島は、これまでも地域の人たちに大切に守られ、行政を通した施策によっても、その価値が顕彰されてきた。古くは、江戸時代の三浦梅園による評価や高井八穂による『夷谷八景』などが挙げられるが、現代においても国東半島の自然や歴史・文化財への評価は依然として高い。県・市に指定された有形・無形の文化財が多いことはもちろんであるが、平成 13 年度には文化庁による「ふれあい歴史のさと研究委嘱事業」の採択を受けた県教育委員会が、「宇佐・国東ふれあい歴史のさと研究

委嘱事業」として宇佐八幡宮と六郷満山仏教文化に係わる歴史とそれを如実に示す文化財のすばらしさを再認識し、生涯学習や学校教育の中で広く活用されることを目的として『宇佐・くにさきの歴史と文化財』を刊行している。また、こうした実践を背景に、平成20年には、世界文化遺産のわが国における暫定リスト入りを目指して「宇佐・国東―神仏習合の原風景―」というテーマで提案している。残念ながら採択はされなかったが、こうした世界遺産を目指す活動が、国東半島の歴史や文化、そしてそれらを育んできた素晴らしい自然景観が再認識される契機となったことは否定できない。

また、六郷山寺院の僧侶たちによって行われた「峯入り」のコースをベースにして整備された「国東半島峯道ロングトレイル」も、幾つかのコースが提唱されていて、その中には熊野磨崖仏から高山寺を結ぶコースがあり、本報告書に挙げられている名勝ポイントのほとんどが含まれている。

一方、平成22年8月には、田染地区の中心的な地域が「田染荘小崎の農村景観」として重要文化的景観に選定された。これは、「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のために欠くことのできないもの」(「法」第1章第2条5)という定義によるカテゴリーのもので、当時の文化庁HPによると「田染荘を構成する村落・農地のうち、小崎地区は小崎川中流域左岸の台地上に当たり、史料・絵図に残る村落名・荘官屋敷名と現地に遺存する地名・地割・水路等との照合により、14世紀前半～15世紀における耕地・村落の基本形態が現在の土地利形態にほぼ継承されていることが知られる。現在、水田オーナー制度の下に、住民による文化的景観の保存活用事業が進みつつあり、農地としての土地利用形態の維持にも期待が持てる。中世の荘園遺跡に起源を持ち、近世から近代にかけて緩やかに進化を遂げた国東地方の農耕・居住の基盤的な土地利用形態を示す文化的景観として価値が高い。」との評価を得ている。

「田染荘　中世村落遺跡跡」の説明板

「田染荘小崎探訪」の案内板

さらには、平成25年5月に、宇佐・国東地域が「クヌギ林とため池がつなぐ国東半島・宇佐の農林水産循環」という名称で世界農業遺産に認定された。これは、降水量が少なく、水の確保が困難であった国東半島や宇佐地域で、小さなため池を連携させて効率的な土地・水利用を行い、ため池の水をかん養するクヌギ林の景観やため池の水を利用した水稲・七島藺などの水田農業、さらにはクヌギを利用したしいたけ栽培など、自然の新陳代謝を利用した農林水産システムが評価され、かつそれらによって保たれてきた里山の環境と景観が見直されたものである。

「間戸ン岩」の遠景

以上のように、国東半島の中でもとりわけこの地域は、自然景観あるいはそこでの人々の風習や営

みが、これまで様々な形で評価・顕彰されてきた。地域の生業や生活によって醸し出された景観を評価する「文化的景観」や循環型の農林水産システムが評価される「世界農業遺産」、さらには歴史・文化を知るよすがとしての文化財やトレッキング・ウォーキングを楽しむ場としてなど、評価のカテゴリーも多岐にわたっている。今回、さらに「名勝」というカテゴリーで評価をしようとする場合、これまで評価されてきた部分とどう整合させ、価値観を共有させていくのかが課題になってくる。名勝としての評価が、これまでの評価価値を高めるものでなければならないし、新しい価値を付加し、価値の理解を深めるものでなければならない。そのためにも、本報告書で示されている名勝ポイントを「どう観せるか」が大切なのではないか。

例えば、「朝日岩屋及び夕日岩屋」からの田染荘小崎地区の眺望に、文化的景観や世界農業遺産の評価要素をどう加味させるのか。夕日岩屋から小崎地区を眺望する時、同時に文化的景観や世界農業遺産としての価値・意義を理解してもらうのがBestであろうが、そのためには説明板の設置などが考えられる。その説明板も、設置する場所（位置）によっては、眺望を妨げる結果を招きかねない。また、「朝日岩屋」や「夕日岩屋」のある岩峰そのものも、田染荘小崎の景観として重要な要素になっている。これらの岩峰を「名勝」として観賞させるには、どこからどう観せるのが最もよいのか。電線などの遮蔽物が間に入ることなく、かつ田染荘小崎の農村景観とマッチした中での眺望地点がどこなのか、はっきり示す必要がある。

一方、国東半島の峰峯が見渡せ、遠くは周防灘が遠望できる西叡山高山寺からの眺望は、大変見事なものである。「西叡山高山寺」が歴史上見えるのは12世紀半ば頃の『二十八山本寺目録』と言われているが、現在の「高山寺」は昭和59年(1984)に再建されたものである。文化元年（1804）に幕府に献上された『豊後国志』の中の「巻之二　国東郡志」には、高山寺のことが以下のように記されている。「高山寺（西叡山と号す。来縄郷佐野村東南の高山に在り。山勢秀抜にして、旧、七堂伽藍有り。堂宇荘儼たれども、今は廃せり。礎石、尚存す。）」（以上、『訓読　豊後国志（竹田市発行）』より）こうした文献でも、「高山寺」は江戸時代に焼失したという寺院の歴史や西叡山にある「金水銀水岩屋」や「戸無し戸の口」などにまつわる伝承など、単なる展望地点ではかたづけられない独特の個性を持っていることが分かる。他の箇所、例えば現在「三ノ宮の景」と呼ばれる名勝地を含む「鍋山」地区にも、三ノ宮八幡社、鍋山磨崖仏、江戸時代にさかのぼる「田染八景」などの要素を踏まえた物語や歴史が背景にある。

このように、田染地区に点在する名勝候補地（山・川・神社・寺院・磨崖仏・岩窟・岩峰等々）は、古来から多くの詩歌に詠われたり、「田染八景」などで名勝地として評価されていたり、あるいは六郷満山仏教文化に代表されるような歴史・伝承等に溢れていたりと、その多くがこの地方独特の風土やその背景にある歴史・文化を反映している。だからこそ、名勝として観せようとする場合、その背景にあるものを同時に感じとってもらうことが、この地域、ひいては国東半島における名勝にとって重要なことであり、そのための「観せ方」について大いに工夫していかなくてはならない。

（3）観せてどうする？

先に述べたように、文化財としての「名勝」は、「観せる景観」があり「観る人」があって初めて成り立つカテゴリーである。もちろん、「観る人」の心の状態やその時の天候などによって、同じ景観でも受ける印象は異なるが、「観せる景観」を有する地域住民の意識やその景観への取り組み方によっても、大きく印象が違ってくるものである。地域の人たちにとって、見慣れた何でも無い風景が、「名勝」というカテゴリーで文化財としての価値を付された時、戸惑いと同時に、「それが自分たちの生活とどう関係してくるのか？」という疑問が湧いてくるのではなかろうか。これは、「名勝」に限ったことではなく、昨今の様々な「文化財指定」に対する地元住民の偽らざる心境ではないかと愚考し

ている。そうした実態を踏まえたのか、最近の文化財保護行政は、貴重な文化財を「保存」することは当然のこととして、その文化財をいかに「活用」するかが、かなり大きな要素を占めるようになってきた感じがする。「保存」あっての「活用」と言うより、「活用」あっての「保存」という流れを強く感じるのは私だけであろうか。

文化庁も平成30年10月からの組織再編で、これまで文化財部の下に分野別の各課（記念物課など）が配置されていたものが、建造物以外の有形文化財や無形・民俗文化財などを扱う「文化財一課」と建造物や記念物・文化的景観・伝統的建造物保存地区などを扱う「文化財二課」に再編成されている。中でも注目すべきは、文化財（「文化資源」と表現している）の活用や世界文化遺産・日本遺産などを担当する「文化資源活用課」という部署が新たに組織されたことであろう。これまでの分野別タテ割りの文化財保護行政から機能重視の組織へ・・というコンセプトによるものであろうが、これまで以上に「活用」を重視していることは明白である。

こうした「活用」重視の動きは、昨年改正された「文化財保護法」にも表されている（平成31年４月１日施行）。改正内容を見ると、都道府県は文化財の保存・活用に関する総合的な大綱を策定できることになっており（「法」第183条の２）、市町村もその大綱を受けて文化財の保存・活用に関する総合的な計画（文化財保存活用地域計画）を作成できることになっている（「法」第183条の３ほか）。個々の文化財についても、所有者や管理団体は保全活用計画を作成できるようになっており（「法」53条の２ほか）、こうした保存活用に関する計画が国に認められると、現状変更や補助事業による整備・修理などの事業が円滑に進められるようになるとされている。

このような流れの中で、田染地区における名勝地とその「資源」を有する地元地域にとって、名勝という新たなカテゴリーの「文化資源」が加わることがどんな意味を持つのであろうか。

「活用」ということを考える時、先ず浮かんでくるのが、名勝をどう活用して地域の活性化につなげるか・・という命題である。名勝として評価されたことで、地域が住みやすくなり、他地域の人からも住みたいと思われるような場所になっていくことが理想であるが、少なくとも「名勝地と言われるようになって、住みにくい地区になってしまった」という評価だけは避けたい。観光客が増えたことによる様々な弊害については、他の観光地でもよく耳にすることであるが、それはやはり住民と行政が一体となって取り組んでいかねばならないことであろう。特に当該地区のように、自然美（植物や奇岩・奇峰の地形美）と六郷満山仏教文化に代表される歴史と文化を背景とした有形・無形の文化財を重要な要素に持つ名勝地は、訪れる多くの観光客や開発の波から守る（＝保存する）ことが最も優先される。そのためには、先述したように、住民一人一人が名勝地としての意義や価値についてしっかりと認識し、こころから「誇り」に思うことが大切である。

訪れた人が「視点場」に行き、美しい景観だ・・と感動して帰るだけでは物足りない。素晴らしい景観に感動するとともに、その景観を日常的な視野に入れられるその地域（例えば、当該地域である田染地区）をもう一度訪れたい、この景観をいつまでも守ってもらいたい、そこに住んでいる人たちが羨ましい・・と思ってもらえて初めて、その名勝が「活用」されたと言えるのではないか。それには、やはり、その地域に住んでいる人が何よりもその景観を愛し、誇りにし、訪れた人たちに景観や歴史などについてしっかりと語れることが重要であろう。地域住民が関心をもたない名勝（文化財全般も）は、いずれ忘れ去られていく。文化財を「活用」するとは、地域の人たちが、その文化財（この場合は「名勝」）をいかに愛しているかを上手に「発信」することだとも言えるのではなかろうか。

そして、田染地区の場合は、これまでも「重要文化的景観」や「世界農業遺産」として評価されているという「実績」がある。また、同じ国東半島内には、平成29年来３箇所の国指定名勝が誕生し、田染地区の名勝候補地も、それらと同様の構成要素を有している。さらには、日本遺産としての価値も認められ、昨年の六郷満山開山1300年祭と合わせて、田染地区を含めた国東半島全体が再評価さ

れている時期でもある。こうした動きの中で､地域の人たちがどれだけこの地域の「価値」を認識し、誇りに感じているのか。感じている愛着心や誇りを、これからどう表現し、発信していくのか、そしてそのことを日常の暮らしや地域の将来にどうつなげていくのかを、じっくりと考える段階に来ているのではなかろうか。

（4）まとめ

ここまで、名勝の活用ということについて、基本的な考えを述べてきた。文化財（名勝を含む）を保護するということは、ただ単に「保存」するだけでなく、その文化財を「活用」することも含まれていることは言を待たないが、それは「保存」あっての「活用」であることを常に忘れてはならない。昨今の観光重視の風潮は、文化財の存在を広く認識してもらう点ではありがたいことであるが、それはあくまで「ホンモノ」の文化財であることが前提であり、我が国や郷土ふるさとの歴史・文化で、現時点ではっきりしている真実を示すモノでなくてはならない。

西叡山高山寺の駐車場からの眺望

田染地区における「名勝地」を文化財として保存・活用するためには、先述したように、どこから何をどう観せるのか､観せることで地域をどうしようとするのか‥をしっかり考えておく必要がある。それには、短期的な部分と中長期的な部分がある。短期的には、今回の報告書で再認識した名勝候補地を、国や県の指定名勝あるいは国の登録記念物（名勝）など、どの文化財カテゴリーによって評価されることを目指すのか。すでに認められている「重要文化的景観」や「世界農業遺産」との連携をどうするのか。名勝地や視点場をどう標記し、観光客の利便に応えるのか。文化財＝名勝としての価値を、地域住民とどう共有していくのか。中長期的には、田染地区において様々なカテゴリーで認められた価値を、これからの町づくりにどう活かしていくのか。田染地区だけでなく、国東半島全域に広がる仏教文化の歴史や奇峰・奇岩などの貴重な風景を、今後どのように顕彰し、価値付け（ある意味戦略的な）を進めていくのか。これらの課題を、行政だけでなく、地域住民が一緒になって取り組んで行くことで、名勝としての価値を共有することができ、より分かり易い景勝地が、点ではなく面・あるいは線としての広がりをもつことができるのではないか。そして、そうした中で、人々が心安らかに生活できる場、郷土を愛する心を育む場としての「名勝」が、多くの人たちに観賞され、感動を与えていくのではないか。このような動きそのものが､「名勝」を「活用」することではないかと考える。

第５節　百八十三ヶ所霊場と景観

岡部　　功

国東半島六郷満山の回峰修行である「集団での峯入り」は、江戸時代に始まったとされ約 20 年に一度行われてきた。しかし嘉永 6 年（1853）を最後に中断していた。明治初年の神仏分離令や修験宗の禁止令、日清・日露の戦争に加えて此たびの大戦などが要因かと思われる。江戸時代最後の峯入りから 100 年以上経過した戦後その復興の機運が急速に高まり、昭和 32 年、33 年に峯道・行場などの確認作業が行われ、昭和 34 年（1959）3 月 23 日から 5 日間をかけて復活し昭和 35・36 年、更に 54 年に実施され以降現在約 10 年に一度「集団での峯入り」が行われている。次回は平成 32 年（2020）に予定されているが、六郷満山開山 1300 年を前に昨年（2017）、従来の「峯入り」の行程とは一部異なるが『豊前豊後百八十三ヶ所霊場記』に記された仁聞ゆかりの寺・堂・祠・岩窟など 183 か所の霊場を六郷満山会の僧侶の方々が約 1 カ月を要してすべてを巡拝された。

『豊前豊後百八十三ヶ所霊場記』とほぼ同様の 183 か所の巡路を記したものは、①『豊後国六郷山巡礼手引』（以下マイクロ本）（松岡実氏翻刻　大分県修験史料（1957））　②『豊後国六郷山巡礼手引』（以下巡礼記本）(櫻井成昭氏翻刻　六郷寺院遺構確認調査報告書　Ⅸ（2001））　③『豊州前後六郷山百八十三所霊場記』（以下霊仙寺本）（櫻井成昭氏翻刻　大分県立歴史博物館研究紀要 4（2003））　④『豊前豊後六郷山百八十三ヶ所霊場記』（以下千燈寺本）(小玉洋美氏翻刻　六郷満山関係文化財総合調査概要（二）（1977）)　⑤『豊州雑誌四十六仁聞菩薩の條』（以下半島史）(河野清実氏翻刻豊後国東半島史（1935）) を手にすることができる。

このうち霊仙寺本は宝暦 5 年（1755）9 月に書写されたものを大正元年（1912）10 月に霊仙寺青山映道蔵住職が書写したとある。また千燈寺本は、霊仙寺本を昭和 23 年（1948）に千燈寺一乗坊豪正住職が書写したものである。また巡礼記本は昭和 32 年（1957）年松岡実氏が『大分県修験史料』豊日史叢書Ⅰ（大分大学図書館　写）に紹介したマイクロ本を翻刻時に参照したとされる「香々地町隈井涕吉氏蔵の『手引』（所在不明）」を『大分県史料』編纂時に撮影されたマイクロフィルムから櫻井成昭氏が再翻刻されたものでこれも書写されたものである。

これらの原本の成立については、櫻井成昭氏は「六郷寺院遺構確認調査報告書」と「大分県立歴史博物館の研究紀要 4（6）」のなかで、元禄 2 年（1689）以降　正徳 2 年（1712）ごろの成立であるとされている。

六郷満山･大岩屋山応暦寺の先代住職大嶽順公氏は『国東文化と石仏』（1970）の中で、「峯入行は、仁聞修行の霊場を巡って、その間きびしい、抖擻・頭陀の行をとり仁聞が行った通りの行を履修して宗教的霊験を体感する久修練行である。江戸期における豊前豊後 183 か所の霊場巡拝とは全く別なものであるが、最近復興（昭和の復興）した「峯入り」は概ね 183 か所の巡路に準拠した」としている。

また『峯入りの道』（1981）の中では応暦寺所蔵の「修正鬼会経文第六巻」に「天正ノ比ハ住持順慶法師峯七拾五度　寛文ノ比ハ住持澄慶法師入五度」とあるとしている。このことは中世までは、個人で仁聞久修練行の地を求めたのであろう。江戸時代に入り、衰退した六郷満山復活の一策であろうかと推察するが、各所に残る柱銘や修札などから仁聞修行の場を求めて「集団での峯入り」が行われている。それは２月８日に田福村（豊後高田市）の玉井堂に集まり、

峯入りの様子（田染小崎 , 平成 22 年）

月末まで約一カ月をかけて、各所で修行を重ねて、両子寺（国東市）までの間で行われている。富貴寺の柱銘にある「元禄十四年（1701）六郷山仁聞大菩薩古跡二月十三」がもっとも古いものとされ、これが始まりと考えられる。「集団での峯入り」の始まりと「霊場記・巡礼手引」の成立はほぼ同時期と推測する。

仁聞ゆかりの霊場である寺・堂・祠・岩窟の記された 183 か所は国東半島西部の、嶋原・延岡藩及び立石・日出領に属する霊場が 123 ヶ所約 67％、田染地区には約 25％に当たる 45 か所がある。これら霊場記・巡礼手引が「西国三十三所観音霊場」や「四国八十八か所」と同等の一般人を対象にしたものならば、現在に至るまでの間、何らかの形で受け継がれていようがその様態は残されていない。修行僧を対象としたものと考える。「宇佐宮八幡御託宣集」にある、“後山の石屋より始めて、横城に至るべし”は 1 番札所の後山金剛照寺から 183 番の横城山東光寺である。

火山活動や地形の隆起によってもたらされ、国東半島一帯に点在する凝灰岩の奇岩、秀峰・岩窟は我々にすばらし景観は与えてくれている。しかしその山中は仁聞修行の場・霊場につながっている。

＜熊野磨崖仏、鍋山不動尊周辺＞

鍋山磨崖仏

後山金剛照寺（1 番）から始まる霊場記は、封戸郷・山香郷を経て鋸山山麓の山香・妙善坊（23 番）から田染地区の巡路に沿って喜久山連峰が連なりゼゼノウサマ（赤岩）、ウトノアナを仰ぎ見て今熊野山胎蔵寺（24 番）へ向かい、熊野権現社の鳥居を潜ると峯入りの時に僧侶がホラ貝を吹いたとされるホラガ石がある。国指定の熊野磨崖仏から熊野権現社を経て急傾斜面を登ると大曲観音堂（25 番）がある。木造観音菩薩坐像は宇佐宮の荘園田染荘を支配した宇佐栄忠の援助を受けて、大曲にあった妙泉庵の本尊として製作されたものであるとされている（大分県立歴史博物館『千年のいのり―聖なる山・くにさき―』（2002））。また境内には県指定の国東塔がある。稲積山慈恩寺（26 番）は建武の注文案で本山末寺馬城寺末寺と記された稲積岩屋である。豊後国田染組観音堂村絵図にも堂として記され、村境に五つの大岩が桂川沿いに描かれている。現在の三ノ宮耶馬である。桂川を渡たり 100 段ほどの石段を登った所に　稲積不動堂（64 番）がある。鍋山不動尊である。「国東半島の山岳霊場遺跡 - 六郷山の寺院と信仰」（2014）のなかで三谷紘平氏は「稲積不動堂に隣接する田染三宮八幡社は別名稲積大明神と称し、三宮大明神（65 番）の対面にそびえるのが三ノ宮耶馬である」としている。

＜喜久山連峰の景観＞

馬城山から見た喜久山

伏原山東光寺（27 番）は馬城山伝乗寺薬師堂跡と伝えられる場所で県指定の城山国東塔や市指定の城山薬師堂跡四面石仏がある。馬城山伝乗寺 (28 番) 現在の真木大堂のご本尊木造阿弥陀如来坐像、木造四天王立像、木造大威徳明王像並びに木造不動明王及び二童子立像は総て国指定文化財である。建武の注文案の馬城寺の四至の西限はエボシ嶽とある。真木大堂から烏帽子岳に掛けての景観は古くから喜久山連峰と呼ばれた峰峯が続き修行の場とされたところである。陽平の福寿院 (寺) (29 番) から烏帽子嶽観音堂 (30 番) へと続く。福寿院 (寺) には県指定である福寿寺薬師堂磨崖国東塔がある。烏帽子岳観音堂の本尊観世音菩薩は仁聞の作であ

るという伝承があり（田染村志（1932））、各方面から眺められる景観の山中は仁聞ゆかりの地である。数々の奇岩が連なる烏帽子岳付近には人々の目をそばだたせる夫婦岩が起立する。喜久山連峰の秘境と言われる大乗楽・小乗楽の山峡を経て　聞（菊）山岩屋（31 番）に向かう。菊山岩屋は現在は拡張工事などによってその場所は定かではない。日向延岡藩菊山村は中世は田染荘に属したが、慶長 7 年（1600）には中津藩、寛永 9 年（1632）には竜王藩、 正保二年（1645）には幕府領杵築藩預りとなり、寛文 9 年（1669）周囲が肥前嶋原藩領となる中で、菊山村は幕府領のままで元禄 2 年（1689）から幕府直轄領となり、正徳 2 年（1712 に、日向延岡藩になった経緯がある。前述した霊場記等の原本の成立時期を判別する材料の一つになったとされている。直接統治者不在の島原藩内では、その存在が薄れたのではないかと考える。菊山領に住民なし（『田染村志』）。

＜夕日岩屋・朝日岩屋＞

桂川畔の田圃のなかに市指定の宝筐印塔が残る。釈迦堂（32 番）である。馬城山伝乗寺末坊の一つである釈迦堂跡である。また北壁から南壁にかけて 5 躰の尊像が彫られた大門坊（36 番）磨崖仏は市指定の文化財である。不動岩屋（37 番）は国指定の元宮磨崖仏（中村不動堂）である。二宮大明神（33 番）は間戸大明神（八幡宮）と呼ばれ間戸岩屋の入り口に位置する。

夕日岩屋からの眺望

穴井戸観音

朝日山間戸寺（35 番）は現在その場所を比定することはできないが、霊場記・巡礼手引では行程に加えて付近の状況などを詳しく記している箇所がいくつかあるが、「此岩屋穴深し、間戸村ニ而松明もらい　ともして入りて見るへし」とあり穴井戸観音を札納所としていると考えられる。厳しい岩場・岩窟を近隣住人と連携して仁聞に迫ろうとしたことがわかる。穴井戸観音、朝日（観音）岩屋（34 番）・夕日（観音）岩屋（40 番）のある岩峰からの景観は国の重要文化的景観に選定されている田染の荘小崎の水田景観が広がる。その奥には田染地区の中でも最も厳しい修行の場の岩峰が連なっている。国選定重要文化的景観の田染平野と一体化して美しい歴史的景観を与えてくれている。

愛宕山大権現（42 番）から垢離場、大山観音堂、鶏亀地蔵堂（43 番）からは「これより五丁ほどむつかし案内傭いてよし」、轆轤岩屋（44 番）へ向かう。「くつかけノ岩屋　まで　壱里ほど山越しむつかし案内傭ひてよし」とあり、鞍懸山馬頭寺（神宮寺）（45 番）は「当寺ハむかしほり崩し城に仕候由」と記してある。最勝山岩屋（46 番）までは「壱里道なし案内なしには難儀候」。更に良醫岩屋（西方寺）（47 番）、払阿弥陀堂（48 番）、花井岩屋（49 番）、中ノ西岩屋（50 番）へは総て「道なし」が続く。険しい難所が続き道なき山中は見上げる我々にはすばらしい景観である。霊場は幻の寺、西叡山高山寺（51 番）へとつながる。巡路に加えて添書がみられるのは田染地区内で 10 箇所以上にみられ、田染山中がいかに険しい道であるかが窺える。

霊場 183 か所は田染からは、国の名勝天念寺耶馬及び無動寺耶馬の山中の小両子岩屋（119 番）、龍門岩屋（120 番）、更に中山仙境（夷谷）を経て横城山東光寺（183 番）へと続く。

「豊前豊後百八十三ヶ所霊場記」等に記された、仁聞菩薩ゆかりの霊場は厳しい奇峰・秀峰・岩窟の中にあるが各所は我々にすばらしい景観を与えてくれている。その中でも最も厳しい霊場が続く田染の峰峯は田園と重なり美しい景観である。

第６節　田染地域の地形

千田　　昇

田染地域は、北部は前期更新世の両子火山群の火砕堆積物、南部はより古い後期中新世の古期宇佐火山岩類の溶岩と安山岩－デイサイト凝灰角礫岩、火山礫凝灰岩及び凝灰岩からなる山地が広がり、その中心部を桂川が南南東から北北西方向に流れ、田染盆地を作る（産業技術総合研究所、2009）。

田染盆地は、上流は田染耶馬の峡谷部から北西方向に長軸をもち岩脇から清滝にいたる狭窄部までの、長さ4.5km、幅1.5km程度の細長い盆地で、勾配は100分の0.7の平坦な地形が広がる。地形的には氾濫原（自然堤防帯）にあたり、河川の曲流の跡が特徴的である。

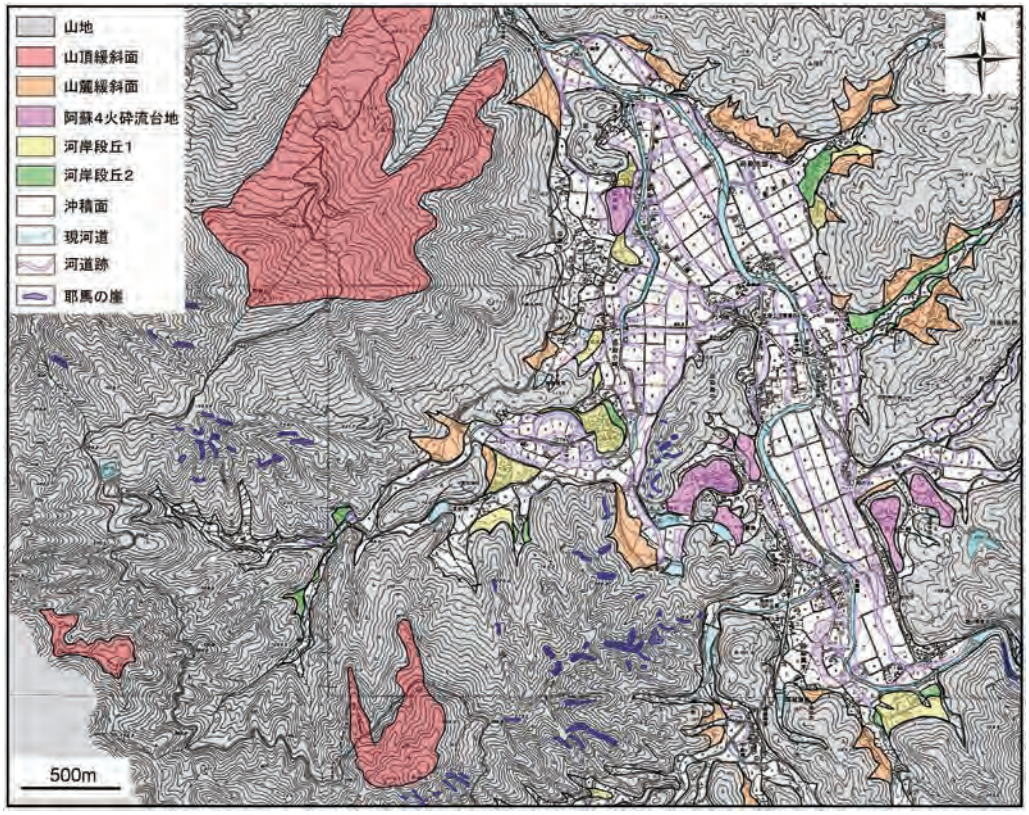


図１　田染盆地の地形（千田，2010）

支流の小崎川中流部は田染小崎で、ここには14世紀前半～15世紀の中世荘園集落の形態が現在に継承されていて、国の重要文化的景観に選定されている。

１　耶馬の地形

田染小崎の北西方には古期宇佐火山岩類の溶岩からなる西叡山が北東方への緩斜面を残しているが、西部と南部の大部分は古期宇佐火山岩類の凝灰角礫岩や凝灰岩などからなり、小崎付近の夕日岩屋や朝日岩屋などがある間戸岩屋は耶馬渓式風景を示している。田染の南部にある田原山（鋸山）の山地は特徴的な崖を見せる岩峰が並び、桂川沿いに典型的な耶馬渓式風景である鍋山（三ノ宮の景）の風景を作り、「田染耶馬」とよばれている。熊野磨崖仏もこのような岩峰の崖地形に刻まれたものである。

写真１　間戸岩屋（2018年11月17日）

2　低地の地形

田染盆地は、桂川とその支流が古期宇佐火山岩類とその上位に重なる両子火山凝灰角礫岩などを浸食して形成した盆地である。その過程のなかで、9 万年前には阿蘇カルデラ形成に伴う阿蘇 4 火砕流が流入して盆地を埋め、高度 100 ～ 150m に火砕流台地を作った。それ以後、桂川水系が下方浸食して河岸段丘や沖積面を形成した。田染小崎の台薗集落は河岸段丘上に位置し、洪水などから守られている。田染地域の低地の大部分は沖積層の堆積による平野で、平野を形成した旧流路の河道跡が明瞭である。しかし盆地内では水田の圃場整備により河道跡は不明確になっているが、田染小崎では小崎川の流路変遷によって作られた複雑な蛇行跡が比高数 10cm ～ 1m 前後の小さな崖を伴う棚田として残されていて、貴重な農村景観となっている。

写真２　三ノ宮の景（2018 年 11 月 17 日）

3　田染地域の地形の役割

田染地域は、古期宇佐火山岩類が作る岩峰や崖からなる耶馬渓式風景と特徴的な沖積平野で構成される。小崎地区を流れる小崎川は 100 分の 2.7 の勾配で緩やかに流れ扇状地を作り、これが棚田をなす小崎地区の地形的特徴である。扇状地を形成する径 30 ～ 50cm の礫を取り除き、それらを畦として積み上げ水田化する作業が、中世の荘園形成における最初の作業だったと思われる。扇状地上の河道変遷が水田の微妙な高低差や分布形態を作り、その結果として地形を利用し、地形に逆らわない棚田が作られ、用水の流れとして田越し・田通しの灌漑システムを作り上げたものである。このような微地形利用の水田分布形態が現在も受け継がれていて、日本原初の農村景観はこれからも永く保存される必要があろう。

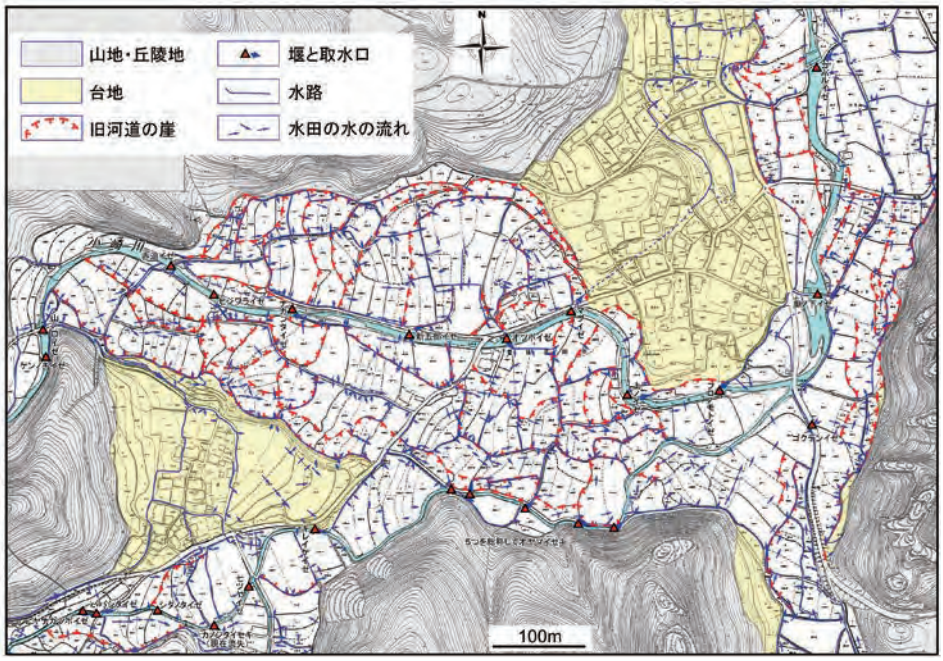


図２　田染荘小崎地区の流路跡（千田，2010）

文献

千田　昇（2010）：田染荘の文化的景観の背景となる地形・地質．豊後高田市「田染荘小崎文化的景観保存計画」、Ⅰ -59 ～ 64.

産業技術総合研究所（2009）：20 万分の 1 地質図「中津」.

第７節　井上円了の名勝観と田染・鍋山

三浦　節夫

１　『日本周遊奇談』

井上円了（1858 ～ 1919）は、明治・大正時代に活躍したいわゆる「明治青年の第２世代」で、日本の近代化に貢献した代表的人物の一人である。円了の業績は、著作と事業として残されているが、事業として、第１に現在の東洋大学と、第２に東京都中野区の哲学堂公園を創立している。この事業を支えたのが、全国各地で行った講演と募金である。延べ 27 年間に及ぶこの活動は、全国巡講と呼ばれているが、その講演日は約 3600 日に及び、巡講地は 47 都道府県にわたっている。1995（平成７）年の市町村数（3234）にあてはめると、講演したのは 1194 市町村であり、全国比で 53%に達している。

この全国巡講についてはほとんど知られていない。円了はこの全国巡講の日々を「館主巡回日記」『南船北馬集』と題して、日誌の形で記録している。現在、この記録は『井上円了選集』第 12 巻～第 15 巻（２）にまとめられている。

その他は、巡講を基にし、1911（明治 44）年７月に出版された『日本周遊奇談』について、円了は「地方の実況につき親しく見聞せる興味ある事項のみを、記憶せるままに口述し」たと述べている。この時点では約 2100 日の巡講を行っている。同書では、事項を第１類～第 25 類にまとめながら、378 話を記している。その中に「第５類　名勝旧跡」がある。これをみると、円了の名勝観の基本を知ることができる。円了は全国な名勝を紹介したあとで、「いまだ他県に知られておらぬ」場所を、勝るとも劣らぬ名勝として位置付けている。このように円了の名勝観は、全国各地の景勝を実際に観て感じたことを比較検討している点に特徴がある。既成の評価を基にしながらも、未知の景勝に対して円了独自の評価がなされているのである。

たとえば、「第５類　名勝旧跡」の冒頭で、耶馬渓と寒霞渓が取り上げられ、そこで感じたことを漢詩で詠んだあとで、つぎに「豊後の鍋山、会津の東山、飛騨中山の一部など」が耶馬渓に類似していると述べている。この３か所などは全国的に知られていないが、円了が名勝として推薦したい景勝であった。

２　大分県巡講と田染・鍋山

円了の大分県巡講は３回に及んでいる。第１回は 1892（明治 25）年２月、第２回は 1907（明治 40）年５月～６月（45 日間）、第３回は 1908（明治 41）年２月～３月（20 日間）と、合わせて 71 日となっている。この３回の講演地は当時の 64 町村であるが、1995（平成７）の市町村数にあてはめると、33 市町村となり、総数に占める巡講率は 58%である（2013（平成 25）年の時点では、16 市町村に及び、巡講率は 89%となっている）。

３回にわたる大分県巡講の 71 日間の日誌はすべて記録されているが、この間に 67 の漢詩が作られている。そのうち、景観を詳しく読んだのは２か所である。現在の中津市の耶馬渓と豊後高田市の田染･鍋山である。始めに、耶馬渓についての日誌を始めに紹介しておこう。

円了が耶馬渓を訪れたのは２回である。第１回は明治 25 年２月１日で、現在の下関市で講演した後に、「当夜、丘氏とともに乗船して豊前〔後〕国中津町に向かう。同二日　晴れ。午前四時宇之島に着し、城戸崎増太郎氏の宅に休息し、当日、耶馬渓に遊び羅漢寺に登る。午後、中津町に帰り、宝蓮寺に宿す。当時住職は村上喚道氏なり。」（〔　〕は筆者の註、以下同じ）。そして２月３日に２回の講演を行い、４日朝に出発している。

第２回は明治 41 年３月１日に、当時の宇佐郡から下毛郡三保村、現在の中津市に移動している。２日から４日までの日誌はつぎのとおりである。

二日　晴れ。午前十一時、新田氏〔哲学館の出身者〕とともに車を連ねて三保を発し、田畦をわたりて耶馬溪に出ず。駅道改修のために車を通ぜざる所十余町に及び、渓流に沿って徐徒し、仰ぎて崖頭を望め

ば、羽化登仙の趣あり。今より十七年前、初めてこの勝を探りしが、今日再遊するに、風光依然として旧のごとし。ただ、山林濫伐のためにいくぶんの風致を減じたるのみ。よってこれを詩中に入るる。

一別已経二十秋、再来復与此山遊、水眉石目皆依旧、只恨美人多禿頭、

（ひとたびこの景勝をたずねて以来、すでに二十年の歳月を経た。いま再びこの地に来たり遊ぶ。水の流れ石のすがたはすべてもとのままなのだが、残念なことに美しい景観も山林が伐採されてはげ山と化しているのだ。）

耶馬溪は禿頭に化し、余は白頭に化す、あに今昔の感なきを得んや。午後二時、城井村字平田に着す。宿所は富豪平田義胤の宅なり。美にして景また美、庭前まさしく耶馬の奇勝と相対す。会場は西浄寺にして、新田氏これに住す。聴衆、堂にあふる。渓雲晩に雨を醸し、奇勝を濛々の中に見るも、かえって一興を添う。〔後略〕

三日　雨。午前十一時、平田を辞し、渓行数里、三郷村に入る。雨はなはだしく至る。この間一帯奇石怪巌、袂を連ね列を成し、いちいち応接にいとまあらず。詩をもってその一斑を叙す。

渓上風光総不凡、水心山腹鏤奇嵒、人言造化無偏愛、何向豊陽開秘函、

（谷ぞいの風景はすべてにすぐれ、水流の中、山腹にも目を奪う岩がきざみこまれるようにならび立つ。人はいう、造化の紙は万物を造り育てる上で平等であると。しかし、それならば一体どうしてこの豊前〔後〕の地にのみ秘密の函を開いて、その美しさをみせているのであろうか。）

勿謂瑞山景最宜、日東別有馬渓奇、其名海内児猶語、遺憾泰西人未知、

（いうなかれ、スイスの山の景色が最もよいなどと。日本には格別に耶馬渓の奇観があるのだ。その名勝であることは国内の児童さえ熟知しているのだが、残念ながら西洋諸国の人々はまだ知らないのである。）

この日誌で書かれた円了の観想は、耶馬渓が「羽化登仙の境」、つまり「天にも昇る心地になる」という言葉に象徴されていて、感嘆の極に達していることであろう。

つぎに現在の豊後高田市の巡講日誌を見ることにしよう。当地を巡講したのは、明治40年6月11日～17日、20日と8日間滞在している。当時の岬村、臼野村、玉津村、高田町、田染村、封戸村を訪れている。本稿の対象とする田染村には2日間滞在し、その間の5つの漢詩を詠んでいる。大分県の巡講地別にみて、田染村に関する漢詩がもっとも多いことがわかる。すでに第2章で巡講日誌は紹介されているので、特徴点をまとめてみよう。

第1に、高田町から田染村に至る道中に、「ときどきは車をとどめた」ことである。景観を確認するように、わざわざ車を止めたのであろうが、こうした行為は、全国巡講の日誌に中にほとんどないことである。

第2に、17日の日誌の冒頭に、「当村には八景あり。その中にて奇なるは鍋山の勝なり。晨起してここに吟笻をひく。昨日以来の経過を詩中に入るる」とあり、鍋山の勝は特にめずらしいと書き、わざわざ早起きして考えながら作詩していることである。漢詩の田染村には「幽趣」、つまり奥深い趣があるという円了の観想で特徴的である。

第3に、漢詩で鍋山の勝を「自然のたくみの絶妙であることは比べるものとてなく」と詠んでいるが、円了は第1回の大分県巡講で耶馬渓を観た経験から、地元で小耶馬渓と呼んでいることに賛同していない。「決して耶馬渓の付庸にあらず」、耶馬渓との関連で考えるようなものではなく、独立した景勝とすべきであると強調している。このことはまた、すでに円了が瀞八丁と寒霞渓も経験していた上での評価であることも忘れてはならない。

第4に、鍋山を南屏峡と命名していることである。全国各地を巡講した円了は、各地で見た山水に命名しているが、その数は多くはなく、鍋山の雅称をつけたこと自体がめずらしいことである。

このようにみると、円了は田染・鍋山を知られざる名勝として位置付けていた理由が明らかであろう。

第８節　地域の文化財としての田染荘

豊後高田市教育委員会

１、「田染荘」の保存におけるこれまでの取組

豊後高田市の南部に位置する田染地区は、古くから文化財の宝庫として知られる。国宝・富貴寺大堂にはじまり、真木大堂の諸仏、熊野磨崖仏に代表される磨崖仏などが密集しており、これらは明治時代からの観光地としてはもとより、豊後高田市民の地域の誇りとして深く認知されているものである。

一方で、田染地区を含む国東半島に点在する岩峰・山の自然は、国東半島県立自然公園で広く保護されている。古くは県の景勝地という制度の中で「天念寺」「並石」とともに「鍋山」が指定されていたが、県の文化財に名勝が拡充された際に指定解除されたものと思われる。

昭和 50 年代、風土記の丘歴史民俗資料館が開館すると、荘園村落遺跡としての「田染荘」についての検討が開始される。この調査によって圃場整備により消滅の危機に瀕していた荘園村落遺跡「田染荘」の価値が世に知らしめられ、その保存の機運が高まったのである。

ただ、その保存は一筋縄ではいかず、平成初頭には史跡指定にかかる取組を推進することになる。かねてより価値を認められていた仏教遺跡群や城館跡に、田染小崎・大曲の水田を含む保存が提起されたが、水田の形状を維持するという条件で折り合いがつかず、「田染荘・村落遺跡」としては史跡指定をせずに、田染小崎地区を中心に農水省の田園空間博物館整備事業による整備を実施することによって水田の形状を残すこととなった。その後も田染小崎地区は良好な景観を保存し続ける事に成功し、平成 22 年には国の重要文化的景観に選定されるまでに至ったのである。

一方で、田染小崎の地区外での文化財における面的な保護については、史跡・富貴寺境内（平成 25 年度）にとどまっている。

田染荘小崎の農村景観（重要文化的景観）

鍋山（文化財未指定）

２．田染荘全体の保存の必要性と名勝調査

田染荘全体の保存について、今後どのようにするべきかという議論は様々な検討会等でなされている。

過疎化も進む当該地域においては、耕作放棄地・荒地の増加・山林の管理者不足等の問題は常に生じており、豊後高田市ではそれに対抗するべく、移住政策等を強力に推し進めてきた。ロングトレイルやファームステイのような、地域全体の魅力を押し出した観光事業化も進められているところである。

しかし、これらの取組の推進は、地域が元々持っている文化財・景観的価値を、確かに継承しなが

ら実施する必要がある。田染荘の荘域全体での面的な保護が熟されていない現状では、田染荘の優れた景観・文化財を消耗させる危険があると考えられる。

そのような中、平成 26~27 年度に実施された「名勝に関する特定の調査研究事業（大分県の名勝に関する特定の調査研究事業）」は、国東半島・六郷山寺院における岩峰の名勝地を主なテーマとし、市内においては天念寺・無動寺・応暦寺・夷石屋の 4 ヶ所が詳細調査の対象とされた。その後、天念寺耶馬及び無動寺耶馬［平成 29 年度］、中山仙境（夷谷）［平成 30 年度］として、2 件が実際に名勝指定された。この時、田染地区においては、岩峰の景観が存在することが認知されていた一方で、六郷山寺院の要素が顕著ではないという理由から、詳細調査対象地から外れていた。

しかし、田染地域は多くの岩峰などの名勝地が点在し、荘園・磨崖仏などを中心に構成される景観が良好に残されているという特性があることから、それらの保護を推進する必要があると考え、名勝調査を実施したところである。

国東半島峯道ロングトレイルの様子

ウトノアナと熊野地区の景観

３．今後の展望

今回の名勝調査では、田染地区の中でも山間部（岩峰・山岳）を中心に検討を実施し、それらを田染地域の景観のコアとして位置付けることができると思われる。これまで文化財行政による保護が及んでいない範囲であり、今後は指定等の名勝を目指し、修景・復元・管理といった、保護の措置を講じたい。

また、名勝地として積み上げられてきた価値付けを、地域住民や観光客が深く理解できるように、パンフレット等を作成することで普及啓発に努める。特に今回の調査対象地においては、すでに指定等がなされている有形文化財が分布しており、周辺の景観とうまく組み合わせることによって、より付加価値を付けたＰＲを実施できると考えている。

市内では、すでに名勝指定がなされた「天念寺耶馬及び無動寺耶馬」、「中山仙境（夷谷）」や、史跡「熊野磨崖仏 附 元宮磨崖仏及び鍋山磨崖仏」、「富貴寺境内」、重要文化的景観「田染荘小崎の農村景観」との価値の共有を行い、相互に連携を行いながら普及啓発・情報発信を行い、国東半島の名勝地・田染荘の荘域全体の保護に少しでも寄与できるような取組を推進していきたい。

第５章　総括

（１）悉皆調査の成果

悉皆調査では、田染地区の景観資料として有効な村絵図をベースに、現地の風致景観が継承されているだろう 139 箇所の、基礎的なデータをまとめた。

大分県立風土記の丘歴史民俗資料館主導で行われた豊後国田染荘の調査では、水田や寺院（仏教美術）を中心に調査がなされているため、岩山の実地調査・ドローン調査、景観を対象にした視点場の捜索等を実施したことは、田染エリア全体を捉える上で新たな視点を加えたことになる。GPS による位置情報のデータを取得したことにより、多くの人の利活用も容易になった。

田染八景（大堂晩鐘、熊野櫻花、桑川蛍火、池部群鷺、間戸山月、本宮晴嵐、鍋山啼猿、叡峯曙雪）については、そのすべてを特定することができた。また、杵築藩のお抱えの絵師であった十市石谷が定めた画題であることが分かり、実際に石谷が描いた鍋山の写真を見つけることができた。

また、ドローンを活用することにより、近づくことができなかった「ウトノアナ」の中を探査することができた。石仏と石祠が安置されており、少なくとも江戸時代には、信仰の場として人が訪れていたことが分かった。

（２）特定調査の成果

悉皆調査の成果で得られた六郷山寺院の名勝的特徴から、岩峰等の名勝地として一体のものと認識できる場所から、ランドマークや信仰の対象としてよく認知されており、人文的評価の対象となった場所を 6 箇所（鍋山、喜久山、朝日岩屋及び夕日岩屋、穴井戸観音、ウトノアナ及びゼゼノサマ、西叡山）特定し、①村絵図からの分析、②聞き取り及び現地踏査、③文献調査、④ベースマップとの同定を主な内容として実施した。

前回実施の大分県の名勝に関する特定の調査研究事業（平成 26~27 年度）においては、田染地区は人文的評価に乏しいという評価を受けていたが、貝原益軒らによる耶馬溪との比較による視点、井上円了らによる独立する景勝地として捉える視点が見つけられた。また、耶馬溪羅漢寺の開基・円龕昭覚禅師が田染郷の生まれで、古羅漢には国東塔や磨崖仏があること等の要素もあわさって、歴史的に見れば田染地域や国東半島の岩峰景観が、耶馬溪を中心とする大分県北部の景勝地と密接に関係しながら、長い年月をかけて、その価値を高めていったことが分かった。

調査事業の名称においては、田染耶馬という言葉を使用したが、上記のような検討がなされる中で、「田染耶馬という言葉は比較的新しく、また、耶馬溪の標榜にすぎない」という意見から見直しが行われ、報告書の名称としては『国東半島「田染」名勝調査報告書』と改め、広く名勝地の特定の調査を行った。

（３）田染地区の名勝地としての現状

今回の調査において、特定調査を行った岩山等の景観・構成要素は概ね良好に保存されていた。夕日岩屋や穴井戸観音などについては、現地を訪ねた際に、管理者が清掃をしている場面に遭遇したこともあった。しかし、生活様式の変化や、地域コミュニティの縮小に伴って、地域で管理できる範囲・内容も縮小しているように思われる。今は管理を行う住民がいるが、名勝地を次世代へと繋ぐためには、人材確保なども継続実施する必要がある。

また、国東半島全体で共通する問題ではあるが、昭和 50 年代のマツクイムシの被害によって、山上の植生が変化している部分があり、村絵図に見える山の風景が現在に伝承していない部分がある。竹藪によって岩が良く見えない箇所もあり、山林の管理は大きな課題の一つである。

田染地区については、国東半島の中でも農村地区として著名である。田染荘小崎で行われる農業を通した交流事業、グリーンツーリズムによる農泊の推進なども行われ、世界農業遺産のコアサイトとしても注目されている。それらの様々な要素から、国内外からの観光誘客も積極的に行われる計画があるが、これらを受け入れる際に現地の景観保全の問題が必ず出てくると思われる。安易な開発をせず、古くから受け継がれた景観を活用するために、本調査で特定された名勝地としての価値を意識した調整が必要となってくる。

（４）今後の取組

本調査によって、田染地区における名勝地としての特徴を明らかにすることができた。田染地区は、荘園村落遺跡としての歴史的素地を持ち、岩峰や信仰物に囲まれた風景が特徴的である。今後は、特定調査を実施した箇所を中心に、更に詳細な範囲確認や構成要素の検討を行い、指定・登録等の制度を活用しながら、保護体制を整える必要がある。

豊後高田市としては、①六郷山寺院の名勝（天念寺耶馬及び無動寺耶馬、中山仙境（夷谷）、文殊耶馬）との連携、②田染荘全体の保全（重要文化的景観「田染荘小崎の農村景観」だけではなく、田染エリア全体を対象とした保全）を念頭に置きながら計画を実施したいと考えている。

また、情報発信・普及啓発にも力を入れて実施していきたい。名勝地としての価値をブラッシュアップすることは、観光地としてのPRや、地域アイデンティティの醸成にも効果があることと思われるので、田染荘ホームページ（https://tashibunoshou.com）を使った継続的な情報発信や、学校・一般対象の講座等も随時実施していく。

【参考文献】

井上円了著 , 東洋大学創立１００周年記念論文集編纂委員会編『井上円了選集 12』(1997 年)
井上円了著 , 東洋大学井上円了記念学術センター編『井上円了選集 24』(2004 年)
大分県西国東郡田染村役場編『田染村志』(1932 年)
大分県立風土記の丘歴史民俗資料館編『豊後国田染荘の調査』(1986 年)
西国東郡編『西国東郡誌』(1923 年)
文化庁文化財部記念物課『名勝に関する特定の調査研究事業報告書 (大分県の名勝に関する特定の調査研究事業)』(2016 年)
豊後高田市編『豊後高田市史』(1998 年)

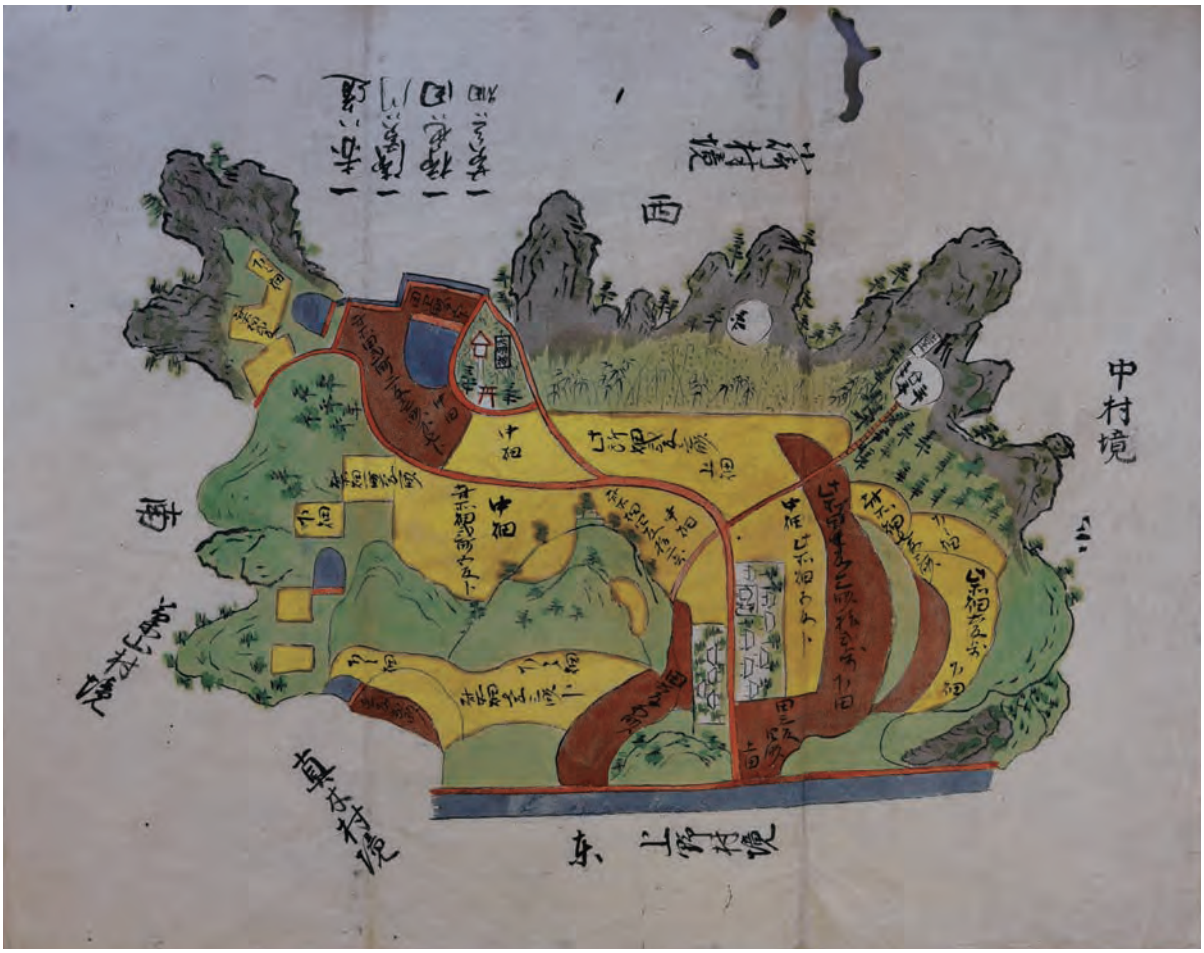
巻末資料

・島原藩領田染組村絵図写真
・地理情報計測 Point 一覧
・悉皆調査　調査カード
・史料集

島原藩領田染組村絵図

小崎村

間戸村


中村境
西
東

91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
中村境
西
東

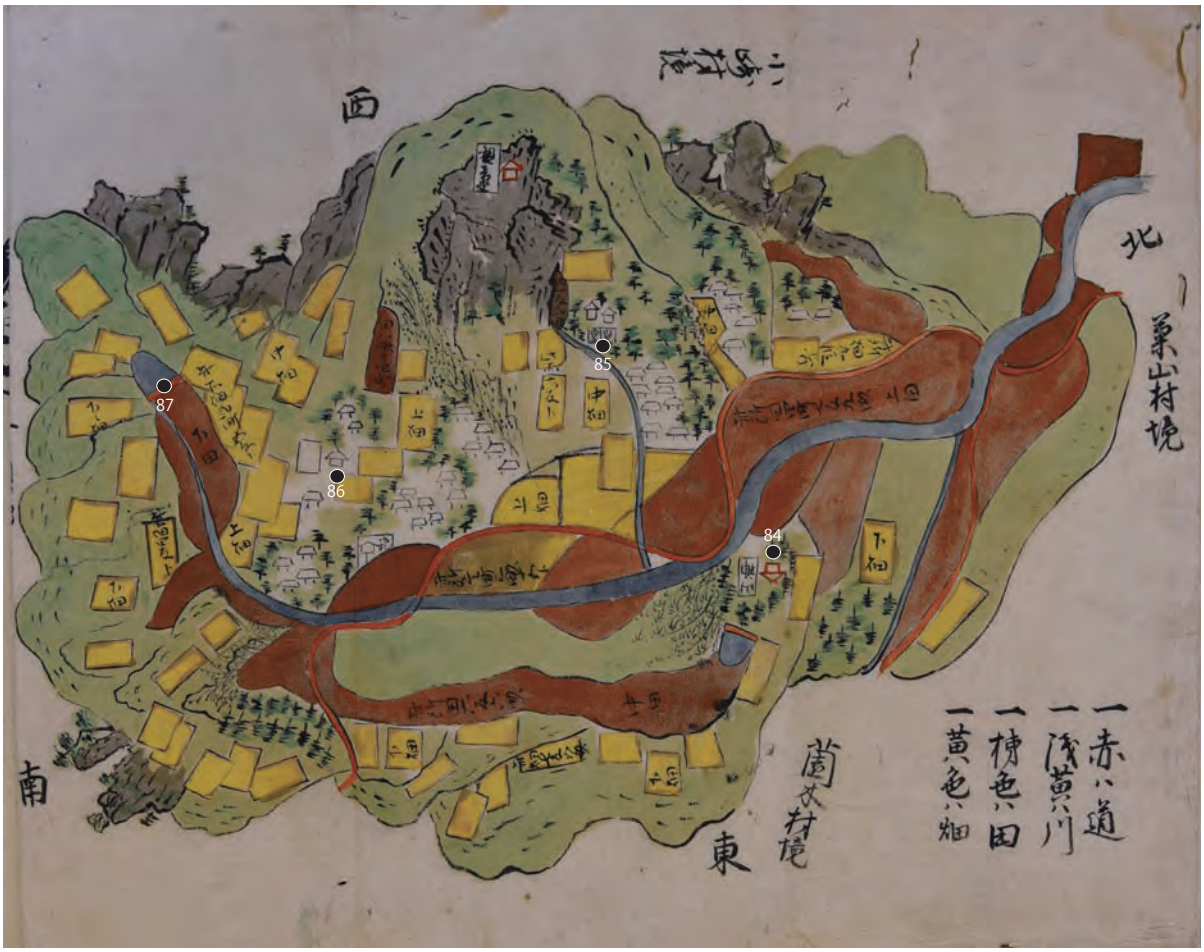
真木村

西
東
北
南
一赤ハ道
一黄色ハ畑

西
東
北
南
一赤ハ道
一黄色ハ畑
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54

陽平村

西
北
巣山村境
南
東
蘭丈村境
一赤ハ道
一淺黄ハ川
一棕色ハ田
一黄色ハ畑


西
北
巣山村境
南
東
蘭丈村境
一赤ハ道
一淺黄ハ川
一棕色ハ田
一黄色ハ畑
84
85
86
87

熊野村

田野口村

西
東
菊山村境
一赤ハ道
一緑黄ハ川
一桃色ハ田
一黄ハ畑

西
東
菊山村境
一赤ハ道
一緑黄ハ川
一桃色ハ田
一黄ハ畑
70
71
72
73
75
76

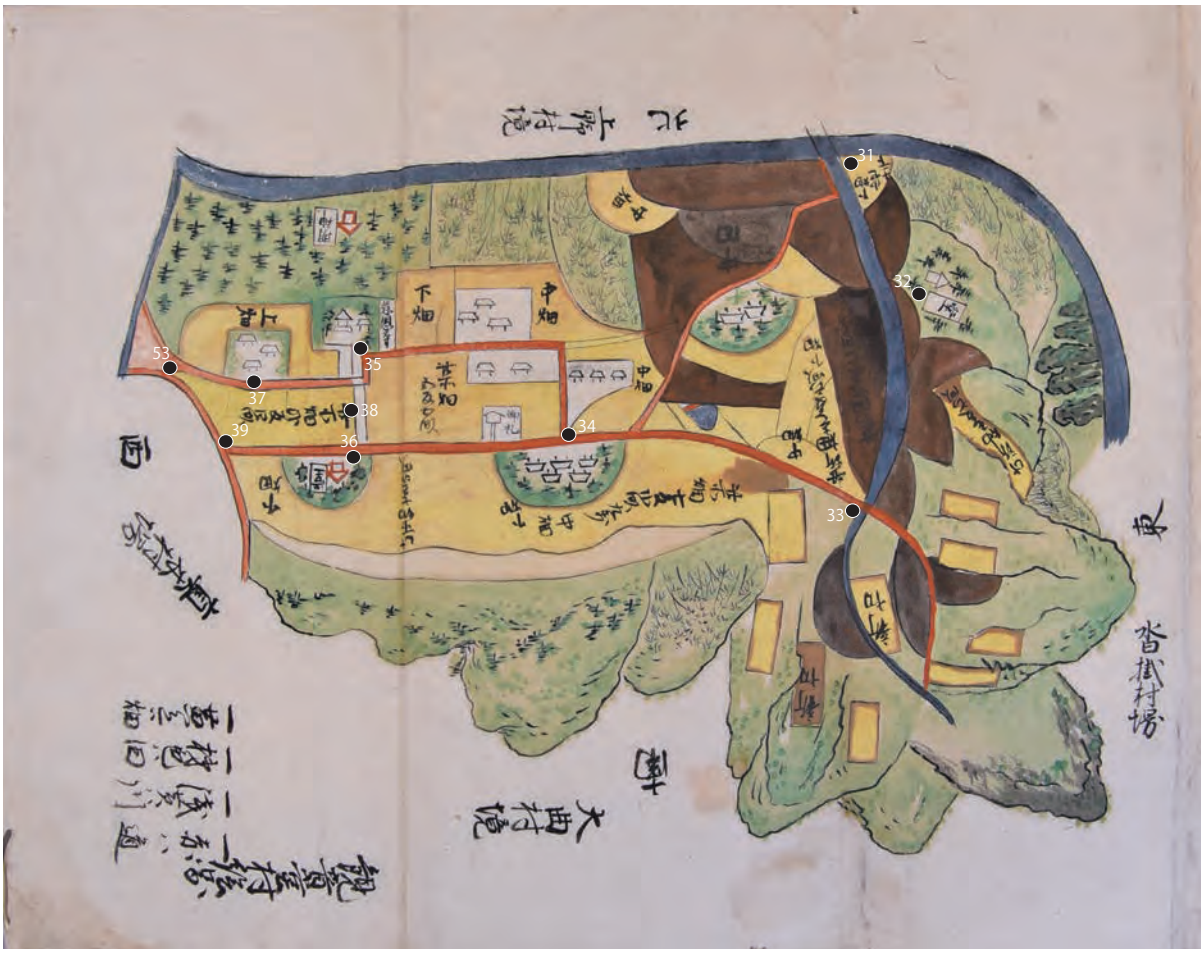
大曲村

上野村

東
南
西
中村境
観音堂村堺

東
南
西
中村境
観音堂村堺
16
17
18
19
20
21
23
24
25
26
27
28
29
30

観音堂村



中村

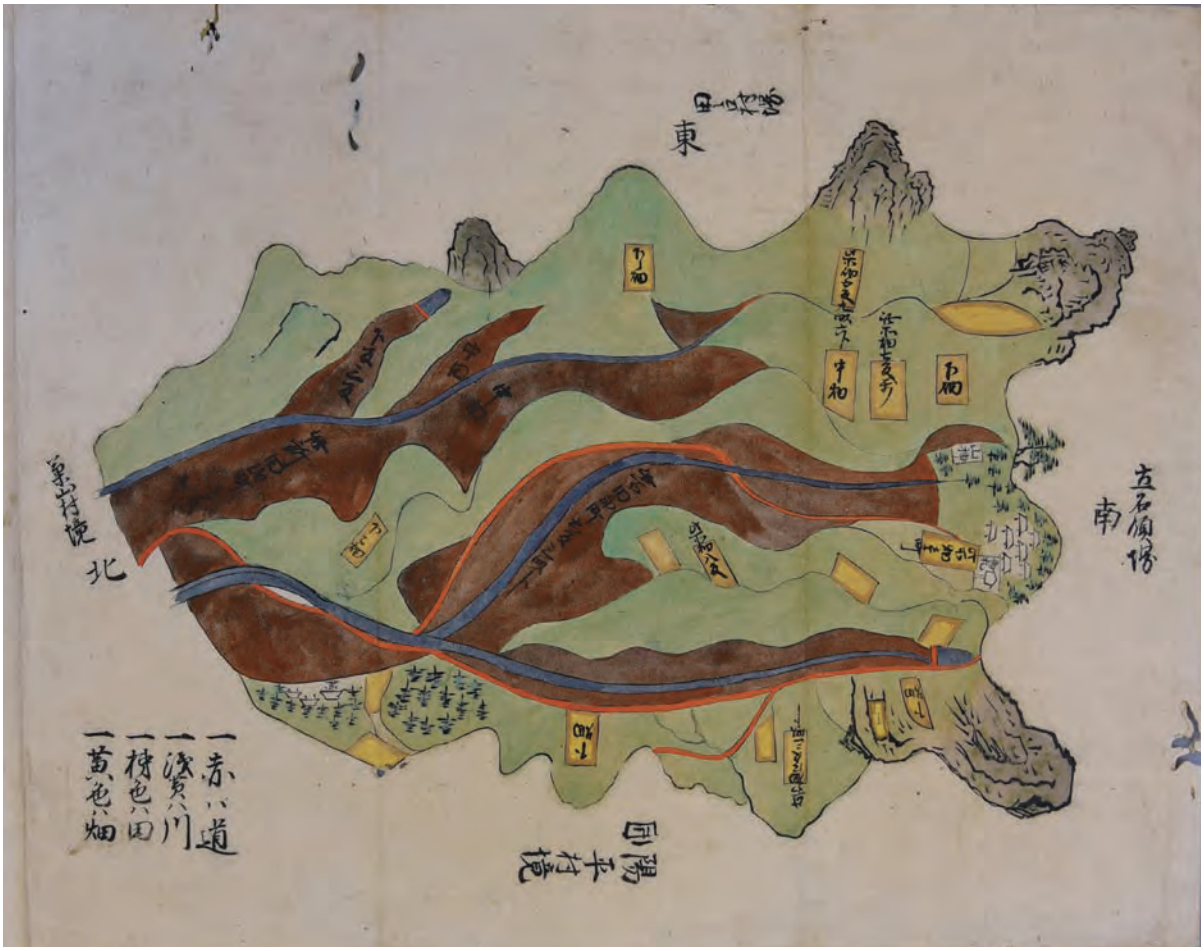
池部村

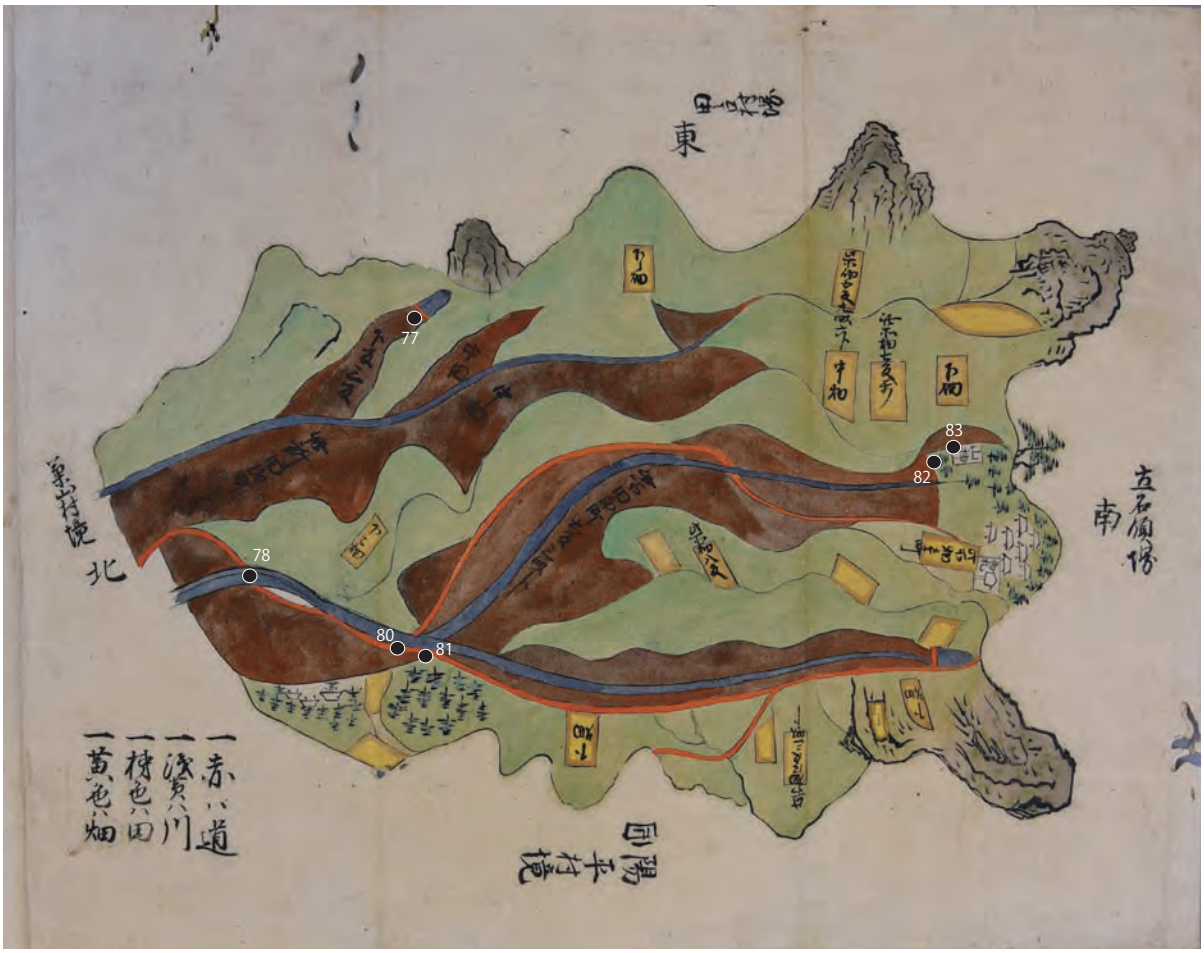
東
西
南
宮
天神
地神
山神
一赤八道
一渋貫八川
一柿色八田
一黄六畑

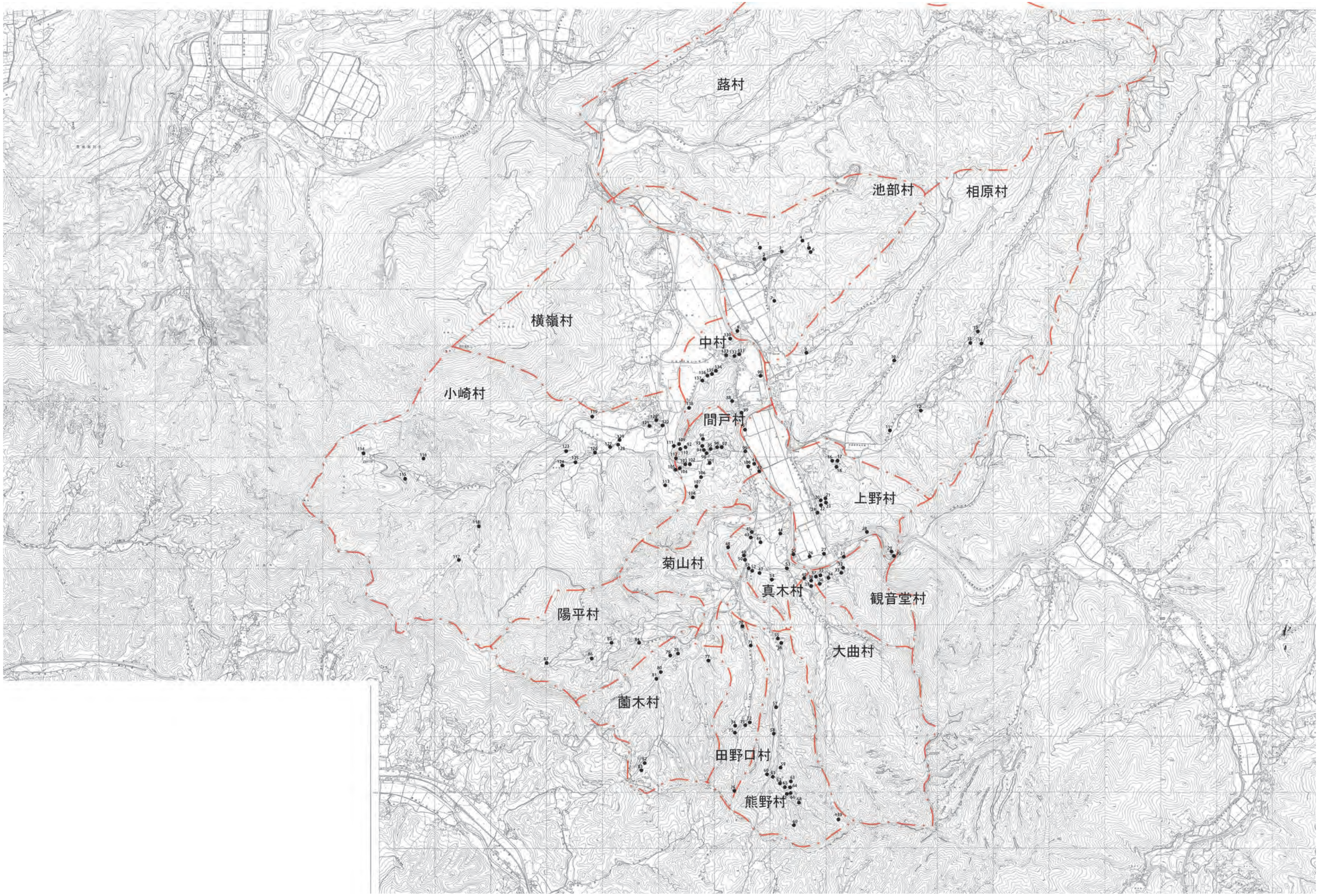
東
西
南
宮
天神
地神
山神
一赤八道
一渋貫八川
一柿色八田
一黄六畑
1
2
3
4
5
6
7
8

相原村

薗木村


東
北
南
一赤ハ道
一濃黄ハ川
一樹色ハ田
一黄色ハ畑


東
北
南
77
78
80
81
82
83
一赤ハ道
一濃黄ハ川
一樹色ハ田
一黄色ハ畑


蕗村
池部村
相原村
横嶺村
中村
小崎村
間戸村
上野村
菊山村
真木村
観音堂村
陽平村
大曲村
薗木村
田野口村
熊野村

田染荘地域における名勝調査　調査個所計測Point一覧

No.	名称	緯度	経度	地域名
1	呉竹林の天神様	33.524106	131.518792	池部
2	大平前の穴観音	33.523283	131.519317	
3	カジヤ林の山神	33.523711	131.520897	
4	カジヤ林の堰	33.524800	131.522903	
5	コガクラの河野家墓地	33.524144	131.523517	
6	長迫の池	33.523844	131.523667	
7	上の平の地神および水神	33.519389	131.520139	
8	年ノ神の歳神	33.517508	131.516556	
9	両田薬師堂	33.515622	131.522981	相原
10	中恩寺跡	33.514911	131.531572	
11	岩ノ下の岩	33.509331	131.531275	
12	北野天満社	33.511003	131.534311	
13	聖楽寺跡	33.516361	131.538908	
14	金比羅社(ムコウ宮)	33.516194	131.539994	
15	政所の観音堂	33.517236	131.539778	
16	金福寺	33.33.5068	131.525772	上野
17	金福寺周辺の池	33.506872	131.526036	
18	ツルイの溜池	33.506461	131.525997	
19	市場の八幡社	33.509322	131.517219	
20	立石の堤	33.503908	131.524378	
21	立石の池	33.503808	131.524783	
22	立石の丘陵	33.503553	131.524456	
23	立石の建物推定地	33.503636	131.524747	
24	西生寺	33.502536	131.524181	
25	西ノ尻の祠	33.499433	131.522000	
26	西ノ尻の五輪塔群	33.499131	131.523414	
27	園田の阿弥陀堂	33.499281	131.524775	
28	鍋山磨崖仏	33.501244	131.528869	
29	三宮八幡社	33.499453	131.531097	
30	鍋山の視点場	33.499125	131.531386	
31	観音堂村の渡河点	33.499069	131.526553	観音堂
32	周ヶ尾の岩屋堂	33.498289	131.526569	
33	間戸岩の道	33.497764	131.526325	
34	観音堂村の分岐点	33.497333	131.525089	
35	慈恩寺	33.497556	131.524183	
36	中尾の堂	33.496997	131.524311	
37	慈恩寺横の石造物群	33.497494	131.523928	
38	慈恩寺前の道	33.497075	131.523683	
39	真木村からの道	33.496811	131.523628	
40	字界の橋	33.497325	131.522989	
41	草場の釈迦堂の横道	33.506450	131.518339	真木
42	釈迦堂宝篋印塔	33.506058	131.518578	
43	熊野社	33.500672	131.517739	
44	桜馬場の道の分岐点	33.501050	131.520647	
45	真木大堂	33.501019	131.517711	
46	随願の閻魔堂跡	33.500108	131.518544	
47	城山の豊田家墓地	33.498364	131.518647	
48	随願寺	33.449886	131.515336	
49	金比羅社	33.499294	131.517025	
50	稲荷大明神	33.498753	131.517047	
51	鳥越池横の道	33.498100	131.517375	
52	鳥越池の堤	33.498081	131.517697	
53	前田の道の分岐点	33.498331	131.521133	
54	城山薬師堂四面仏	33.497589	131.519536	
55	観上軒の池の横の道	33.492456	131.520392	熊野
56	観上軒の溜池	33.492336	131.520433	
57	熊野川に架かる橋	33.487103	131.520169	
58	向ヶ平の隣村へ抜ける道	33.485322	131.519844	
59	橋本の溜池	33.482122	131.520211	
60	向ヶ平の対岸へ向かう道	33.481781	131.519325	
61	近道の鳥居前	33.481592	131.519817	
62	視点場からみたアカイワ	33.480931	131.520381	
63	橋本の祠	33.481117	131.521389	
64	橋本の後藤家墓地	33.480597	131.521383	

田染荘地域における名勝調査　調査個所計測Point一覧

No.	名称	緯度	経度	地域名
65	近道の橋	33.480417	131.521022	熊野
66	近道の分岐点	33.479858	131.521669	
67	近道のため池へ抜ける道	33.479786	131.521450	
68	胎蔵寺	33.479289	131.522142	
69	無畑の溜池	33.477436	131.521700	
139	熊野磨崖仏	33.478372	131.526011	
70	神田の溜池	33.493581	131.516842	田野口
71	神田の山神社	33.491900	131.517444	
72	田ノ口の池へ向う道	33.485411	131.517206	
73	田ノ口の堂	33.485819	131.517475	
74	高岩の天神様	33.485608	131.516106	
75	毘沙門堂	33.485044	131.516261	
76	竹ノ下の溜池	33.480339	131.515922	
77	土ノ尾の溜池	33.490958	131.513611	薗木
78	道広の分岐点と石橋	33.491419	131.510433	
79	上久保の渡河点と堰	33.491178	131.509969	
80	上久保の堂	33.490025	131.508908	
81	上久保の棚田跡と水路	33.489775	131.508797	
82	薗ノ木の石造物	33.482572	131.507136	
83	薗ノ木の山神	33.482014	131.507031	
84	猛嶋社	33.492211	131.506667	陽平
85	福寿寺	33.492211	131.504136	
86	シケヤマの地蔵堂	33.491061	131.502356	
87	池の上の堤	33.490719	131.498042	
88	大門の視点場	33.511881	131.516022	中村
89	大門坊磨崖仏	33.511211	131.516150	
90	安養寺	33.514011	131.518692	
131	元宮磨崖仏	33.515683	131.516594	
132	元宮八幡宮	33.515408	131.516103	
133	元宮八幡宮周辺の道	33.515458	131.515319	
134	早神社に抜ける道	33.514197	131.514633	
135	長野スイシの池	33.514008	131.514117	
136	長野の石造物群	33.513872	131.513614	
137	早神社	33.513392	131.512894	
138	長野観音寺跡	33.511069	131.511706	
91	穴井戸観音	33.508922	131.512789	間戸
92	朝日岩屋	33.507969	131.511303	
93	穴井戸観音と朝日観音へ向う道	33.508361	131.512733	
94	旭の視点場	33.507783	131.512992	
95	間戸の御札推定地	33.507625	131.513586	
96	間戸の南へ向う道	33.507778	131.514125	
97	桂川へ向う道	33.508036	131.514783	
98	間戸の分岐点	33.507486	131.513114	
99	桂川から見た間戸村	33.508050	131.516981	
100	草場の桂川に沿う道	33.506622	131.517508	
101	稲荷山の間戸寺跡	33.506850	131.513758	
102	二宮八幡宮前	33.506633	131.511936	
103	二宮八幡社	33.506567	131.511469	
104	二の宮下池	33.506214	131.510819	
105	二の宮下池横の道	33.506136	131.510556	
106	南西にある池への分岐点	33.505664	131.513006	
107	ヤケヤマ池へ向う道	33.504636	131.512483	
108	ヤケヤマ池	33.504047	131.512147	
109	夕日観音	33.508289	131.510608	
110	竹ノ下の視点場	33.507936	131.510800	
111	下ノ山の視点場	33.508133	131.510194	小崎
112	社らしき跡	33.507147	131.510497	
113	宝珠院跡	33.504742	131.509533	
114	空木峠池	33.507800	131.480386	
115	上空木の視点場	33.505528	131.484567	
116	奥愛宕社	33.507128	131.486225	
117	タノキの三嶋社	33.498989	131.489628	
118	タカイの道と川の交差地	33.501853	131.491608	
119	雨引社	33.510678	131.502589	

田染荘地域における名勝調査　調査個所計測Point一覧

No.	名称	緯度	経度	地域名
120	小崎村の御札	33.510139	131.508536	小崎
121	延寿寺	33.509792	131.509089	
122	尾崎屋敷跡	33.509764	131.509292	
123	愛宕社	33.507792	131.500108	
124	愛宕池堤	33.506583	131.499569	
125	愛宕社鳥居	33.507033	131.501072	
126	原の薬師堂	33.507808	131.502725	
127	小崎の視点場	33.508114	131.504033	
128	切池	33.508264	131.505000	
129	下の山の視点場	33.508678	131.505031	
130	元宮八幡社の北側の道	33.516556	131.516006	

池部１

田染荘地域における名勝調査(個別調査)

１住所	豊後高田市田染池部松ノ木（No.1,3）,大平（No.2）,影平（No.4,5,6）,上の平（No.7）

２特徴

No.1 呉竹林の天神様
旧・池部村の小字呉竹林に所在する天神様で、池部村より北にある天神山の中腹に鎮座している。
池部村の絵図では「天神」と表記されている。天神様のある少し下には石段がある。

No.2 大平前の穴観音
天神様へ向かう道にあり、現在穴観音の上には住宅が建設されている。
奥壁には観音様が二体安置されている。

No.3 カジヤ林の山神
旧・池部村小字カジヤ林に所在し、現在板碑のみが残る。絵図の山神とされるところは竹林があり、
高札が描かれているところには板碑が残る。

No.4 カジヤ林の堰
旧・池部村小字カジヤ林にある堰であり、絵図で示される堤の部分ではないかと考えられる。
現在は石積が残り、その間を川が流れている。

No.5 コガクラの河野家墓地
旧・池部村小字コガクラに位置する河野家の墓地である。現在では墓が残るが、その前にある道は
絵図に記載されている溜池に向かう道だと考えられる。

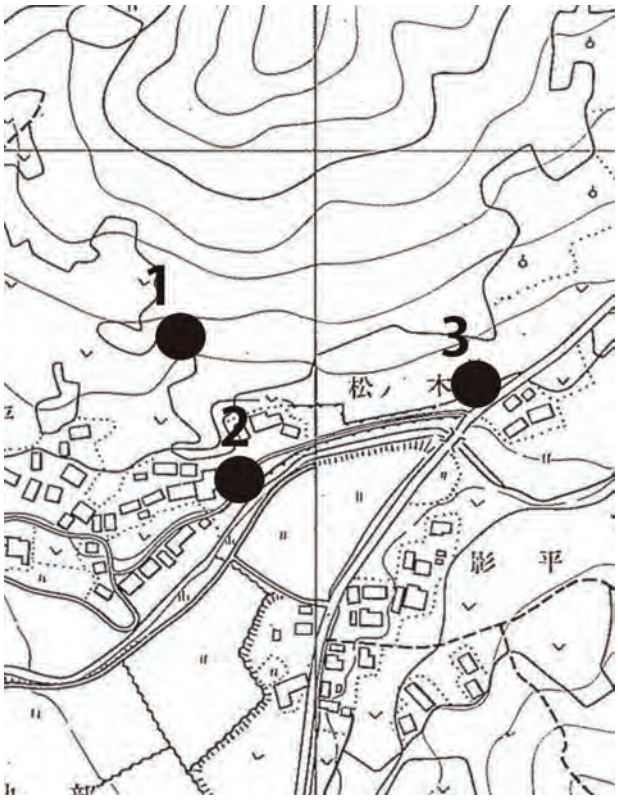
No.6　長迫の池
河野家墓地の横にある溜池の痕跡と思われるところで、現在では堤の痕跡らしきものが残るのみである。
絵図には、溜池が描かれている。

No.7 上の平の地神および水神
旧・池部村上の平に位置し、地元住民によると、絵図に残る地神というものは存在しないが、
現在水神様というものは残っていると聞き取りができた。
水神様の周囲にイノコのほかに人工と思われる穴があり、水神様の周囲には堀を巡らしているため
水神様が一種の独立した土地となっている。

３指定文化財

４周辺図

５詳細図



地図番号：（61）豊後高田 No.1	参考文献	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 『豊後國田染荘の調査　報告書第3集』1986

No.1 天神様　遠景

No.2　穴観音

No.3　山神と推定される林

No.3 補　御札推定値にある板碑

No.4　カジヤ林の堰

No.5　コガクラの河野家墓地

No.6　長迫の池

No.7　水神付近のイノコ

中村１

田染荘地域における名勝調査(個別調査)

１住所	豊後高田市田染池部年ノ神（No.8）,田染真中官田（No.130,No.131,No.132,No.133）

２特徴

No.8　歳神（としのかみ）
旧･池部村小字年ノ神に位置しており、鳥居の額や絵図には歳神と記載されている。歳神は塞神（さいのかみ）とも言い換えられ、塞ノ神自身が境の神とされるため村との境界線であることが絵図でも証明できる。

No.130　元宮八幡社の北側の道
旧・中村小字官田に位置する道で、元宮八幡宮を囲むように作られた道である。絵図にも記載はあるが絵図を完璧に反映したものにはなっていない。屋根持ち建物もなにか写真のものと関係あるのか不明である。

No.131　元宮磨崖仏
旧・中村小字官田に位置し、磨崖仏は現在木の堂の中にある。
いくつかの仏が磨崖仏に刻まれていることが確認できる。ほかの絵図でもとくに豪華な装飾をつけ立体的に描いている。磨崖仏のある岩とその前のお堂が確認できる。毘沙門天、持国天、不動、矜羯羅童子、磨崖仏は 15 世紀代の作と推定される。なお地蔵菩薩は後世の作と思われる。

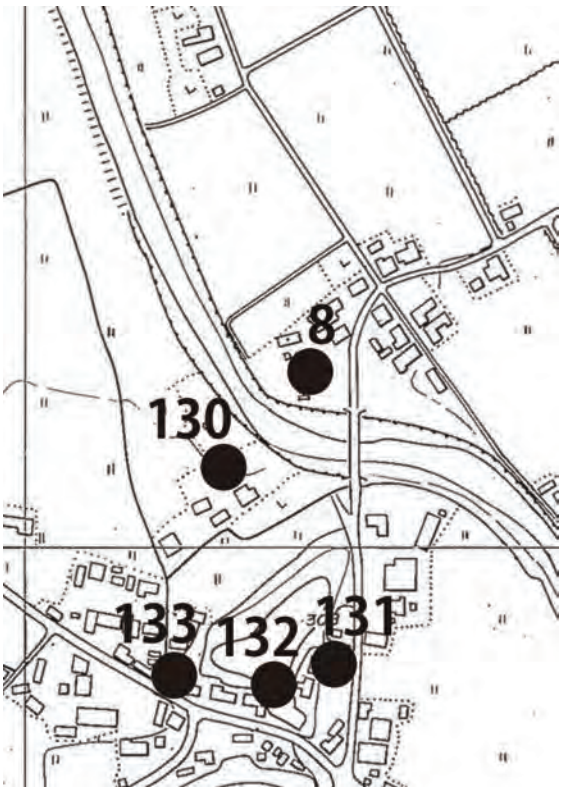
No.132　元宮八幡神社
旧・中村小字官田に位置し、周辺には鳥居や南側の入口などがある。境内には、金毘羅社がありそして本殿がある。絵図では立体的にこの本殿を描き鳥居や拝殿が描かれ色彩なども確認できる。

No.133　元宮八幡宮周辺の道
旧・中村小字官田に位置する道であり、元宮八幡宮を廻る道である。
道の痕跡と考えられる段や空間があるので絵図の道に相当すると考えられる。

３指定文化財	No.131 元宮磨崖仏【国史跡】

４周辺図

５詳細図



地図番号：（61）豊後高田 No.8	参考文献	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 『豊後國田染荘の調査　報告書第3集』1986

No.8　歳神　鳥居

No.8　歳神社殿

No.130　元宮八幡社北側の道

No.130　南側へ向かう道

No.131　元宮磨崖仏

No.132　元宮八幡神社　金毘羅社

No.132　元宮八幡神社鳥居

No.133 元宮八幡宮周辺の道

相原 1

田染荘地域における名勝調査(個別調査)

1 住所	豊後高田市田染相原堂の脇(No.9),天久保 (No.10) ,岩ノ下 (No.11) ,桃園 (No.12), 庵の上 (N0.13) ,宮の谷 (No.14),政所 (No.15)
2 特徴	

No.9　両田薬師堂　相原小字堂の脇に位置しており、両田薬師堂は第 47 番札所である。堂の境内には、仁王像があり、堂の中には地蔵が鎮座している。現在も使用されており絵図には、周囲の建物とは異なり正方形の建物で描かれている。

No.10　中恩寺　旧・相原村小字天久保にあり、堂には石段をのぼって向かう。石段横には立派な石垣が積まれている。周囲には、宝篋印塔や石幢、五輪塔 11 基が現存している。

No.11　岩ノ下の岩　相原村岩ノ下に位置する岩で、小字も岩ノ下とあることから昔から認知されていたと考えられる。
絵図においても描かれており、村に向かう前にひときわ目立つ存在であった。周囲には岩の手前に昔の道の痕跡がある。

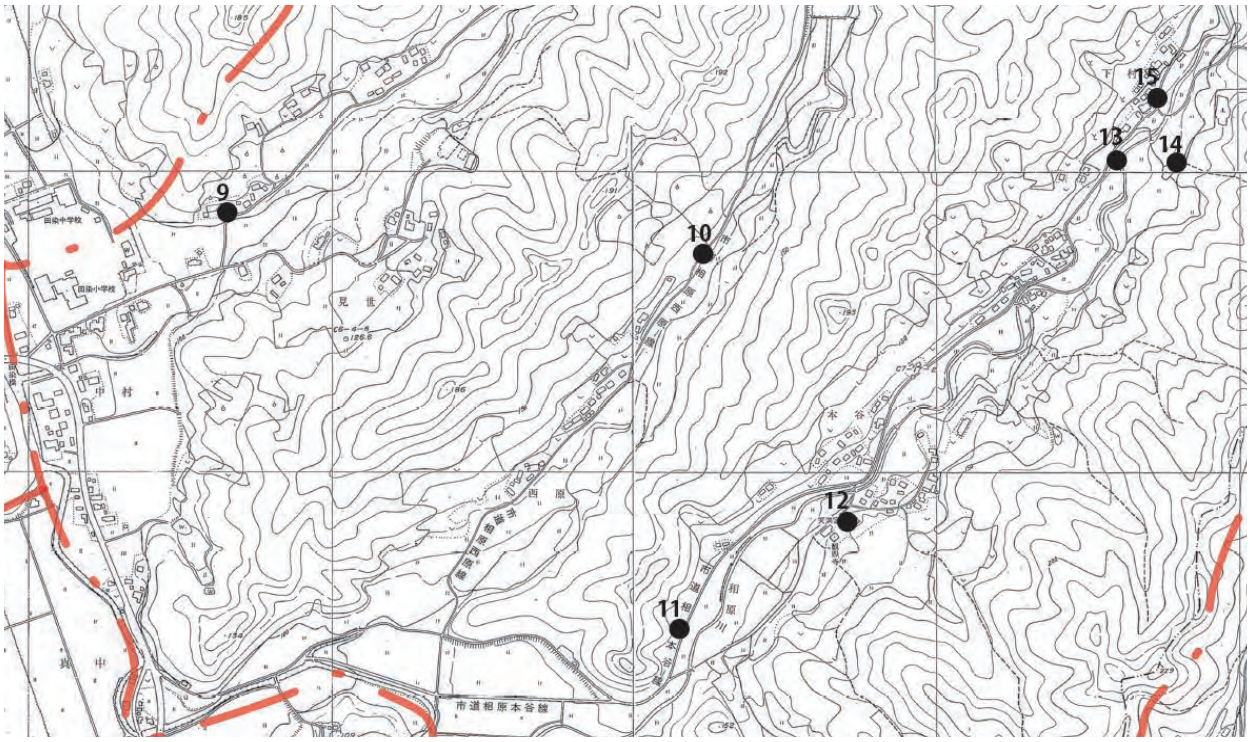
No.12　北野天満社　相原村桃園にあり、天満社に向かう石橋やさらにそれからのびる石段がある。境内には板碑や灯篭などがあり、本殿も現存している。灯篭は、側面に安政七申閏三月という銘文がある。

No.13　聖楽寺跡　相原村小字庵ノ上にある寺跡で境内には宝篋印塔、石幢、板碑 12 基、五輪塔 15 基、角柱塔婆 2 基の存在が確認されている。寺跡は道よりも高い位置にあり、石積が見える。

No.14　金比羅社（ムコウ宮）　旧・相原村小字宮ノ谷に位置している。絵図においては宮としての表記はあるが、名称は書かれていない。

No.15　政所の観音様　絵図では朱塗りの宮が描かれているが、現在では小屋が建てられている。

3 指定文化財	両田横穴群（市史跡）
4 詳細図	



地図番号：（78）豊後高田 No.9	参考文献	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 『豊後國田染荘の調査　報告書第3集』1986

No.9　薬師堂　遠景

No.10　中恩寺　遠景

No.10　中恩寺　石幢

No.11　岩ノ下の岩

No.12　北野天満社　境内

No.13　聖楽寺跡

No.14　ムコウ宮　遠景

No.15　観音堂　遠景

上野１

田染荘地域における名勝調査(個別調査)

１住所	豊後高田市田染上野ツルイ

２特徴

No.16　金福寺　豊後高田市田染上野小字ツルイに所在。絵図にも金福寺が描かれており、当時からこの地にあったことが分かる。

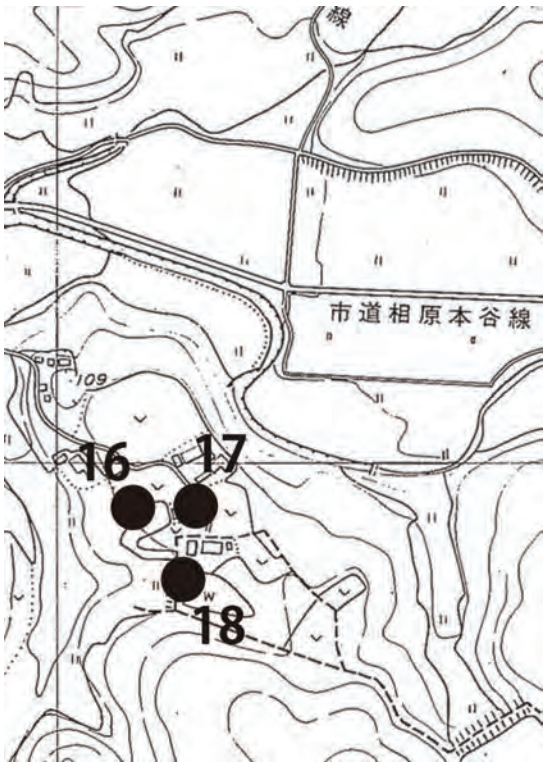
No.17　金福寺周辺の池　この池の堤が金福寺の参道になっている。絵図にも描かれている。

No.18　ツルイのため池　絵図にも描かれている。

３指定文化財

４周辺図

５詳細図



地図番号：（78）豊後高田 No.16	参考文献	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 『豊後國田染荘の調査　報告書第3集』1986

No.16　金福寺　入口

No.16　石造物群近景

No.17　堤と池

No.17　金福寺　入口

No.18　溜池

上野２

田染荘地域における名勝調査(個別調査)

１住所	豊後高田市田染上野市場（No.19）,田染真中大門（No.88,８９）,戸原（No.90）

２特徴

No.19 市場の八幡社　小字市場に所在。絵図にも描かれており、八幡宮御旅所と記されている。延文 5（1360）年に一宮八幡宮の浮殿が移される形で建てられ、その後二宮・三宮の神殿が新造された。この頃から御神幸祭りが開始されたと考えられている。祭りでは三社の神輿が地域を回り、最後はこの御旅所に集まる。

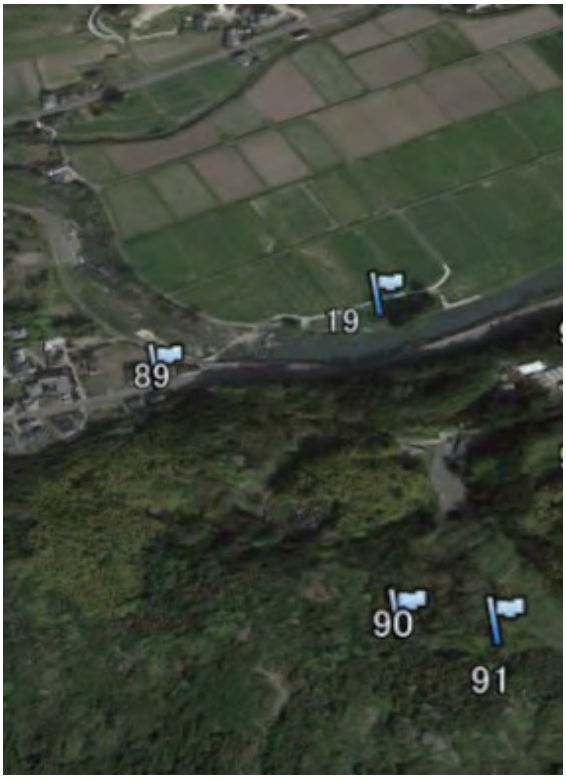
No.88　大門の視点場　旧・間戸村小字大門に位置する視点場でこの方向に見える大門坊磨崖仏のある岩を望むことができる。これは絵図の中に描かれる岩と考えられる。

No.89　大門坊磨崖仏　崖面の北壁から南壁にかけて計 5 躯の尊像が薄肉彫りされる。多聞天立像、薬師如来坐像、金剛界大日如来坐像、尊名不詳の仏像、不動明王立像が横一列に並ぶ。室町時代、15 世紀後半から 16 世紀にかけての頃の造顕とされる。

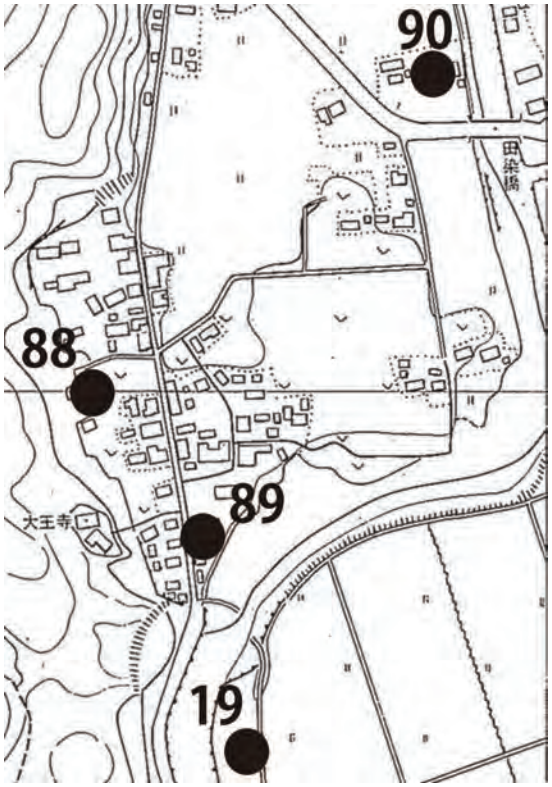
No.90　安養寺　旧・中村小字戸原に位置しており、この地は小字内地名でヒロオサという。絵図では安養寺という名称と屋根付の堂のようなものが描かれている。これが現在の安養寺にあたると考えられる。

３指定文化財	大門坊磨崖仏（市史跡）、安養寺文字庚申塔（市有民）

４周辺図



５詳細図



地図番号：（78）豊後高田 No.19	参考文献	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 『豊後國田染荘の調査　報告書第3集』1986

No.19　八幡社　鳥居

No.88　視点場　大門坊磨崖仏方面

No.89　大門坊磨崖仏1

No.89　大門坊磨崖仏1

No.89　大門坊磨崖仏3

No.90　安養寺に向う橋

No.90　安養寺　お堂　近景

No.90　安養寺文字庚申塔

上野３

田染荘地域における名勝調査(個別調査)

１住所	豊後高田市田染上野立石 (No.20,21,22,23)屋敷 (No.24)

２特徴

No.20 立石の堤　上野村小字立石にある丘陵で、現在は墓地群を残す。絵図には記載がないがこの北東には堂があったとされる痕跡がある。

No.21 立石の池　旧・上野村小字立石に位置する池で、堤とともに痕跡のみ残る。池に水は現在溜まっていない。絵図にも描かれている池である。

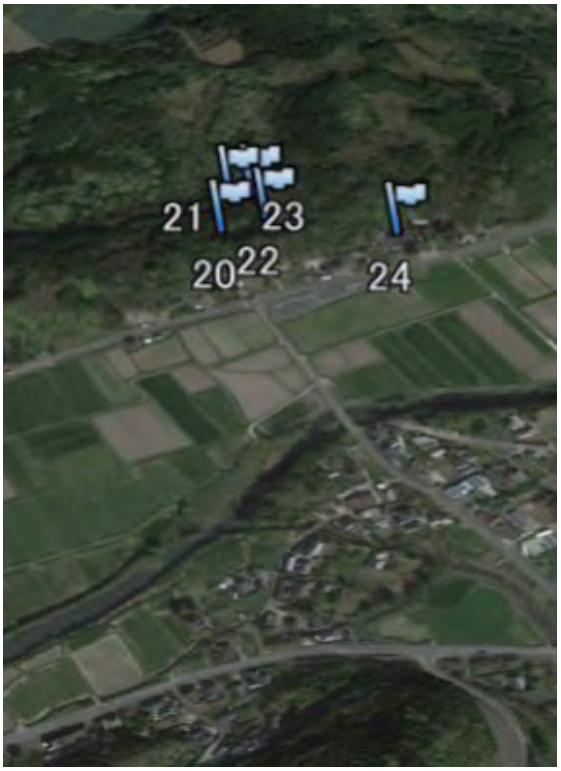
No.22 立石の丘陵　上野村小字立石にある丘陵で、現在は墓地群を残す。絵図には記載がないがこの北東には堂があったとされる痕跡がある。

No.23　立石の建物推定地　上野村小字立石に位置し、絵図では建物として描かれているのみである。現在は、なにかしらがあったと考えられる空白地が残るのみで痕跡はない。

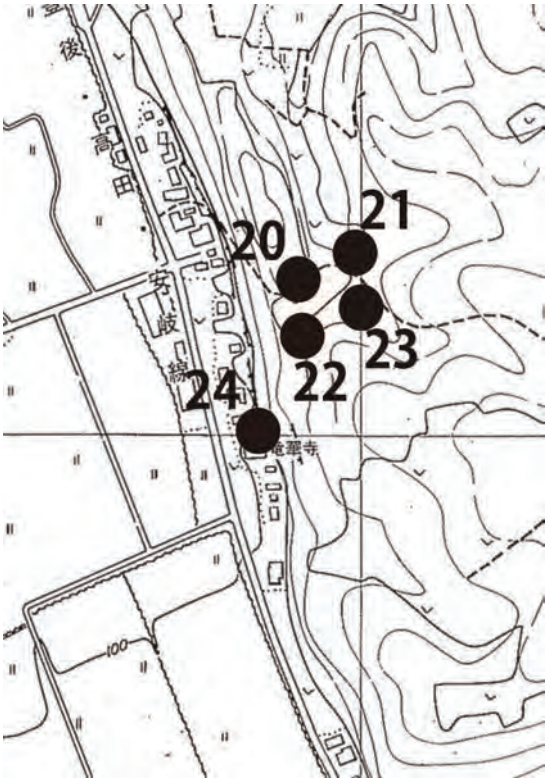
No.24　西生寺　小字屋敷に所在。絵図には集落の中心に位置する形で描かれている。この地域は浄土真宗が広く普及しており、その中心寺院として存在していたと思われる。

３指定文化財

４周辺図



５詳細図



地図番号：（78）豊後高田 No.21	参考文献	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 『豊後國田染荘の調査　報告書第3集』1986

No.20　立石の堤　遠景

No.21　立石の池　遠景

No.22　丘陵の墓地群　遠景

No.23　建物　推定値　遠景

No.24　西生寺　入口

No.24　西生寺　本堂

上野４

田染荘地域における名勝調査(個別調査)

１住所	豊後高田市田染上野西ノ尻（No.25,26）,園田（No.27）,田染平野中尾（No.34,35,36,37）

２特徴

No.25 西ノ尻の祠　小字西ノ尻に所在。石殿も隣接して位置しており、詳細は不明である。

No.26　西ノ尻の五輪塔群　道路脇に並べられている。五輪塔以外の石造物も見られる。

No.27　園田の阿弥陀堂　現在は阿弥陀堂は存在しない。宝篋印塔と五輪塔３基が現存しているのみである。

No.34　観音堂村の分岐点　旧・観音堂村小字中尾にある分岐点で北に行くと慈恩寺に向かう道で西に進むと集落を通る道である。絵図には明確に描かれている。

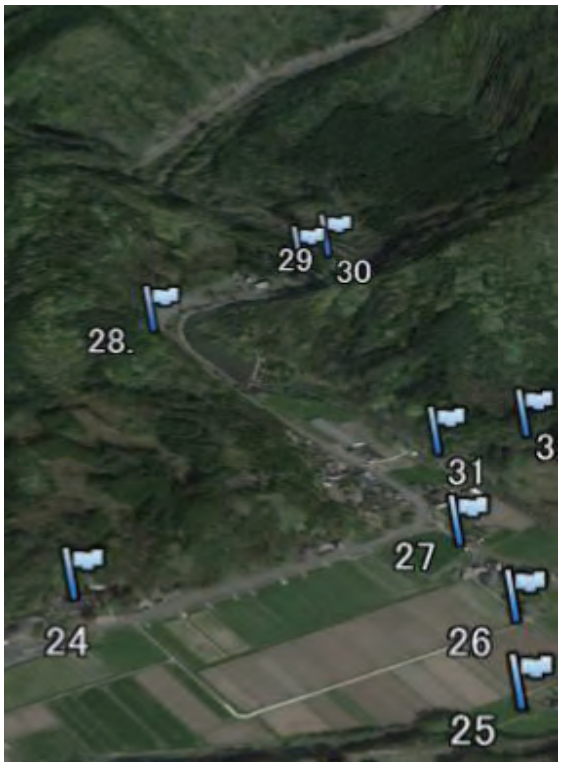
No.35　慈恩寺　観音堂村小字中尾に位置し、小字内地名としてオマンサンヤシキなどが残る。絵図にも慈恩寺という字は見受けられ、隣にはお堂らしきものも描かれている。

No.36　中尾の堂　旧・観音堂村の中尾にある堂とされるところで、絵図では堂の文字の記載もみられるが、現在ではその推定地周辺に石造物が残るのみである。

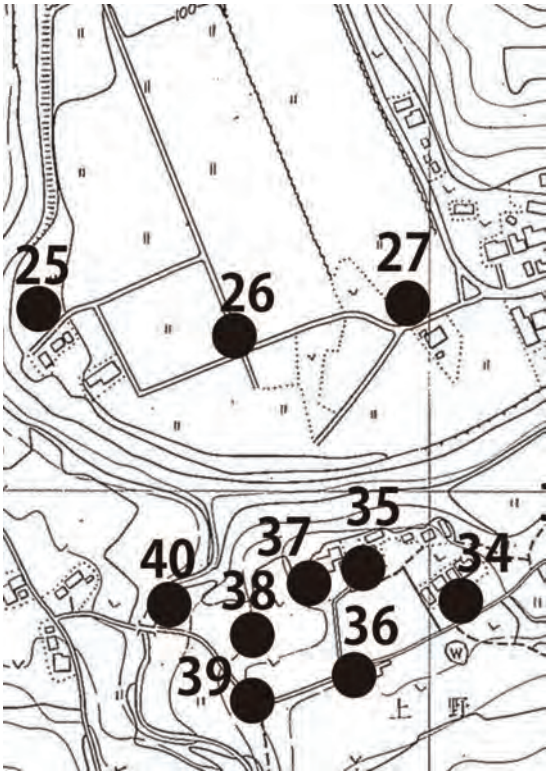
No.37　慈恩寺横の石造物群　観音堂村の中尾に位置し、慈恩寺の西側にある。現在は、石造物群が立ち並ぶが絵図では屋根付きのお堂のように描かれている。

３指定文化財

４周辺図



５詳細図



地図番号：（78）豊後高田 No.25	参考文献	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 『豊後國田染荘の調査　報告書第3集』1986

No.25　祠

No.26　五輪塔群　近景

No.27　宝篋印塔と五輪塔・地蔵

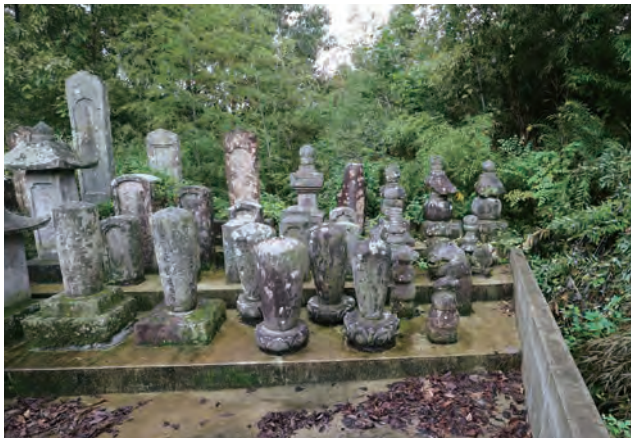
No.34　分岐点　遠景

No.35　慈恩寺　正面遠景

No.35　慈恩寺　観音堂

No.36　堂の推定値　遠景

No.37　石造物群　近景



上野５

田染荘地域における名勝調査(個別調査)

１住所	豊後高田市田染上野屋敷（No.28）,高取（No.29）,鍋山（No.30),田染平野神田（No.31）,周ヶ尾（No.32),間戸岩（No.33）

２特徴

No.28 鍋山磨崖仏　旧・小字屋敷に所在。熊野磨崖仏・元宮磨崖仏と共に国の史跡に指定されている。岩壁には不動明王・矜羯羅童子・制多迦童子が半肉彫りで描かれている。制作年代は平安時代後期～鎌倉時代初期と推定される。中世は稲積岩屋といわれていた。

No.29　三宮八幡社　旧・小字高取に所在。御旅所が立てられた後、造立された神殿の一つで御神幸祭りの際にはこの宮からも神輿が出発し、御旅所（上野字市場）へと向かう。中世は稲積大明神といわれていた。鍋山の岩峯が目の前に見え、元禄７年には貝原益軒、明治 40 年には井上円了がここを訪れ、鍋山の景を名勝として評価している。

No.30　鍋山の視点場　旧・上野村小字鍋山に位置する視点場で対岸にある鍋山の岩峰を見ることができる。この景観は貝原益軒や井上円了による著書の中にも記載がみられる。

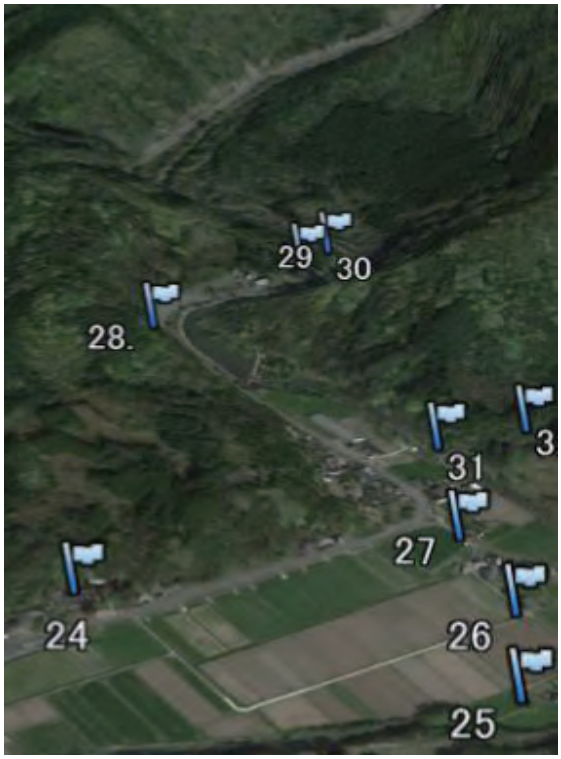
No.31　観音堂村の渡河点　旧・上野村小字神田から観音堂村小字周ヶ尾にかかる橋にあったと考えられる。
観音堂村の絵図には渡河点らしきものが描かれている。

No.32　周ヶ尾の岩屋堂　旧・観音堂村小字周ヶ尾（現在の大字平野小字周ヶ尾）にある岩屋堂である。周囲には小字内地名としてフドウヤシキという名称が残る。絵図には堂を枠で囲み、その隣には屋根持ちの家があるように描かれている。現地にいくと屋根持ちの家はないが、岩をくりぬき中に観音様を置いている。

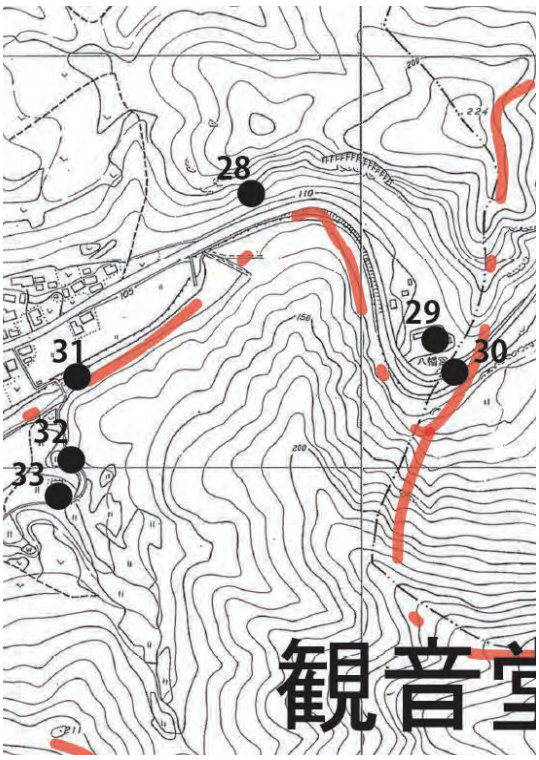
No.33　間戸岩の道　旧・観音堂村の間戸岩にある道で、現在は道が残るのみで水は視覚できない。上にのぼる道は残りその付近から漏れ出すように水が流れている。絵図では道と川が交差する地点を指していると考えられる。

３指定文化財	鍋山磨崖仏（国史跡）

４詳細図



５詳細図



地図番号：（78）豊後高田 No.28	参考文献	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 『豊後國田染荘の調査　報告書第3集』1986

No.28　鍋山磨崖仏　不動明王

No.29　三宮八幡社　境内

No.30　視点場（「三ノ宮の景」東側から）

No.31　上野村から見た渡河点

No.32　岩屋堂　遠景

No.32　フドウヤシキとされる地点　遠景

No.33　間戸岩の道

観音堂1

田染荘地域における名勝調査(個別調査)

1 住所	豊後高田市田染平野中尾 (No.38,39,40),田染真中 (No.44),田染真木城山 (No.53,54)

2 特徴

No.38　慈恩寺前の道　旧・観音堂村小字中尾に位置し、慈恩寺前の道として機能し、なおかつ集落近くを通る道だということを絵図から推定できる。しかし、現在はその痕跡はなく墓の裏側の崖下が道であると考えられる。

No.39　真木村からの道　旧・観音堂村小字中尾に位置する道で、北西にある真木村の橋を渡ると観音堂へ向かう道として利用される。絵図では、真木村の南側に抜ける道として描かれている。

No.40　字界の橋　旧・観音堂村小字中尾にある橋でここから先は真木村との字界となる。
絵図では渡河点などは描かれていないが、川まで向かう道があるためそれが現在の橋であると考えられる。

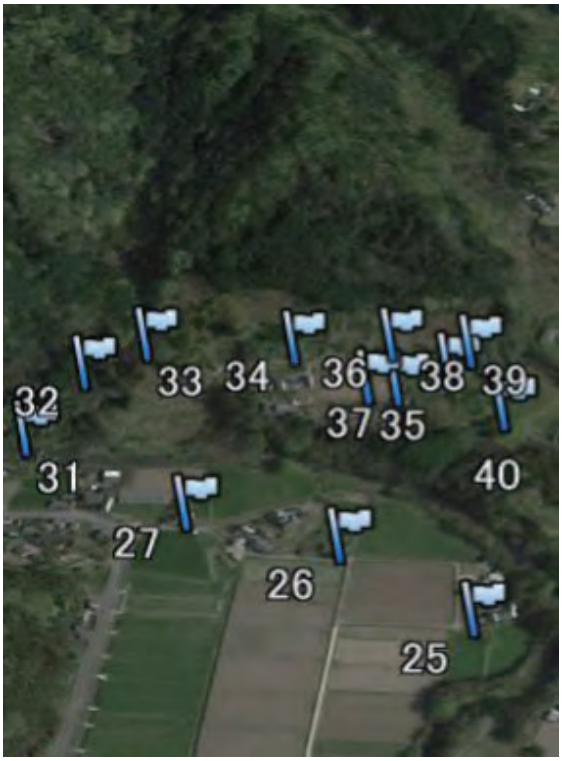
No.44　桜馬場の道の分岐　旧・真木村小字草場にある道の分岐点で、桜馬場と呼ばれ絵図においては真木大堂から東へ向かう直線道がある。

No.53　前田の道の分岐点　旧・真木村小字前田に位置する分岐点であり、南側へ向かう道と西側に向かう道が交差する場所である。この場所については、絵図では札所として描かれており、現在の道と絵図の道とが符合している。

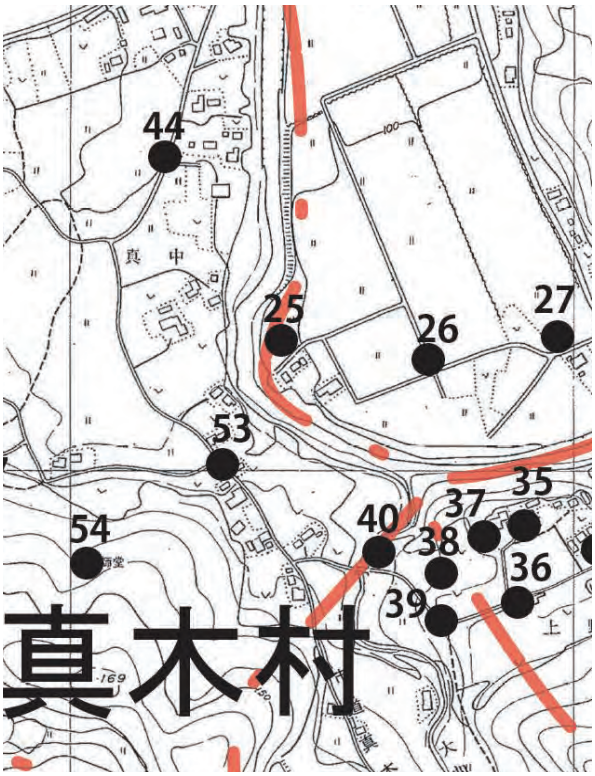
No.54　城山薬師堂四面石仏　旧・田染真中に位置する。四面石仏・国東塔が県指定をそれぞれ受けている。四面石仏は北面に阿弥陀如来坐像、不空羂索観音立像、如来形立像、合掌像小仏、南面に薬師如来像、阿弥陀如来坐像、菩薩像、東面に阿弥陀如来坐像、西面に阿弥陀如来坐像が彫られている。棟札には「維持昭和三拾二年十月吉祥日薬師堂改築紀念講中誌」「享和元年再興」と記述されている。
県指定の国東塔は、総高 303ｃｍ、石材角閃石安山岩。八角形の基壇の上に置かれた方形の基礎は変形の格狭間を刻んでいる。塔身は下部がやや細まった円筒形で、笠は形の整った照屋根。南北朝時代から室町時代初期の造立と推定される。

3 指定文化財	城山国東塔（県有形）、城山薬師堂四面石仏（県有形）

4 周辺図



5 詳細図



地図番号：（78）豊後高田 No.38	参考文献	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 『豊後國田染荘の調査　報告書第3集』1986

No.38　道の推定値　遠景

No.39　真木村からの道

No.40　字界の橋　遠景

No.44　桜馬場　東側

No.53　道の分岐点（南側へ向かう道）

No.54　城山四面仏　正面近景

No.54　城山国東塔

真木１

田染荘地域における名勝調査(個別調査)

１住所	豊後高田市田染真中真木草場 (No.41,42,99,100)

２特徴

No.41　草場の釈迦堂の横道　旧・真木村小字草場に位置し、この位置から対岸に渡る道があったと考えられる。絵図には川の接するところで道が途絶えておりその左右にまた道が広がる。

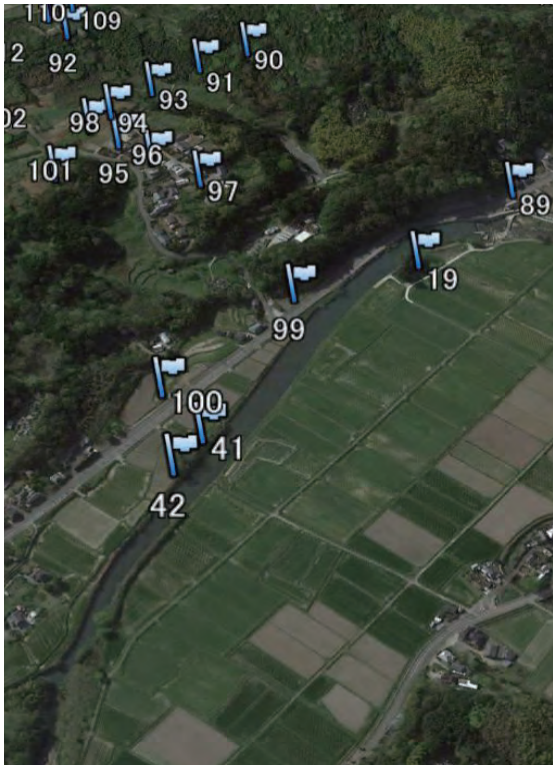
No.42　釈迦堂宝篋印塔　旧・真木村小字草場に位置しており、宝篋印塔の塔身二面に又此石塔者往昔永 / 和五己未年造立之 / 大塔也中古貞亨三 / 丙寅歳大風破損而 / 経星霜久敢無再興 / 族今也宝暦八戌寅 / 之初冬発微信之輩 / 卒再建此塔者也 / 真木邑 / 大願主 / 下組中と刻まれている。絵図では、屋根持ちの建物と墓のようなものが描かれている。

No.99　桂川から見た間戸村　旧・間戸村小字草場に位置し、東側は桂川で西側の坂をのぼると間戸村へ向うことができる。絵図でもこの道は見られる。ここから桂川沿いに南北に続く道が延びる。

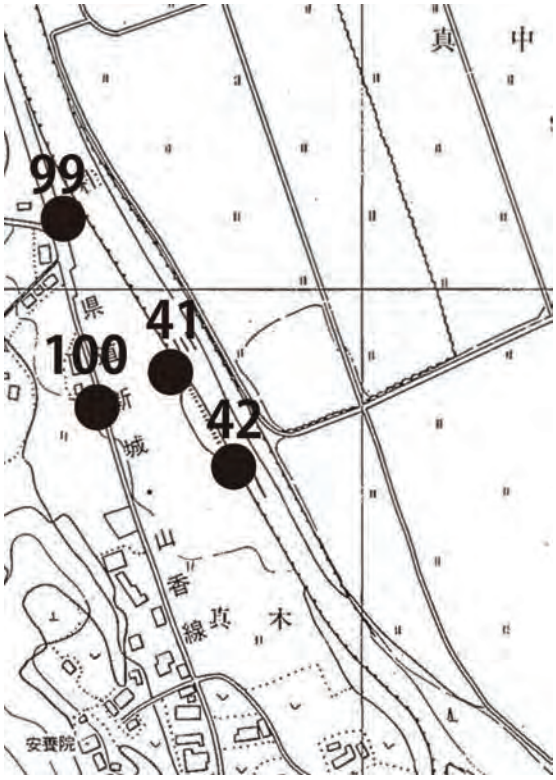
No.100　草場の桂川に沿う道　旧・間戸村小字草場に位置し、間戸村から下りてきたところから南へ進むとこの地に至る。東側は桂川があり西側には間戸村のある丘陵が確認できる。絵図には字境として描かれ、絵図どおり池は残っている痕跡はない。

３指定文化財	釈迦堂宝篋印塔（市有形）

４周辺図



５詳細図



地図番号：（78）豊後高田 No.41	参考文献	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 『豊後國田染荘の調査　報告書第3集』1986

No.41　釈迦堂宝篋印塔堂横の道

No.42　釈迦堂　全景

No.42　釈迦堂宝篋印塔　遠景

No.42　釈迦堂宝篋印塔　塔身銘

No.99　桂川側からみた間戸村

No.100　桂川側の景色

真木２

田染荘地域における名勝調査(個別調査)

１住所	豊後高田市田染真中草場 (No.43) , 随願 (No.45,46)
２特徴	

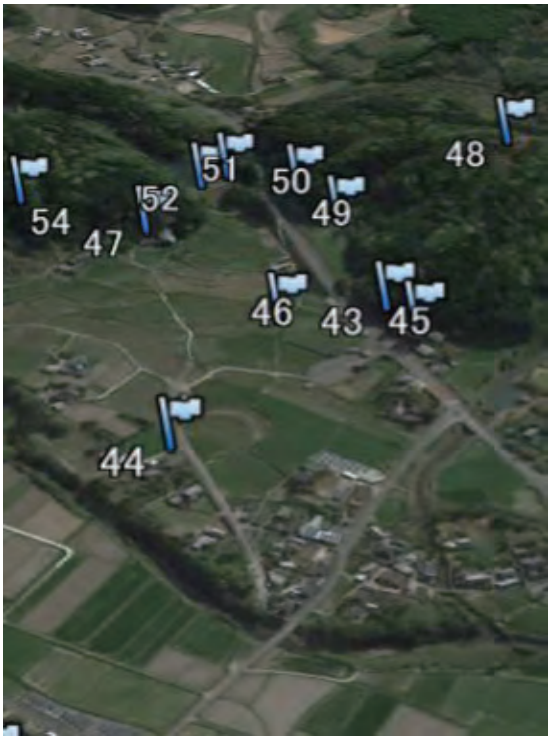
No.43　熊野社　真木村小字草場に位置し、真木大堂の南側にある。熊野社は現在鳥居と灯篭 2 基とお堂が残る。

No.45　真木大堂　旧・真木小字随願に位置している。真木大堂は中世は馬域山伝乗寺といい、ここの仏像、阿弥陀如来、大威徳明王、不動明王、四天王像は国の重要文化財となっている。ここの梵鐘は、田染八景に選ばれているが、鐘は新しい。真木大堂の古代公園内には田染各所から集められた近世の石塔がある。その中で、真木大堂庚申塔が市指定である。両側面に「享保 13 年 (1728 年) 戌申天」「8 月吉祥日」の刻銘があり、塔身の下部には講中の名が刻まれている。庚申信仰が盛んであった江戸中期のものである。

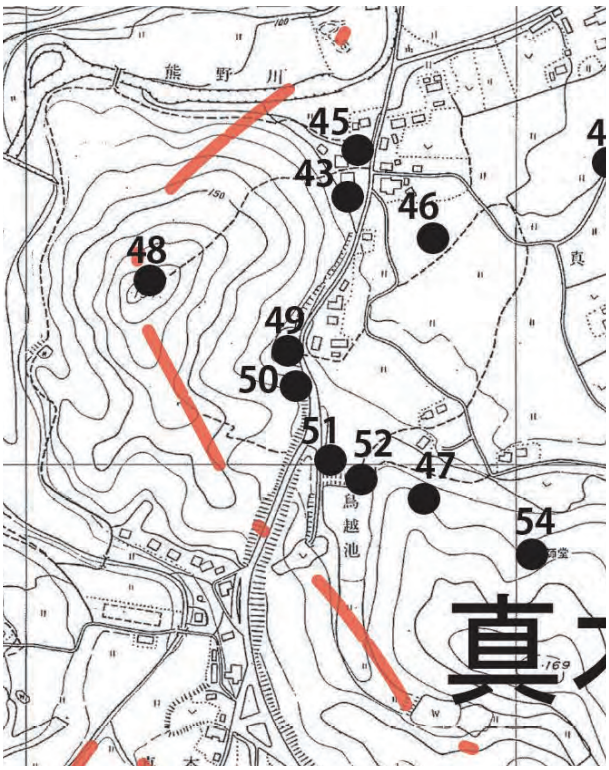
No.46　随願の閻魔堂跡　旧・真木村小字随願に位置し、昔は堂跡、閻魔像、脱衣婆、地蔵像が存在したが、いずれも荒木氏墓地へ移動した。灯明石というのがあり山伏が両子に向かってホーラン貝を吹いていたという伝えられた。

３指定文化財	木造阿弥陀如来坐像（国重文），木造四天王立像（国重文），木造不動明王及び二童子立像（国重文），木造大威徳明王像（国重文），木造仁王像阿形（県有形），木造仁王像吽形（市有形），龍泉寺国東塔（市有形），真木大堂庚申塔（市有民）

４周辺図



５詳細図



地図番号：（78）豊後高田 No.43	参考文献	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 『豊後國田染荘の調査　報告書第3集』1986

No.43　熊野社　近景

No.45　真木大堂　旧本堂

No.46　閻魔堂跡　近景

真木３

田染荘地域における名勝調査(個別調査)

１住所	豊後高田市田染真木城山（No.47,51,52),随願（No.48,49,50）,

２特徴

No.47　城山の豊田家墓　旧・真木村小字城山に位置する墓地群で鳥越池の堤をとおり東側の坂をおりる途中にある。この先の道は、願寿寺に向かう道となっている。

No.48　金比羅社　旧・真木村小字随願に所在。絵図にも描かれておらず、詳細は不明である。

No.49　随願寺　旧・真木村小字随願に位置しており、絵図上に文字の記載はないが随願寺と考えられるものが見受けられる。中央厨子に地蔵菩薩立像（石造採色）がみられる。

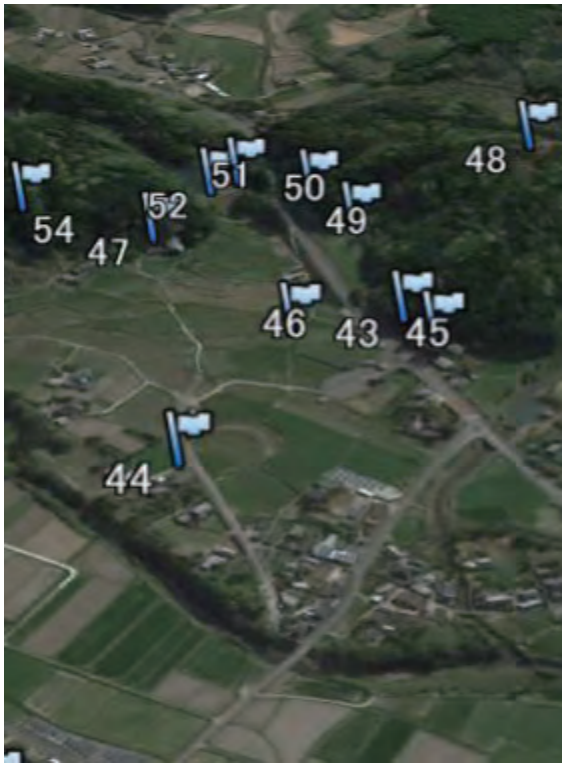
No.50　稲荷大明神　旧・小字随願に所在する。稲荷の裏面には「文化十一夭　奉納正市〇大明神　二月吉日」の碑文がある。絵図にも描かれている。

No.51 鳥越池横の道　旧・真木村小字城山に位置する道であり鳥越池の西に広がる。南北方向だけでなく西側にも集落へ抜ける道がある。

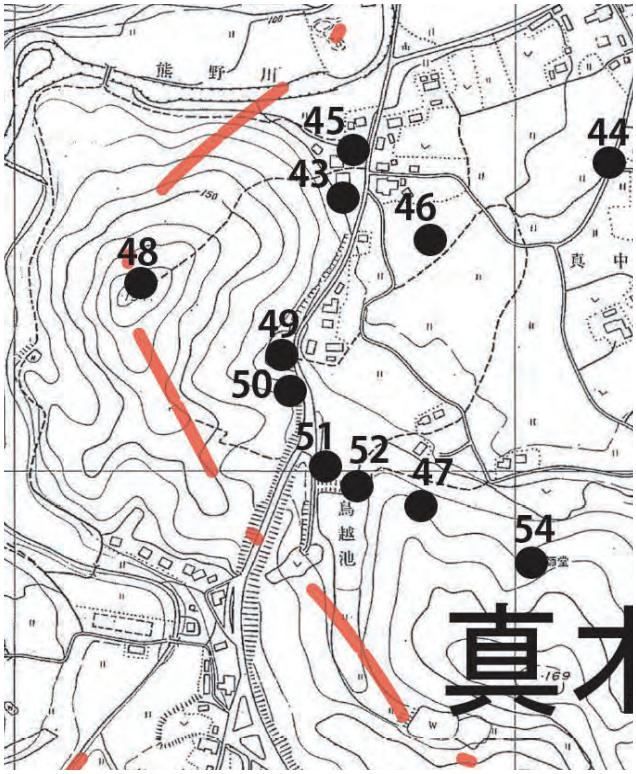
No.52　鳥越池の堤　旧･真木村小字城山にある池の堤であり、西側は集落に抜ける道になっている。堤通って東側は豊田家墓地を通る道にでるため、通り道としても使用したと考えられる。絵図でも道として使用したと考えられる描き方をしている。

３指定文化財

４周辺図



５詳細図



地図番号：（78）豊後高田 No.47	参考文献	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 『豊後國田染荘の調査　報告書第3集』1986

No.47　豊田家の墓　遠景

No.49　随願寺　近景

No.48　金比羅社　近景

No.48　金比羅社から周辺

No.50　稲荷大明神　近景

No.51　池の横の道　西方

No.52 鳥越池の堤

熊野１

田染荘地域における名勝調査(個別調査)

１住所	豊後高田市田染平野観上軒（No.55,56）,熊野（No.57),神田（No.70,71）

２特徴

No.55　観上軒の池の横の道　旧・熊野村小字観上軒に位置し、池の横を通る道である。現在でも道の痕跡がある。

No.56　観上軒の池　旧・小字観上軒にある溜池で、池の横の道も存在するがそれに向かう道として堤が利用されたと考えられる。

No.57　熊野川に架かる橋　旧・熊野村小字熊野にある橋で、現在でも絵図通り道と川が交差するように通っている。

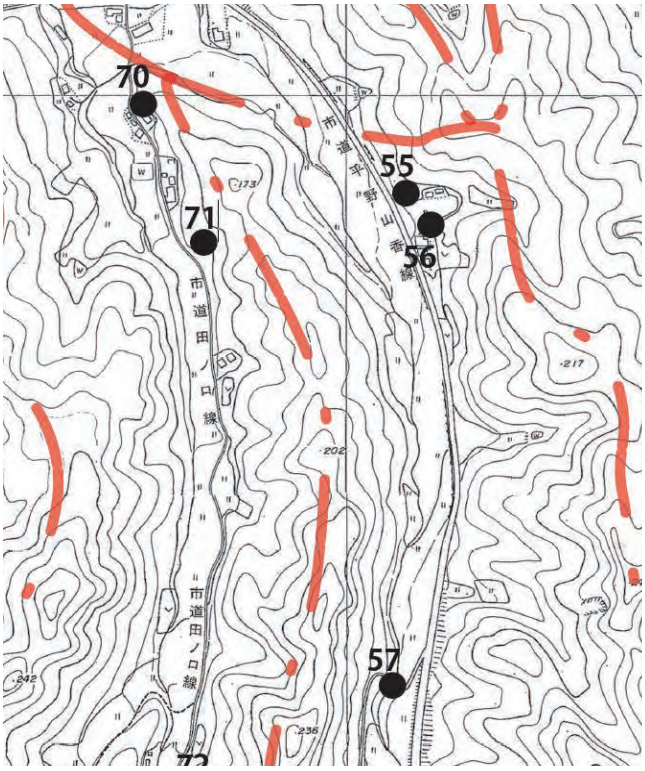
No.70　神田の溜池　旧・田野口村小字神田に位置する溜池で絵図にも描かれている。現在は堤の痕跡が残るのみである。

No.71　神田の山神社　旧・田野口村小字神田に位置し、絵図によると神田の溜池の南側にあったとされているが現在はさらに南の丘陵付近に移動している。お堂が建ちその後には稲荷大明神の小さな鳥居がある。

３指定文化財

４周辺図

５詳細図



地図番号：（78）豊後高田 No.55	参考文献	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 『豊後國田染荘の調査　報告書第3集』1986

No.55　池

No.56　池の堤　北方向

No.57　熊野川に架かる橋　遠景

No.70　溜池跡

No.71　山神社　近景

No.71　山神社　石造物群　遠景

熊野２

田染荘地域における名勝調査(個別調査)

１住所	豊後高田市田染平野向ヶ平（No.58,60）,橋本（No.59,63,64),近道（No.61,62）

２特徴

No.58　向ヶ平の隣村へ抜ける道　旧・熊野村小字向ヶ平にある道で絵図には描かれているが現在は使用されていないようである。付近にはタノクチゴエという小字内地名ものこる。

No.59　橋本の溜池　旧・平野村小字橋本にある溜池で現在は通れるが、絵図においても道は明確になっていない。

No.60　向ヶ平の対岸へ向かう道　旧・熊野村小字向ヶ平にある道で、この道は鳥居より降りてきた西側に直進すると通ることができる。絵図においては道を表現しているが現在は利用されていないようである。

No.61　近道の鳥居前　旧・熊野村小字小道にある鳥居であり、熊野社のものである。これを登ると熊野摩崖仏へ向かうことができる。

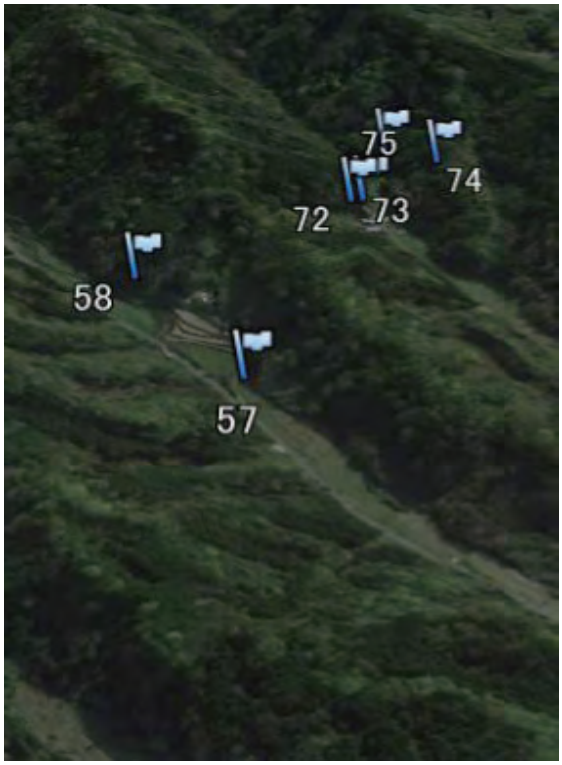
No.62　視点場からみたウトアナ及びゼゼノサマ（赤岩）　旧・熊野村小字近道から東を見た視点場で右の岩をウトノアナと呼び、右側の岩群をゼゼノサマ（アカイワ）という。

No.63　橋本の祠　旧・熊野村小字橋本の祠で絵図では赤い屋根の建物と宮と書かれた場所に対応すると考えられている。

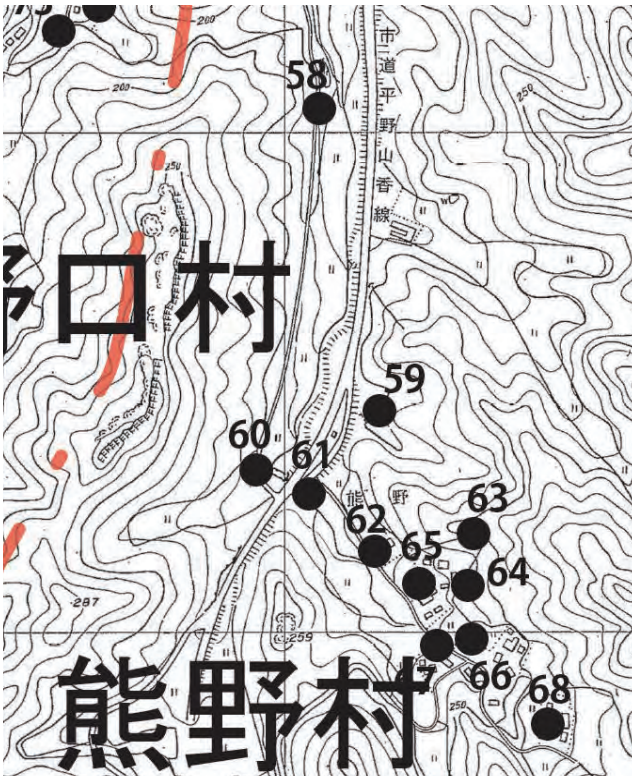
No.64　橋本の後藤家墓地　旧・熊野村小字橋本にある後藤家墓地で現在は石造物群が立ち並んでいる。絵図では宮と記載されている箇所と考えられている。

３指定文化財

４周辺図



５詳細図



地図番号：（96）豊後高田 No.58	参考文献	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 『豊後國田染荘の調査　報告書第3集』1986

No.58　隣村に続く道

No.59　池の遠景

No.60　対岸に向かう道

No.61　熊野社の鳥居

No.62　視点場から見たウトアナ及びゼゼノサマ　遠景

No.63　祠　近景

No.64　後藤家墓地　全景

No.64　後藤家墓地　近景

熊野３

田染荘地域における名勝調査(個別調査)

１住所	豊後高田市田染平野近道（No.65,66,67,68）,無畑（No.69）,登尺（No.139）

２特徴

No.65　近道の橋　旧・熊野村小字近道にある橋で、遠景からわかるように橋は谷を渡るように作られている。

No.66　近道の分岐点　旧・熊野村小字近道にある分岐点で東に登れば胎蔵寺などがありまた南に向かう道もある。小字内地名はキドとよばれるところがあり、何かしらの関係性があるのではないかと考えられる。

No.67　近道のため池へ抜ける道　旧・熊野村小字近道にある道であり、この道を行くと無畑にある池に向かうことができる。絵図では田の横を通る道を通り、池に向かうように描かれている。

No.68　胎蔵寺　旧・田染平野熊野に位置している。胎蔵寺は中世は今熊野寺といわれ、熊野集落から奥の熊野磨崖仏は寺の境内の中核部であり、村全体が寺院の境内地であった。現在の寺の境内では、国東塔が市指定の対象になっている。六郷山寺院衰退期に当たるが、小形ながら塔身に金剛界四仏種子を配したものとなっている。大永７年(1527)8月17日の銘がある。

No.69　無畑のため池　旧・熊野村小字無畑にある溜池で絵図にも池が描かれている。堤の痕跡も確認できる。

No.139　熊野磨崖仏　旧・熊野村小字登尺に位置し、熊野社の参道からそれた所にある県内最大級の磨崖仏。

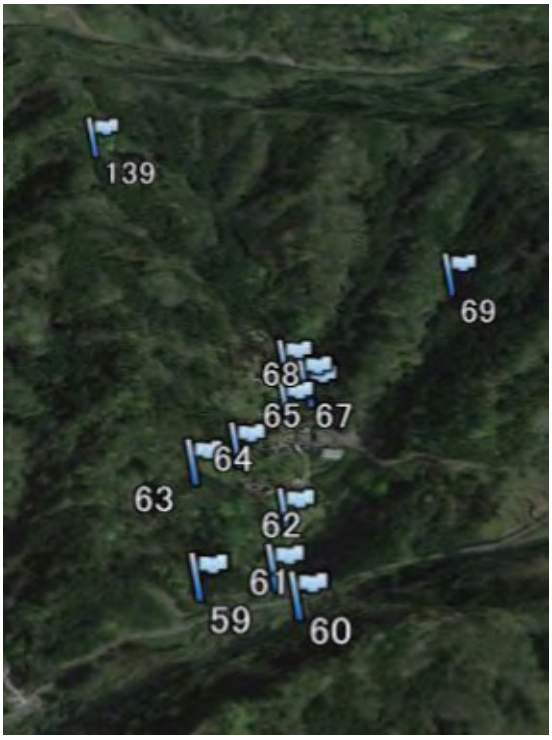
硬い岩壁に彫られた大日如来・不動明王の雄大な姿からは、熊野地域の信仰活動の力強さが感じられる。向かって右の大日如来像は、像高 681.8 ㎝。鋭く隆起した螺髪、角張った顔に刻む癖の強い目鼻立ち、大きな耳、広い肩幅などから、平安時代後期 (12 世紀) の製作と考えられ、本県最古の石仏である。

不動明王及び二童子像は、像高 807.0 ㎝。風蝕のため、像容の詳細を明らかにできないが、不動明王の頭頂に莎髪をつけ、辮髪を左肩に垂らし、左眼を細めた天地眼である。左手に羂索、右手に剣を執り、下膨れのユーモラスな表情をたたえるが、全体としては素朴な造形である。

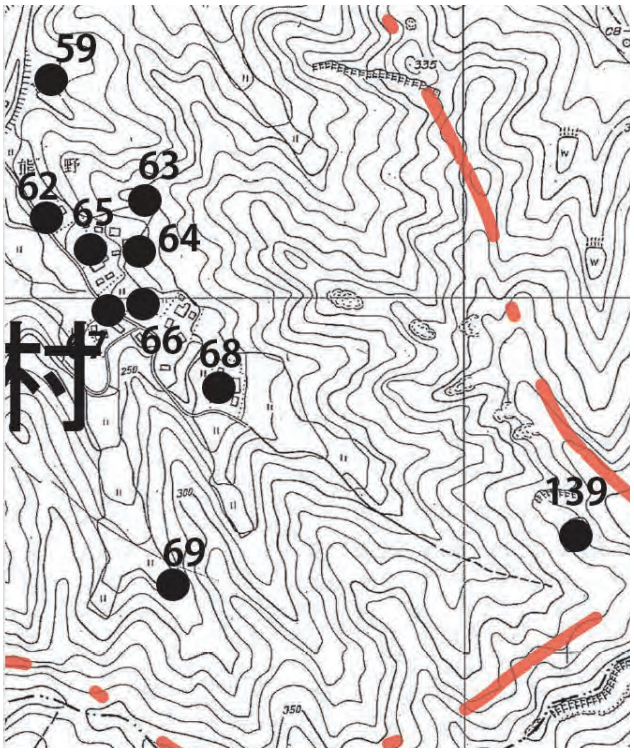
通常不動明王の左右に造られる二童子 (矜羯羅童子・制吒迦童子) の姿は概形をかすかに判別できるほどであるが、面相・姿態ともに不動明王に類似するものであったと考えられる。制作時期は大日如来より後の時代と推測される。

３指定文化財	熊野磨崖仏（国重文、国史跡）, 石造宝塔（県有形）, 胎蔵寺国東塔（市有形）

４周辺図



５詳細図



地図番号：（96）豊後高田 No.65	参考文献	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 『豊後國田染荘の調査　報告書第3集』1986

No.65　橋

No.66　胎蔵寺に向かう分岐点　のぼり口

No.67　溜池へ向かう道

No.68　胎蔵寺　仁王門

No.69　溜池　遠景

No.139　熊野磨崖仏　遠景

No.139　熊野磨崖仏　不動明王　下から望む

No.139　熊野磨崖仏　大日如来上部の磨崖曼陀羅

田野口１

田染荘地域における名勝調査(個別調査)

１住所	豊後高田市田染平野田ノ口（No.72,73,74,75）,竹ノ下（No.76）

２特徴

No.72　田ノ口の池へ向道　旧・田野口村小字田ノ口にある道でここから南に進むと池へと進む道である。ここまでが田ノ口の小字名をもつがこれより先は竹ノ下という小字の字境。

No.73　田ノ口の堂　旧・田野口村小字田野口にある堂で岩を刳り貫いて作られている。絵図には堂という文字を囲む線で表現している。現地は、岩を刳り貫いた堂とその横には熊野に向う道を切通し状に切り開いている。

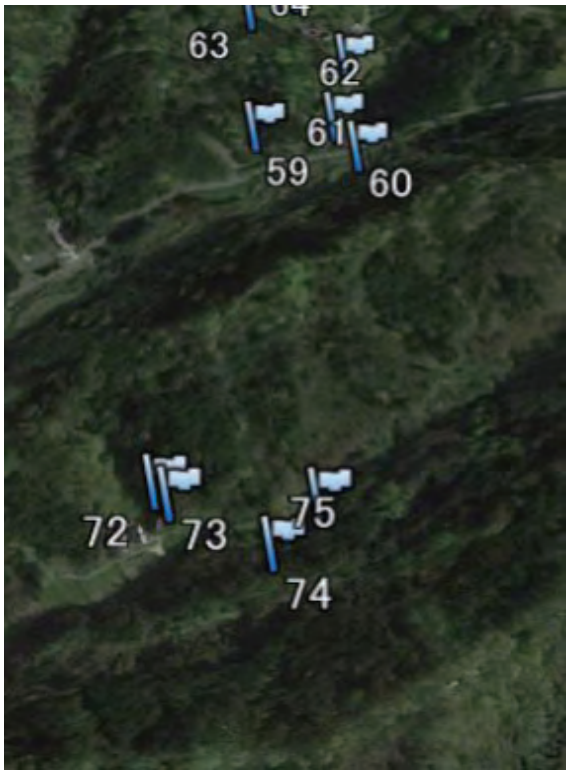
No.74　高岩の天神様　旧・田野口村小字高岩に位置する天神様で南側の丘陵にある。祠の中に天神様が入っている。

No.75　毘沙門堂　旧・田野口村小字高岩にある毘沙門堂で絵図には堂という記載とともに建物が描かれている。現在は、プレハブ小屋の中に木製のお堂がありその中に仏像がある。また毘沙門堂前には祠がありその中にも仏像がある。

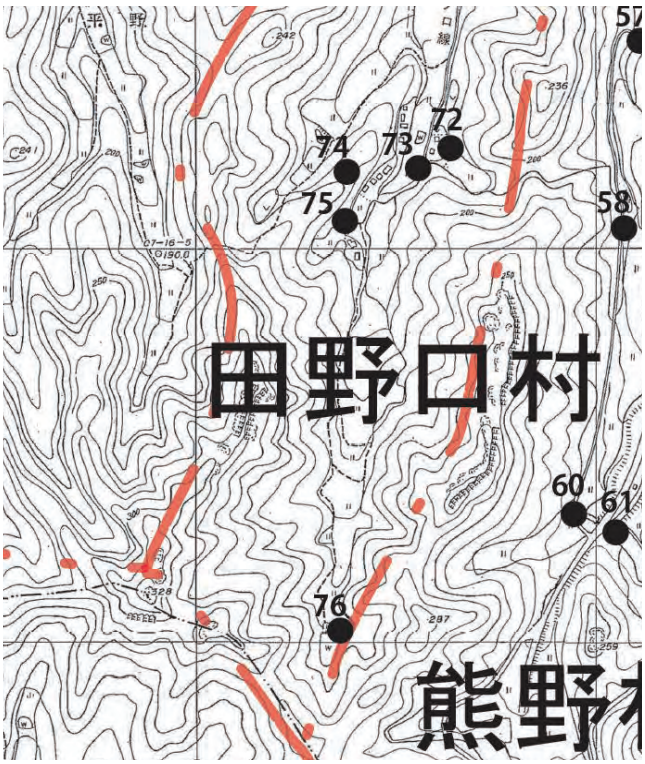
No.76　竹ノ下の溜池　旧・田野口村小字竹ノ下に位置し、現在も池に水が溜まり、堤も今も通れるようになっている。絵図では田野口村の一番高い位置に位置する池で集落を通る川の源流である。

３指定文化財

４周辺図



５詳細図



地図番号：（96）豊後高田 No.72	参考文献	大分県宇佐風土記の丘歴史民俗博物館 『豊後田染荘の調査』　1987

No.72　池へ向かう道（南西方向）

No.72　池へ向かう道（南方向）

No.73　田野口の堂　正面近景

No.73　田野口の堂　横に抜ける道

No.74　天神様　正面

No.75　毘沙門堂　近景

No.76　池　遠景

薗木１

田染荘地域における名勝調査(個別調査)

１住所	豊後高田市田染平野土ノ尾（No.77）,道広（No.78）,上久保（No.79,80,81）,薗ノ木（No.82,83）

２特徴

No.77　土ノ尾の溜池　旧・薗木村小字土ノ尾にある溜池で主要道路より左にそれた道の先にある。絵図にはそれらしき池が描かれている。

No.78　道広の分岐点と石橋　旧・薗木村小字道広に位置し、連続して二つの分岐点がある。二つ目は渡河点であり、石橋が架かっている。

No.79　上久保の渡河点と堰　旧・薗木村小字上久保に位置し、渡河点と堰が見受けられる。絵図では道と川が交差したところとして描かれている。

No.80　上久保の堂　旧・薗木村小字上久保に位置し、周囲にはヒワオサという小字内地名を持つ。絵図には特に堂は描かれていない。

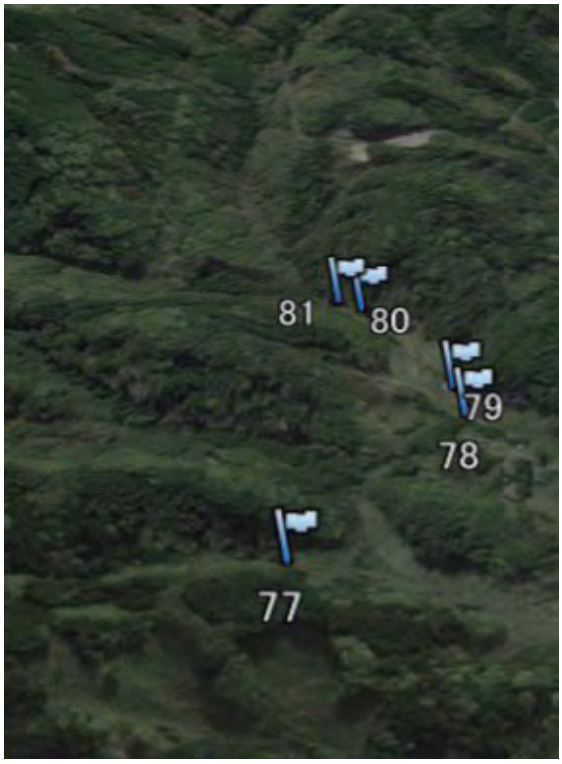
No.81　上久保の棚田跡と水路　旧・薗木村小字上久保に位置、使用年代は不明であるが、棚田と水路が所在する。棚田跡には石積みも残っている。水路も残存状況が非常によい。

No.82　薗ノ木の石造物　旧・薗木村小字薗ノ木にある不詳の石造物である。

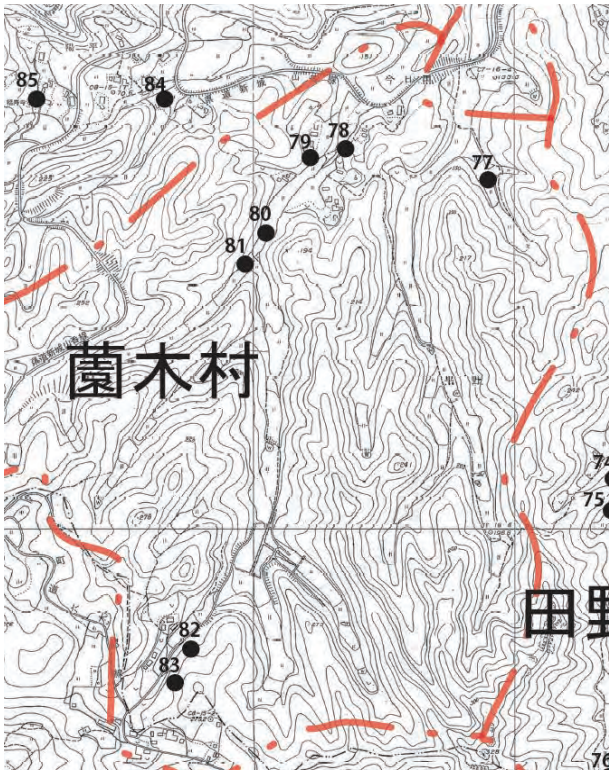
No.83　薗ノ木の山神　旧・薗木村小字薗ノ木にある山神である。右側の丘陵に登る石段を経ていくつかの石造物がある。祠やお堂が確認され、絵図の中にも山神として描かれているが特に祠を表現したものはない。

３指定文化財

４周辺図



５詳細図



地図番号：（78）豊後高田 No.77	参考文献	大分県宇佐風土記の丘歴史民俗博物館 『豊後田染荘の調査』　1987

No.77　堤　遠景

No.78　分岐点

No.78　石橋

No.79　渡河点

No.80　お堂

No.81 水路

No.82　不詳の石造物

No.83　お堂

陽平１

田染荘地域における名勝調査(個別調査)

１住所	豊後高田市田染平野道広（No.84）,上の平（No.85）,シケヤマ（No.86）,池の上（No.87）

２特徴

No.84　猛嶋社　旧・陽平村小字道広に位置し、陽平村の入り口となるところにある。鳥居には猛嶋社の額があり、左右には仁王像がある。鳥居の右柱には明治 27 年申年十月吉日鳥居の左柱には再建　岩尾輿七。

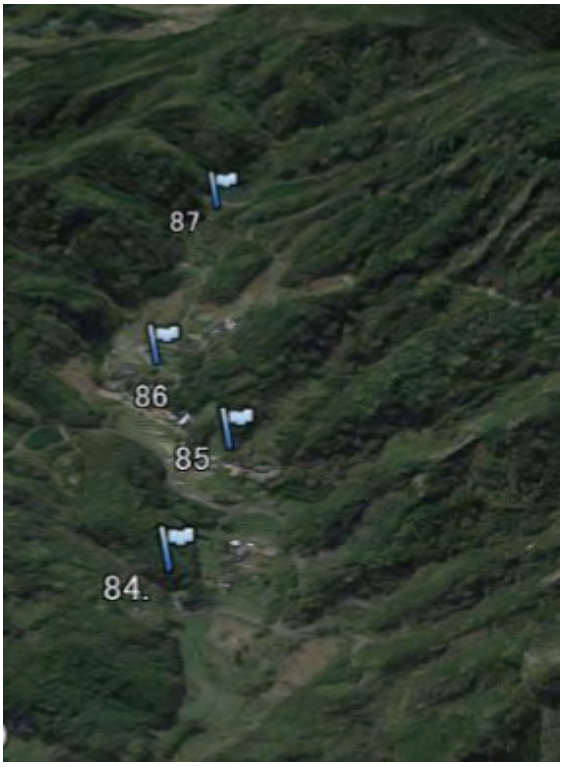
No.85　福寿寺　旧・陽平村小字上の平に位置し、石段をのぼると福寿寺がある。日陽山福寿寺とも呼ばれ浄土真宗の説教場として明示 29 年に開設され、それ以前より仏堂があり禅宗の僧侶が年二回供養を行っていたといわれている。この仏堂の本尊は観音菩薩であり、後藤小安之助朝久が田染に入部した際に奉納したものといわれる。絵図の観音堂に相当すると考えられる。同じ敷地には大岩に刻まれた薬師如来を本尊とする薬師堂がある。正面に本尊の薬師如来坐像と四体の尊名不詳仏が刻まれ、向かって右側の面に磨崖国東塔がある。磨崖国東塔については、基礎は二重で、台座は反鼻と蓮華座からなり、投信には「香以」「永享」「癸丑」と銘がある。

No.86　シケヤマの地蔵堂　旧・陽平村小字シケヤマに位置する地蔵で、この地をシロクインという小字内地名が残る。お堂があり中には観音様があり、外には不詳仏が鎮座している。

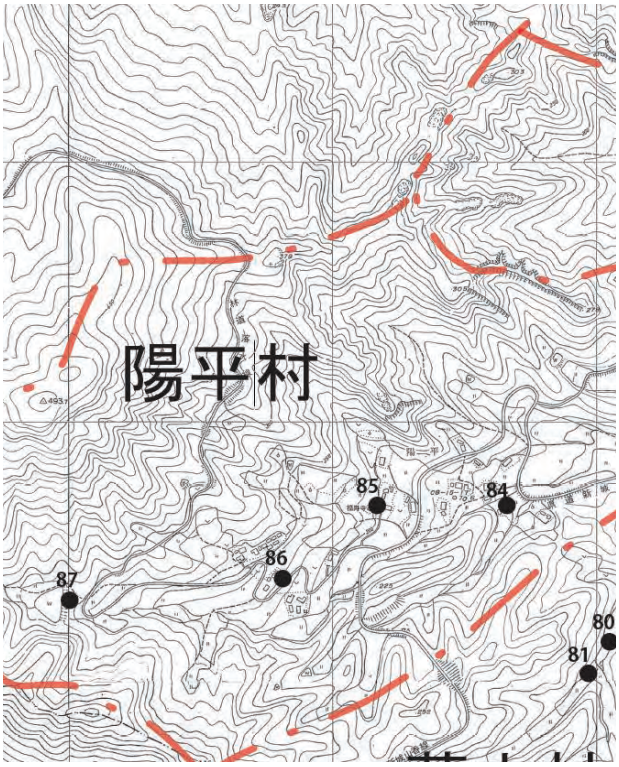
No.87　池の上の堤　旧・陽平村小字池の上にある池の堤で現在も水は溜まっている。絵図によると村を通る川の源流地であることがわかる。

３指定文化財

４周辺図



５詳細図



地図番号：（78）豊後高田 No.84	参考文献	大分県宇佐風土記の丘歴史民俗博物館 『豊後田染荘の調査』　1987

No.84　猛嶋社　遠景

No.84　猛嶋社　仁王像・阿形

No.85　福寿寺　本堂　石段から

No.85　福寿寺　磨崖国東塔　遠景

No.86　地蔵堂　遠景

No.87　堤　上部

間戸１

田染荘地域における名勝調査(個別調査)

１住所	豊後高田市田染真中旭 (No.91,93,94) ,間戸 (No.95,96,97,98)

２特徴

No.91　穴井戸観音　旧・間戸村小字旭に位置し、小字内地名もアナイドとなっている。間戸の集落より穴井戸観音を登る道は現在でも石段以外使用され、穴井戸観音の拝殿が岩陰に作られている。その岩陰の中に地蔵や仏像が置かれている。絵図においては屋根付の建物が描かれ、その奥に岩を刳り貫くように堂が描かれている。この穴井戸観音を当てていると考えられる。中世の間戸寺の中心部分と考えられる。

No.93　穴井戸観音と朝日観音へ向かう道　旧・間戸村小字旭に位置する道で、現在は穴井戸観音と朝日観音へ向う道として機能している。絵図では田を左右に持つ道として描かれている。

No.94　旭の視点場　旧・間戸村小字旭にある道で、視点場だけでなく集落の主要道としても重要であったと絵図からも考えられる。朝日観音を持つ岩を望むことができる。

No.95　間戸の御札推定値　旧・間戸村小字間戸にあり、絵図にある御札の位置付近ではないかと考えられる。周囲には特に痕跡はなかった。

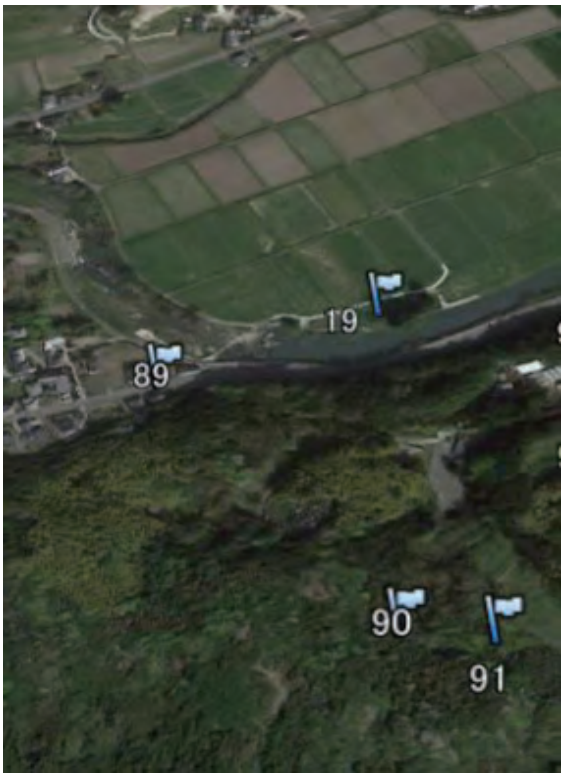
No.96　間戸の南へ向かう道　旧・間戸村小字間戸に位置し、小字内地名はホンケというのが周辺に残っている。現在は南へ向う道としての機能はしていないが、石垣や小丘陵との間に空間が残る。絵図には、南へ向う大きな道ではなく黒い線で書かれているのみである。

No.97　桂川へ向かう道　旧・間戸村小字間戸に位置し、この道を進むと桂川に向う。現在の道は家を回る道となっているが、田を囲む黒い線がその道に当たるのではないかと考えられている。

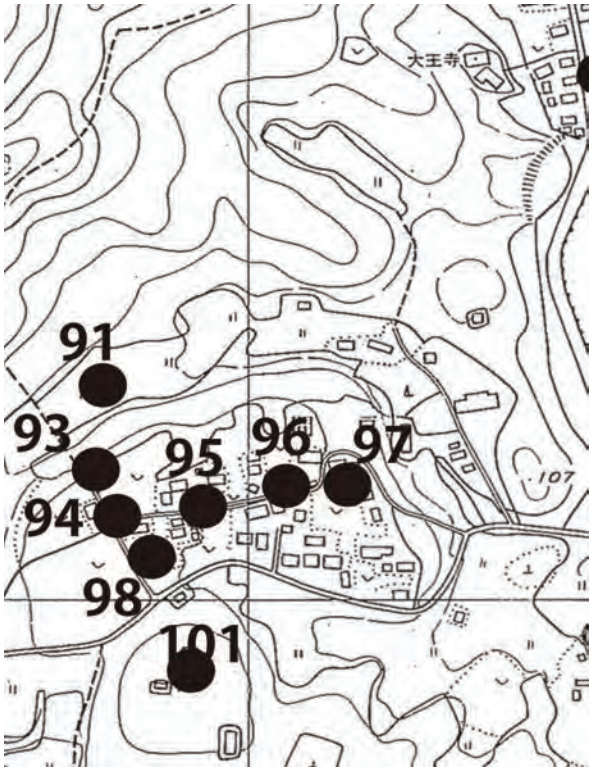
No.98　間戸の分岐点　旧・間戸村小字間戸に位置する分岐点で、西の道は現在使われていないが東と北と南に向う道が使用されている。絵図には、分岐点と考えられるものが描かれている。

３指定文化財	間戸層塔（市有形）

４周辺図



５詳細図



地図番号：（78）豊後高田 No.91	参考文献	大分県宇佐風土記の丘歴史民俗博物館 『豊後田染荘の調査』　1987

No.91　穴井戸観音　拝殿

No.91　穴井戸観音内

No.93　穴井戸観音と朝日観音へ向う道

No.94　朝日観音側の岩

No.95　御礼（高礼）推定地　周辺

No.96　集落の南へ向う道

No.97　桂川へ向う道

No.98　西に進む道

間戸２

田染荘地域における名勝調査(個別調査)

１住所	豊後高田市田染真中旭(No.92,102,103),田染小崎竹ノ下(No.109,110,112),山ノ下(No.111)

２特徴

No.92　朝日岩屋　旧・間戸村小字旭に位置し、間戸村からの山道からくることができる。朝日岩屋の観音像は堂の中に安置されており、朝日を拝む側に配置されていること名前の由来となっている。小字内地名はダンゴイワといい、朝日観音のある岩を含めてそう呼んでいると考えられる。絵図では特にお堂の文字は見えず白色で囲まれたところがこの地に当てはまると考えられている。中世は朝日岩屋と呼ばれる。

No.102　二宮八幡宮前　旧・間戸村小字旭に位置し、現在でも二の宮下池には向う道として降りることができる。絵図にも描かれている。

No.103　二宮八幡社　旧・間戸村小字旭に位置し、二宮八幡宮前から鳥居を通り中にはいることができる。境内には石造仁王像がある。二宮は田染三礼の 1 つで、間戸明神から二宮となったと考えられる。

No.109　夕日岩屋　旧・小崎村小字竹ノ下に位置し、夕日観音が鎮座している。夕日観音は西側にあり夕日を拝む方向にある。夕日観音からは小崎村を望むことができる。

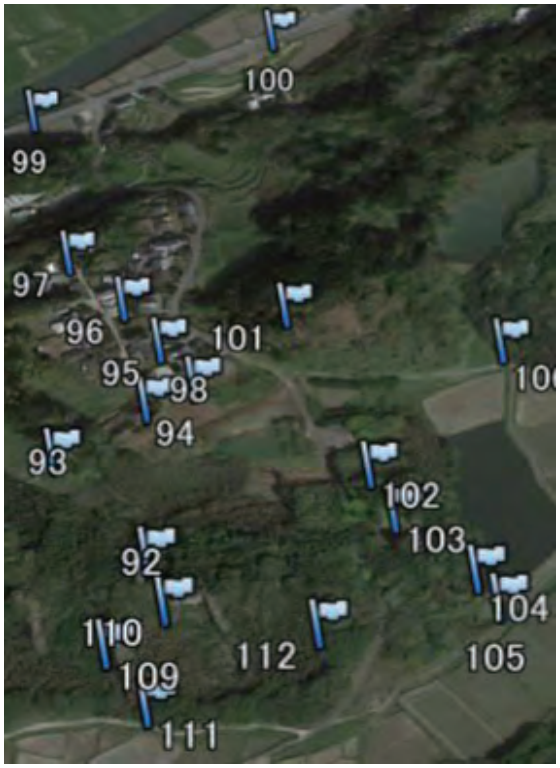
No.110　竹ノ下の視点場　旧・小崎村小字竹ノ下に位置し、夕日観音よりも低い位置より撮影している。田染展望台として現在は使用されている。この位置を絵図の頃も小崎村を書く際の視点場として使用してたと考えられる。絵図には視点場としては描かれていない。

No.111　山ノ下の視点場　旧・小崎村小字下ノ山に位置する視点場で、小崎村のある西側を望むことができる。絵図にはこの地は描かれていない。

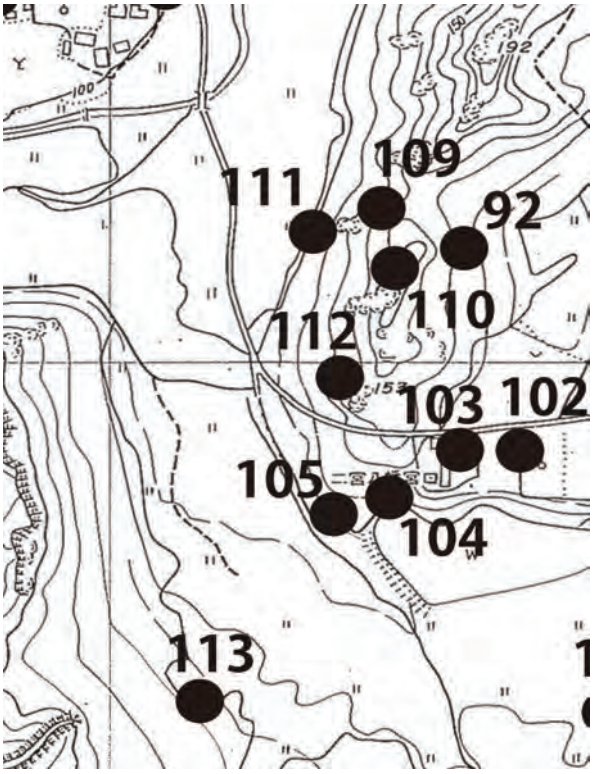
No.112　社らきし跡　旧・小崎村小字竹ノ下に位置し、岩を刳り貫いたり岩を加工している痕跡があることを含めて社ではないかと考えられる。絵図においては建物が確認でき、そこに相当するのではないかと考えられる。

３指定文化財	田染荘小崎の農村景観（重文景）,二宮八幡社の仁王像（市有形）

４周辺図



５詳細図



地図番号：（78）豊後高田 No.92		参考文献	大分県宇佐風土記の丘歴史民俗博物館 『豊後田染荘の調査』　1987

No.92　朝日岩屋　近景

No.102　二宮八幡前　近景

No.103　二宮八幡前　境内

No.109 夕日観音からの視点場

No.110　小崎村の正面

No.111　視点場

No.112　岩加工痕　遠景

間戸３

田染荘地域における名勝調査(個別調査)

１住所	豊後高田市田染真中間戸（No.101）,旭（No.104,105,106）,池ノ内（107,108,113）

２特徴

No.101　稲荷山の間戸寺跡　旧・間戸村間戸に位置しており、二宮八幡社より東に向うと石段があり稲荷山にのぼることができる。小字内地名でイナリヤマというのがあり、頂上には祠などがいくつか立ち並んでいる。間戸村のほうにも上り口があり下山する途中には木造のお堂がある。これを間戸寺跡と考えられている。

No.104　二の宮下池　旧・間戸村小字旭に位置し、二宮八幡宮前の道をいくと見ることができる。絵図の堤の位置とは異なると考えられる。南側を望むとヤケヤマ池方面をみることができる。

No.105　二の宮下池横の道　旧・間戸村小字旭に位置し、二の宮下池の横の道として現在も通行可能である。絵図では、池よりもさらに西側にあり、角度を着けながら水路および道を描いている。

No.106　南西にある池の分岐点　旧・間戸村小字旭に位置する分岐点で、ここから二宮へ向う道とヤケヤマ池へ向う道、集落へ向う道に分岐することができる。絵図でも南側に田、北側に畑をもつ間の道を通りそこを分岐点とする。

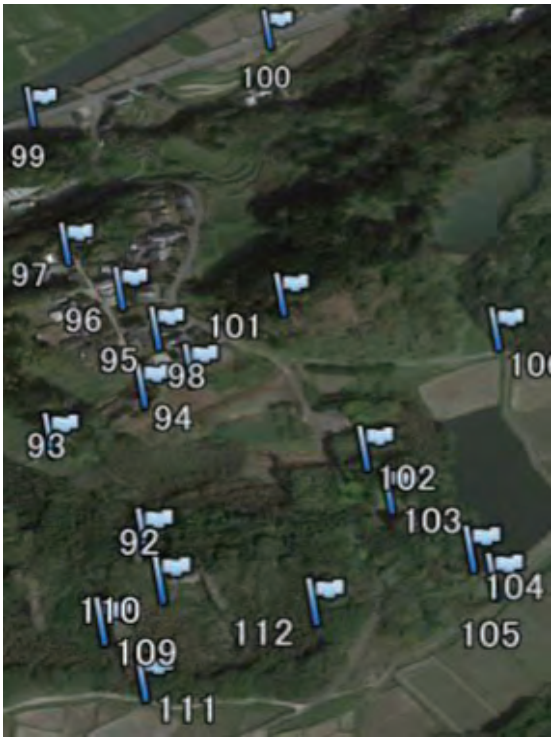
No.107　ヤケヤマ池へ向かう道　旧・間戸村小字池ノ内に位置し、ヤケヤマ池へ向う道である。途中からみるとヤケヤマ池の堤が確認できる。絵図にもこの道は描かれている。小字内地名でヤケヤマというのが周辺にある。

No.108　ヤケヤマ池　旧・間戸村小字池の内に位置する池であり、写真は堤の反対側である南側からの撮影である。現在も使用されており絵図どおりしたの水路に流し込んでいると考えられる。

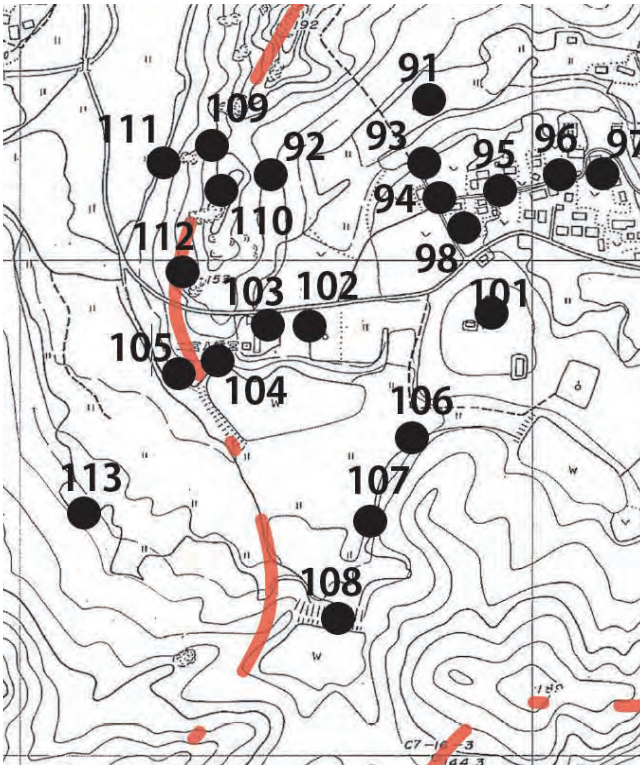
No.113　宝珠院跡　旧・小崎村小字池ノ内に位置し、寺があったと考えられる。石垣が現在は残るのみで寺跡はない。

３指定文化財

４周辺図



５詳細図



地図番号：（78）豊後高田 No.101	参考文献	大分県宇佐風土記の丘歴史民俗博物館 『豊後田染荘の調査』　1987

No.101　イナリヤマ頂上

No.104　イナリヤマ池方面

No.105　二の宮下池の下道

No.106　池へ向う道

No.107　池へ向う道からみたイナリヤマ池　遠景

No.108　イナリヤマ池　遠景

No.113　石垣　遠景

小崎１

田染荘地域における名勝調査(個別調査)

１住所	豊後高田市田染小崎空木
２特徴	

No.114 空木池（峠池） 旧・小崎村小字上大山に位置する池で、現在は整備されており大変状態はいい。しかし天保七年の完成のため、村絵図には描かれていない。

No.115　上空木の視点場 旧・小崎村小字上空木に位置する視点場であり、西側をのぞむと西叡山（高山）が見え、正面をみると小崎村が見える。

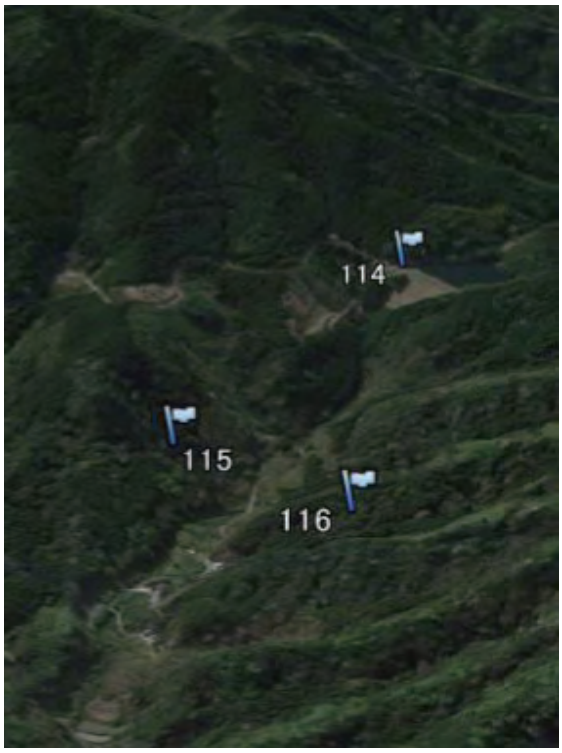
No.116 奥愛宕社 旧・小崎村小字上空木に位置し、奥愛宕には石塔、祠、亀石、石造物、鳥居など石加工品が多く点在している。旧・小崎村の絵図には赤い屋根を持つ建物を描いている。また奥愛宕社地蔵堂は、堂という文字囲むようにして描かれている。

No.117　タノキの三嶋社 旧・小崎村小字タノキに位置し、鳥居を通り本殿からすこしはなれたところに拝殿があり、石段を登ると本殿に至ることができる。燈籠のほかに本殿の前には石造物がいくつかある。小字内地名でミヤノマエというのもある。絵図では山神と表現され赤い屋根を持つ建物が描かれている。

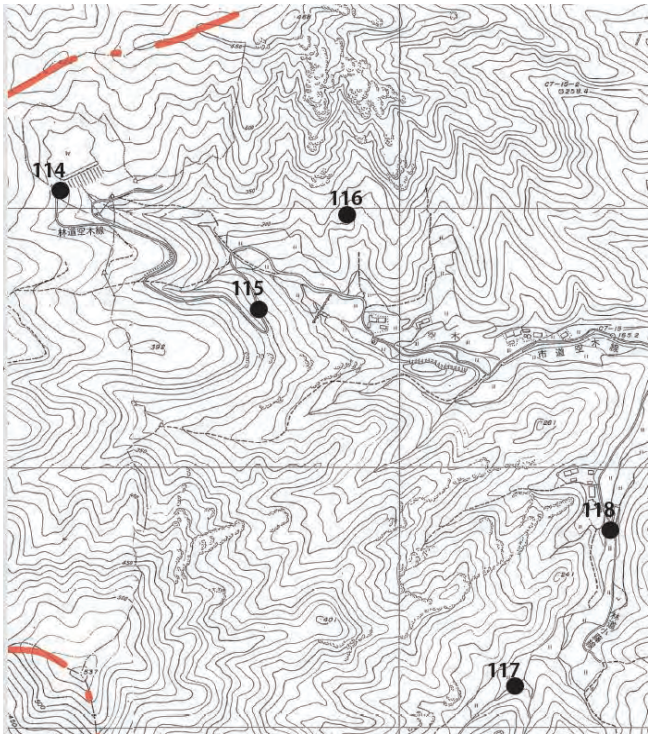
No.118　タカイの道と川の交差地 旧・小崎村小字タカイに位置している川と道が交差する地点である。絵図では交差するように描かれておらず道のほうが分断されているように表現している。

３指定文化財	田染荘小崎の農村景観（重文景）

４周辺図



５詳細図



地図番号：（77）豊後高田 No.114	参考文献	大分県宇佐風土記の丘歴史民俗博物館 『豊後田染荘の調査』　1987

No.114　空木池（峠池）　遠景

No.114　小崎村方面

No.115　西叡山（高山）

No.116　鳥居　遠景

No.116　祠　遠景

No.117　三嶋社　鳥居　遠景

No.118　道と川の交差地

小崎２

田染荘地域における名勝調査(個別調査)

１住所	豊後高田市田染嶺崎赤迫（No.119）,多々良（No.123,124,125）,原（No.126,127）,山の下（No.128,129）

２特徴

No.119　雨引社　旧・小崎村小字赤迫に位置する神社で、境内周辺には絵図にもある岩がある。赤い屋根をもった建物としても雨引社は描かれている。間戸岩の岩峯は雨引社から描かれたとも考えられる。

No.123　愛宕社　旧・小崎村小字多々良に位置し、2 つの上り口がある。しかし、祠や石造物などが立ち並ぶほうの上り口は現在使用されていない。表の道は池の付近からのぼり本殿に向う道である。従来は池側ではないほうを主な道としていたと考えられる。

No.124　愛宕池堤　旧・小崎村小字多々良に位置する池で、現在は愛宕社にのぼる道の途中に堤の入口がある。絵図でも表現されており、池の横の道も描かれるが現在は通り抜けができなかった。

No.125　愛宕社鳥居　旧・小崎村小字多々良に位置する鳥居で池に向かう道の途中にある鳥居である。愛宕社境内にいたる道もそこから始まり本来の道であると考えられる。絵図には特に描かれていない。

No.126　原の堂様　旧・小崎村小字原に位置している薬師堂で薬師堂内には薬師様がいる。

No.127　小崎の視点場　旧・小崎小字原に位置する視点場であり、絵図では田んぼであるが、現在ではホタルの里が立地している。夕日観音側や薬師堂に至る道を臨み、西側は愛宕社方向への道がある。

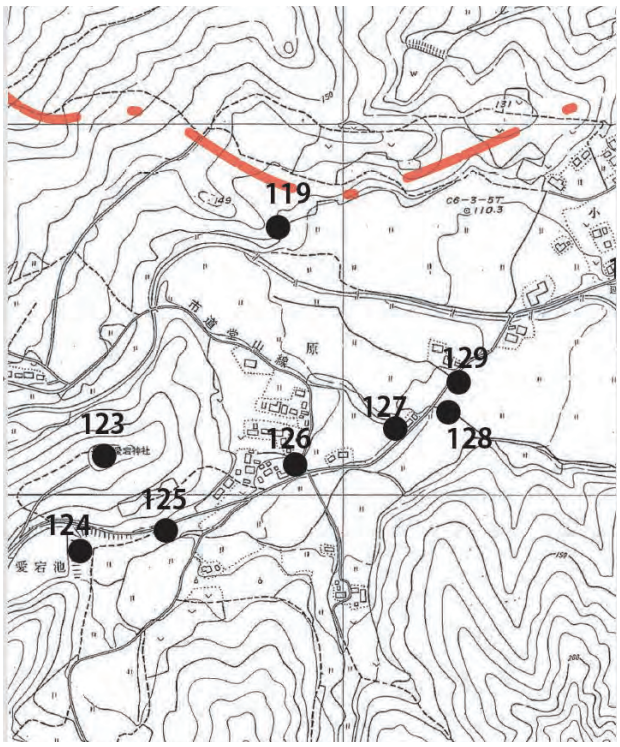
No.128　切池　旧・小崎村小字下の山に推定される池で、現在の痕跡としては堤が道路となりその池の形に沿うように田が広がっていることから推定した。絵図には切池が描かれている。

No.129　山の下の視点場　旧・小崎村小字下の山に位置する視点場で東側の夕日岩屋などを含めた岩が見える。

３指定文化財	田染荘小崎の農村景観（重文景）

４詳細図

５詳細図



地図番号：（78）豊後高田 No.119	参考文献	大分県宇佐風土記の丘歴史民俗博物館 『豊後田染荘の調査』　1987

No.119　雨引社　鳥居　近景

No.123　愛宕社　遠景

No.124　愛宕池堤　全景

No.125　鳥居　遠景

No.126　薬師堂内

No.127　夕日岩屋側

No.128　切池　推定地　近景

No.129　視点場　夕日岩屋方面

小崎３

田染荘地域における名勝調査(個別調査)

１住所	豊後高田市田染小崎上野原（No.120,121,122）,田染真中長野（No.134,135,136,137,138）

２特徴

No.120　小崎村の御札　旧・小崎村小字上野原に位置し、御札の特定地として現在看板が建てられている。絵図にも御札が描かれている。

No.121　延寿寺　旧・小崎村小字上野原に位置し、門から入ると本堂と境内にある石造物が確認できる。絵図によると延寿寺の記載と屋根持ち建物が描かれている。境内にある延寿寺石殿が県指定となっている。総高は131ｃｍ、石材は凝灰岩である。基礎は一石の二重。中段の下部は蓮華座状。屋根は入母屋造。軸部の正面と裏面は六寺蔵を、向って右面には虚空蔵菩薩1躯、左面には観音と思われる2躯が陽刻されている。なお、虚空菩薩の面の縁には「旹応仁武歳丁亥八月彼岸日大願主宇佐栄忠謹言之」と記されている。中世は、田染氏の屋敷であった。

No.122　尾崎屋敷跡　旧・小崎村小字上野原に位置する屋敷あとで、絵図には屋根が多く描かれている。小字内地名としてナカヤシキやドウノマエなどが周辺に広がっている。中世は宇佐宮神官田染氏の屋敷であった。高山の尾根が張り出した場所であり、そこから「尾崎」、現在は小崎と呼ばれ、地元では「台薗」(ダイソン)と呼んでいる。

No.134　早神社に抜ける道　旧・中村小字長野に位置するが道として現在は使用されているが、絵図の頃想定されるほど明確ではない。周囲の小字内地名ではカワダケデンという地名も残っている。

No.135　長野スイシの池　旧・中村小字長野に位置する池であるが小字内地名でスイシという場所がありこの池に相当するのではないかと考えられる。絵図では池は描かれている。

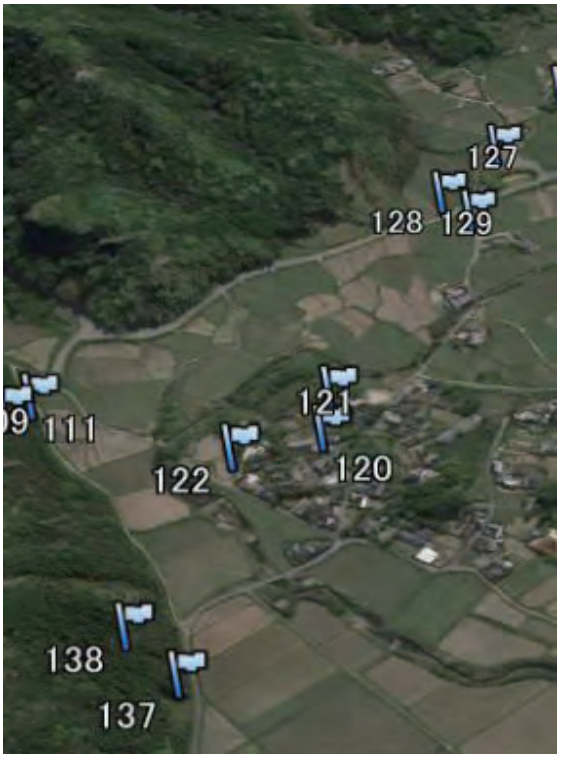
No.136　長野の石造物群　旧・中村小字長野にあるが、現在は絵図に示されている早神社、石造物群が残っている程度である。

No.137　早神社　旧・中村小字長野に位置し、絵図には早神社が位置しているが、現在では跡が見られず電波塔が立っている。

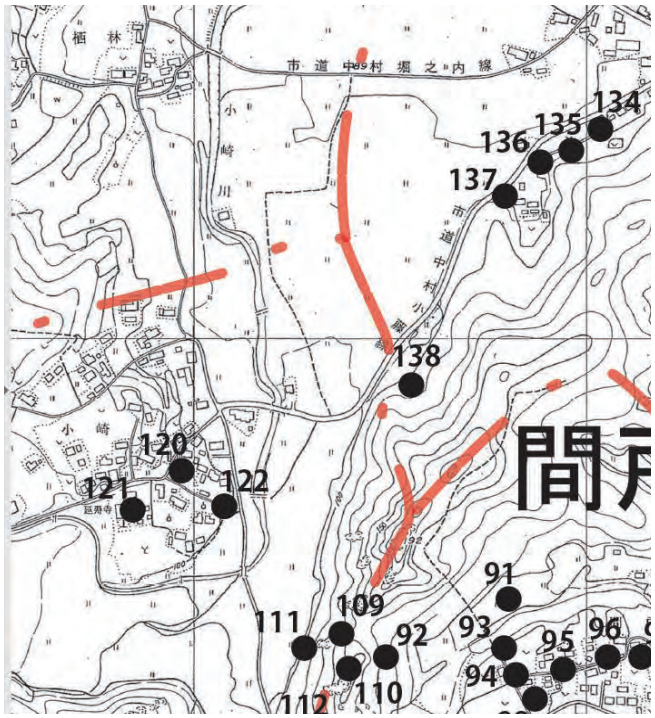
No.138　長野観音寺跡　旧・中村小字長野に位置し、絵図上では長野観音寺があったとされている。現在では、石塔や墓石が残っているのみである。

３指定文化財	田染荘小崎の農村景観（重文景）,延寿寺石殿（県有形）

４周辺図



５詳細図



地図番号：（78）豊後高田 No.120	参考文献	大分県宇佐風土記の丘歴史民俗博物館 『豊後田染荘の調査』　1987

No.120　御札（高札）

No.121　延寿寺　本堂

No.122　石碑　遠景

No.134　元宮八幡宮方面

No.135　長野スイシの池

No.136　石造物群　近景

No.137　早神社跡

No.138　長野観音寺跡

国東半島「田染」名勝調査報告書　史料集

史料１　貝原益軒『豊国紀行』（元禄７年（1694））

高田より木付の間には馬驛なし、山中を通るに其ノ間田染と云村あり。高田より三里あり。此所にて暫く休む。田染より木付へ四里半あり。田染より東に半里許行て、道の西の傍に河の畔に高く峙ちて大岩十五六許つらなれり。其高さ十間餘り、或いは八九間あり。奇観なり。羅漢寺の前なる大岩に似たり。其外かやうの珍らしき岩まれなり。其所をなべ山といふ。夫より南方に山を越ゆくに、此間道さがしく坂長し、東南の方に山を登る事半里許にして嶺より木付の方へ下る事一里半あり。此坂をはたかた峠といふ。坂より田染のかたにははたかたといふ里あり。

史料２　卍元師蛮『延宝伝燈録』（延宝６年（1678）著、宝永３年（1706）刊行）

円龕禅師諱昭覚、国東田染人、姓大神、父曰惟将、帥年甫十四、発出塵志、抵相之寿福、礼寂庵昭禅師、鏟□（髟に米）奉戒、参究禅旨、遍遊名区、暦應初還故里、躋豊前大巌窟、其窟縦横若干丈、容千人、石屏東列、石橋前横、便結宇居焉、延文中、雲樹徒建順者、来見師與相謀鎚鑿一運、妙相便成、釈尊文殊普賢、及十大弟子、二八應真、五百聲聞、侍衛金剛都計七百余躯、石像殊儀異貌、儼然立位、名耆闍窟、今羅漢寺是也。

史料３　『豊州前後六郷山百八十三所霊場記』（江戸時代後期）

卅四番　同村

一、あさ日岩屋　　本尊やくし如来

是より間戸寺迄二丁ほと

三十五番　同村

一、あさ日山まと寺　　本尊やくし如来

是ハ寺はそんして今ハ有也、本尊岩屋ニ有、二丁ほと

三十六番　同村札此所ニ納　　むぢう

一、朝日山岩屋　　本尊やくし如来

是より大門坊迄五丁、此岩屋あなふかし、間戸村ニてたいまつもらい入見るべし

史料４　井上円了『南船北馬集　第２編』（明治４０年６月の項）

（漢詩部分の訳は東洋大学創立一〇〇周年記念論文集編纂委員会『井上円了選集　第 12 巻』(1997 年) のもの）

十六日　晴れ。午前、高田を発し、山行数里にして田染村に着す。途上所見、左のごとし。

武陵渓上路横斜、欲賞夏光時駐車、万緑叢中紅点々、杜鵑無語只看花、

（武陵桃源郷のごとき谷のほとり、道は斜めによこぎり、夏の光にきらめく風景をめでようと、ときどきは車をとどめたのだった。すべてが緑におおわれ、くさむらにあかい花が点々と色を添えているが、ほととぎすの声もなく、ただ花をみるのみであった。）

所々、刈麦すでに終わりて挿秧を始む。農家の繁忙知るべし。田染村に入るや、生徒路傍へ整列して歓迎す。会場は小学校なり。
十七日　雨。当村には八景あり。その中にて奇なるは鍋山の勝なり。晨起してここに吟笻をひく。昨日以来の経過を詩中に入るる。

端午時過梅漸黄、渓辺已見挿新秧、薫風西叡山南路、一夜来投田染郷、
(端午の時節もとうにすぎて梅はようやく黄ばみ、谷川のあたりではすでに新しい苗が植えられているのを見た。初夏の青葉をふく風のなか、西叡山の南の道をたどり、一夜を田染村にすごしたのであった。)

樹色入窓灯影青、水声懸処認飛蛍、淡雲繊月多幽趣、繞屋翠巒為枕屏、
(濃い樹木の色が窓辺より入って、ともしびも青みをおびるかと思われ、渓水の流れる音のするあたりに蛍のとびかうのが見える。淡い雲やかぼそい月など、ここには奥深いおもむきがあり、家をめぐるみどりの山々はまるで枕屏風のように思われたのであった。)

晨起行過古社西、危岩兀立似雲梯、天工奇絶比無物、俚俗呼成小馬渓、
(朝早くに古い社〔やしろ〕の西を散策すれば、めずらしい形をした岩が高く立ちあがって、まるで雲にとどくはしごのようである。自然のたくみの絶妙であることは比べるものとてなく、この地の人々は小耶馬渓と呼んでいる。)
　人これを小馬渓と呼ぶも、決して耶馬渓の付庸にあらず。あるいは紀南の瀞八丁に似、あるいは小豆島の寒霞渓に似たるところありて、全然独立せる一奇勝なり。これを鍋谷というは雅称にあらず。よって余は南屏峡と名付く。西叡山と好一対となる。田染八勝とは大堂梵鐘、熊岳山桜、桑川流蛍、池部群鷺、間戸涼蟾、本宮晴嵐、鍋崕叫猿、叡峰雪暁をいう。余、一詩に八勝を入るる。

田染由来風月幽、国東此景最為優、雪明西叡峯頭暁、猿叫南屏峡畔秋、間戸桑川宜夏望、本宮熊岳適春遊、鷺飛鐘吼朝兼夕、八勝四時好散憂、
(田染の地はもとより風月もおくゆかしく、国東地方におけるこの風景はもっともすぐれたものである。雪をいただく西叡山峰のあかつきのさま、猿の叫ぶ声がひびく南屏峡の秋、間戸や桑川は夏のおもむきをみるによく、本宮や熊岳は春の行楽によし。鷺がとび梵鐘は朝夕ともにひびきわたる。田染の八景勝は四季を通じて人の世の憂いを消すによい。)

　聞く、臼野にも八勝ありという。余、これを一見せざりしは遺憾なり。午後、大雨をおかして出演す。後に茶話会ありて、修身教会設置を決議す。発起者中に特に尽力ありしは豊田玄智氏、吉田秀導氏、桑尾重代氏等なり。桑尾氏は校長なり。

十八日　曇り。鍋谷を経て田原村〈現在大分県西国東郡大田村〉に入る。生徒の歓迎、田染に異ならず。この辺り山容雲態おのずから仙郷の趣あり。

南屏峡外一郷開、雨過挿秧処々催、雲容山態非人境、民情風俗亦蓬莱
(南屏峡のはずれに一村がひらけ、雨あがりのなかところどころで田植えがおこなわれている。雲のすがた山のようすは人の住むところとも思われぬ。この地の人の心も風俗もまた神仙が住むという蓬

莱のおもむきがあるのである。）

を吟詠しつつ宝陀寺に着す。寺は大同年間の創立にして、有名の古刹なり。山門は丘上にあり、緑陰庭に満つる所、燕子花を見る。夏光の間、雅なるは愛すべし。
（後半略）

二十二日　（前半略）
日向地方平地多くして山水の景に乏しきは、予想外に感ぜしと同時に、豊後地の平地に乏しくして山水の景に富めるは、また想像の外に出でたり。紀州熊野地と相対して日本の絶勝地と定むべし。人情も淳朴にして、よく賓客を厚遇歓待する風あり。また、風流を愛し雅致を喜ぶ風あり。ただ、公道および公共物に楽書を見ること、他府県より多きように感じたり。また、迷信も比較的多きがごとく認めり。また、宗教は一般に普及するも、旧式を固守するにとどまり、活動の風をあるを見ず。学校教育も一段の発展を要するがごとし。これ、余が今より修身教会を開設して公徳を養成し、風俗を矯正し迷信を一掃し、人をして進取活動せしむるの必要を感じたるゆえんなり。

史料５　井上円了『日本周遊奇談』（明治 44 年 7 月 23 日刊行）

第四類　山水温泉
第四九話　山水命名
　耶馬渓はもと中津辺りにて、その地が山の谷間なる故、ヤマ（山）と称したのを、頼山陽これを耶馬と改めた。また、小豆島の古来神掛ととなえたる地名を、ある人これを寒霞渓と改めた。余もそのまねをして、豊後大野郡沈堕ととなうる瀑布を鎮蛇として、この瀑布は前後二流のかかりて落つるものにて、高さは一つは十五間、一つは二十間なれども、幅は三十間もある。あたかもナイアガラの小模型である。また、西国東郡鍋山の絶勝を南屏峡とし、姫島その形軍艦に似たれば艦島として、飛騨益田川中山七里の間に岩石相重なりて一大岩となり、天然に奇形をなせるものあるも、その名のなきを聞き、あたかも十六羅漢の列を成して天より降下する状に似たれば羅漢岩と命名した。北海道網走にニクル山の地名あれど、漢字をこれにあてはめてないから、新米山と定めた。そのほか豊後佐伯の煙草峰のごとき、壱岐郷浦の多景峰のごとき、余の雅名を下したものがたくさんある。

史料６　『西国東郡誌』（大正 12 年刊行）第十五章　古趾勝域

第十節　田染八景　田染村
　田染郷は旧時広大の境域を有し、山谷の奇勝に富み、絶景の名区多し、北方河内村界より東田原村界に至るの間、泉石絶佳の境鮮しとせす、嘗て十市石谷此に遊び、八景を選抜して其書画を作り、前年井上円了博士之れに詩を題すと云う。八勝の名乃ち左の如し

　　叡峯曙雪　　池部群鷺　　桑川蛍火　　本宮晴嵐
　　間戸山月　　大堂晩鐘　　熊野櫻花　　鍋山啼猿

（中略）

第十六節　鍋山　田染村

『仰ぎ見る空も危し疾く過ぎよ、崩残りたる岩の下道』實境に臨まずして此和歌を一讀せば、誰れか慄然として其危険を想はざる者あらんざれど、公道川を隔てゝ坦々砥の如く馬を馳せ車を駆る、平安快意、些の苦難を感ずるものなし、田染村より田原村に至るの途上、前路の左傍に一森の社頭を望み〈三ノ宮八幡神社〉右の方、絶壁削るが如き数基の磈巌、根底を流れに托して、屹然雲表に聳ゆるを見るもの、之を名けて鍋山の溪潤と云う、風色絶佳の景光は、誌中既に序記したれば、此に左の詩賦紀文を掲げ、以て名区の實境を詳悉するのに便に供せん。

過鍋山　　近藤弘記

危巌屹立聳虚空　道傍川流一線通　蘿壁松窓家八九　山人住在画図中
峻巌峭壁似仙寰　流水浮雲意自間　路轉俄離幽絶域　魚商鹽賣復人間

史料７　『田染村志』（昭和７年刊行）第九章　神社

第七節　村社三ノ宮八幡社

三ノ宮八幡社は、田染村大字上野字鍋山に在り。俗に三ノ宮と称す。地は田原村に通ずる縣道に沿ひ、田染川の上流に枕む。所謂鍋山耶馬の境域にして、社頭十丈の懸崖屏立し、頗る形(ママ)勝の地なり。

史料８　『田染村志』（昭和７年刊行）第十章　寺院

第四節　西叡山高山寺

高山寺は田染村大字横峰に在り。西叡山の頂上今猶石祠を存すと云ふ。豊後国志に云ふ。高山寺号西叡山、在来縄郷佐野村東南高山、山勢秀抜、旧有七堂伽藍、堂宇荘厳、今廃、礎石尚存すと。洛の叡山、武州東叡山と並称して、日本三叡山の一に居り。其の開創最も古く、盛時の壮観想ふべし。六郷満山灌頂所にして、序分本山八山中重要の位置に在り。弘安七年参月二十五日、将軍の教書に基き、同年九月高山寺を首め、伝乗寺、富貴寺、間戸寺、岩脇寺、胎蔵寺、慈恩寺、西蓮寺等は、異国降伏祈祷の巻数目録を上申し、又正応四年三月六日、六郷山各寺は、将軍の教書に依り、異国降伏の祈祷を為し、毎月其の巻数を上申すべき旨を達せらる。六郷山諸勤行注進目録に云ふ。年中勤行正月八日会〈正月八日勤之〉日次勤。初後入室讀誦経典、於六所権現御寶前、二季祭、五節句等、今始御祈祷、長日薬師経十二巻、同仁王経講讀と。以て其の祈祷所、灌頂所として重ぜられしを観るべし。蓋灌頂は天竺の国王即位の時、四大海の水を以て頂に灌ぎ、以て祝意を表するに始まり、所謂二種灌頂に伝教灌頂并に結縁灌頂あり。伝教灌頂一に伝法灌頂又受職灌頂と曰ひ、如法に行を積みたる人に対して秘法を伝授し、阿闍梨の職位を紹がしむるを云ふ。結縁灌頂は唯佛縁を結ばしむる為に、一般の人を灌頂壇に導き、花を投ぜしめて其尊の印真言を授くるに止まり敢て秘法の授受なし。即ち灌頂所は僧職を授くる實権を握れるものなれば、其の威力あること略々想像すべし。本尊は七佛薬師如来、観世音菩薩及び六所権現なりきと云ふ。伝説に曰く、応神天皇の十六年、帝西叡山に行幸し給う。時に巌壁より白狐白狸現はる。帝深く之を喜ぶと。今其の巌を八幡宮の御座石と云ひ、本地弥陀観音、六所権現結縁の姿を現したる処を戸無ノ岩屋と称す。什寶に左の三点あり。日野山岩脇寺に蔵す。

史料９　『田染村志』（昭和７年刊行）第十四章　名所旧蹟

第二節　田染耶馬

天斧鬼鑿、荒の世、一夜揮ひて、田染闔郷の奇嶽怪石を削刻し来る。所謂田染耶馬なり。而して其の趣態は寧ろ豊前の本耶馬に勝る。科学的に謂えば、火成岩に対する風化水蝕作用なり。勝域汎きに弥る。大別して、熊野耶馬、鍋山耶馬、間戸耶馬の三となすを得べし。

熊野耶馬　鋸山〈田原山〉より、一脈の剣峰西に伸ぶもの、即ち熊野耶馬なり。筍起群立せる怪奇の峰、亦立石より望むを得。称して五ノ岩と曰ふ。更に伸びて熊野山に及び、到る所熊野社一帯の奇勝となる。仁聞作と伝ふる熊野社畔の大磨崖仏は、天塹と相須つて、其の霊腕を千古に艶称せらる。斯のみを賞観するも亦眼を刮するに足る。況んや全豹をや。探勝の客は直ちに日豊線立石駅若は中山香駅より到るを得べし。道途稍険なるも、所在の勝景は流汗の労を償うて余あり。

鍋山耶馬　田染村より田原村沓掛に到る縣道に沿ふ。村社三宮八幡社畔の谿谷、即ち鍋山耶馬なり。田染川の南岸、数十丈の懸崖壁立して、葛蘿之に纏ひ、崖頭往々老松が舞ふが如きを観る。水は清冽に山は高く、仲秋霜花一たび飛べば、満崖の葛羅（ママ）凡て紅化して、一幅の丹青を現じ来る。春には流鶯あり、初夏には河鹿の銀鈴を揮ふあり。坐ろに行客をして低回去るに忍びざらしむ。

間戸耶馬　烏帽子嶽の余脈伸びて、陽平を経、下村の平地に突出するもの即ち間戸耶馬なり。此処にも風化水蝕作用最も巧妙に行はれ、所在洞窟多し。就中朝日岩屋、夕日岩屋、穴井戸等最も現はる。俗諺戯謔して曰く田染には十八間の窓〈間戸、窓國〉ありと、亦佳謔とすべし。背面小崎道路より観るに孤松を戴ける岩石の趣態凡ならず。寧ろ深耶馬の勝に軼ぐるを覚ゆ。此の一帯凡て佛蹟の集団地なり。

第三章　田染八景

杵築の画伯十市王洋〈或は云ふ其の父石谷なりと〉嘗て田染に遊び、支那瀟湘八景乃至我が邦の近江八景に倣ひて、田染八景を撰び、其の図を画きたるに始まると云ふ。杵築の儒員島徳世亦八景の詩を作る。後年井上甫水博士〈円了〉亦斯の地に遊び、八景に詩を題す。博士乃鍋山の為に、佳字を撰びて南屏山と曰ふ。八景左の如し。但し池部群鷺は、近年耕地整理排水を施行したる為め、其の實を失ふに至れり。

叡峰曙雪　　池部群鷺　　桑川蛍火　　本宮晴嵐
間戸山月　　大堂晩鐘　　熊岳櫻花　　鍋山啼猿

国東半島「田染」名勝調査報告書

2019（平成31）年３月

編　　集　　豊後高田市教育委員会文化財室
発　　行　　豊後高田市教育委員会
〒872-1101 大分県豊後高田市中真玉2144番地12
印　　刷　　有限会社　宗印刷所
〒872-1105 大分県豊後高田市西真玉2281番地1

国東半島「田染」名勝調査報告書
発行:豊後高田市教育委員会
発行日:平成31年3月